
我が家のお猫様！

銀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我が家のお猫様！

【Zコード】

Z0746W

【作者名】

銀

【あらすじ】

古人曰く。孫家には守り神がいる…。

え？ 守り神って俺、ですか…。

俺って神様じゃなくて…今はねこ、なんだけど…。

とある理由で天界から墮ちてきた少年。彼はこの乱世で時にのんびり、時にハードに生きていく……ねこだけど…。

主人公（前書き）

はじめて小説を書いてみます。
拙い文章ですが、見てもいいんじゃないでしょうか。

ふるわーぐ。

ここはこの街で一番眺めがいい。
俺のお気に入りの場所だ。

下には賑やかな街の風景が見渡せる。
人々はみんないつもと変わらない笑顔を浮かべ、今日も暮らしているようだ。
それを上から見下ろしながら、欠伸を一つ。

上には燐々と照りつける太陽と白い雲が浮かんでる真っ青な空。
そよそよと吹く風が涼しくて、ちつとも暑さを感じさせない。
まだお昼寝には早い時間だけど、瞼が重くなつて来た…。
けど、今はまだ寝るわけにはいかない。

その眠気を覚ますように空を田を細めて見つめる。
いや、正確にはその先にある場所を見つめた。

そう。あの雲の…この空の…ずっと先。
ずっとずっと先に俺の故郷がある。

故郷をこの国の人々はそう呼ぶ。

俺はそこから堕ちてきた。いや、墮とされた。

持っていた力を全部、封印されて…。

そういえば、みんな元気なのかな…。

そんな風に故郷の友達のことが頭に浮かぶ。

あつ、あいつらも別のところに墮とされたんだつたつけ？
少しはおとなしく…。

…だめだ。あいつらのそんな姿が想像できないぞ…。
むしろ楽しんでやうな予感がヒシヒシと…。

。

ま、まあ、元気なのはいいことだし…。

…あんまりバカな騒ぎを起こしていいといいなー。

佐伯先生…また胃薬飲んでるのかな？

少し浮かんだ嫌な考えを振り払うように頭を振つていぬと、

「蓮^{れん}、どうしたの～？」

「れ～ん～、じはんだよ～！」

俺のことを呼ぶ一人の声が聞こえてきた。

真下を見てみると、俺を探している桃色の髪の一人の姿が見えた。
どうやら晩飯のようだ。

俺はすぐに登つていた場所から飛び降り、一人の下へと向かつ。

「あつ！ ねえさま、いた！！」

「蓮！！」

俺を見つけた一人はその顔にとびっきりの笑顔を浮かべた。

「もう～蓮～？ 一体どこに隠れてたの？」

二人の内、背の高い方の活発そうな女の子…雪蓮がそう聞いてくる。
別に隠れていたわけではないんだけど、結構探させてしまったみたいだしな…。
俺はぺこりと頭を下げる。

「まったく。蓮がいなくなつたーって、蓮華が心配して泣きだそうとしてたわよ？」

「ね、ねえさま！」

雪蓮にそう言われて慌てる、人前だと少し大人しくなる女の子…蓮華。

恥ずかしいのか、顔を真っ赤にして雪蓮に詰め寄つてゐる。

雪蓮はそれを楽しそうに笑いながら小声で何か蓮華に言つてゐるみたいだ。

この二人は、今の俺の家族でこの家の大事なお姫様だ…。
いづれは吳の王様にもなるんだろうな。

俺は昔からずつと遊んであげたからか、すごく懐かれてる。実は寝ないで我慢していたのも…一人のためだつたりする。まあ、たぶん昼飯を食べたらすぐ寝ちゃうけどね…。

今日は満月の夜だし、今のうちにたくさん寝溜めしておかないと。

「さてと、母様達も待ってるし…戻るわよ…」

「はい！ れん、いくよ？」

そつまつて俺を両手で抱きかかる蓮華。

四歳の女の子に軽々と抱きかかえられる俺。
これにももう慣れたもんですよ、はい。

え？ なんで抱きかかれるのかって？

答えはずつぐく簡単。

「蓮？ 聞いてるの…？」

「…やんつ…」

「ね、ねえわよー。そんなこいつらひげをひつぱつたら…」

だつて今の俺の姿は…。

「「あ…」「

「——ちがい。」

猫、なんだもん。

ふりがな（後書き）

見ていただいてびつもです。

誤字脱字、間違っている箇所などあれば指摘していただけると嬉しいです。

よろしければ感想などもいただければ作者の励みになります。

第一話　ねこライフ。

俺の朝は早い。

夜が明けて、空が白んでくる頃には起き出し、寝台から出る。実はこれがなかなか大変だったりする。

理由は、今も俺を抱き枕かぬいぐるみのよひに抱きしめていらっしゃる、孫家の次女さんだ。

雪蓮ならば身体がもう大きくなつたので、隙間から樂々と抜け出せるのだが、蓮華はまだ身体が小さいので、丁度いい感じにロックみたいになつて抜け出すのに大変苦労する。しかもこの子は俺がいないと感じると、起き出してくるのだ。そして俺を探し始める。

以前にそれを何度かやられたので、母親である孫堅こと…水蓮にぬいぐるみを用意して貰つて、それを俺の身代わりにする」とで脱出を図つている。

孫家のねこは身代わりの術が使えるのだよ……。

必須技能ともいえるな。

さすがと城を抜け出し、そのまま港へと急ぐ。
そこには海がある。

そう、つまり…。

「いつでも新鮮なお魚が食べれるところ」とだ――

「おっ？ 猫神様じゃないか…。ほら、さっき取れたばかりの魚だよ！」

「いや～」

「この人たちは俺が来るといつしてもお魚を分けてくれる。でも、これはこの人に限ったことではなく…この街の人、みんなが結構くれたりする。なんでも俺はこの街のマスコット的な存在なんだとか。もちろん、ファンサービスは欠かせない！」

「お～…！ 今日もいい毛並みしているな！」

そう言つて、俺の頭を撫でてくる漁師さん。

大きくてじつじつした手だが、この手がたくさんのお魚を取つて来るので。

少しくらい頭がグラグラするのは耐えよしじゃないか。
これでも前よりはうまくなつたんだから…。

朝食をこしつして済ませた後は、ゆっくり歩きながら城へと戻る。食後に激しい運動はしちゃダメだよね。

もう多くの人々が活動を始めて、どんどん賑やかになつて行く街。今日も頑張つてください。

そんな光景眺めながら、城内に入る。

そして、あいさつをしてくれる侍女たちに返事を返しながら、悠々と廊下を歩いてこると。

「蓮ー！ わはよー！」

「あー、今日はこつもよつ早く戻つてきたのね」

「…わはよつ

孫家の親子に遭遇した。

どうやら今から三人で朝食のよつだ。

俺もあこせつを返しておべ。

「こやー」

「よつと」

俺を軽々と抱える雪蓮。

そして…。

「ん？ なんか魚のにおいがするわね…。蓮、また外で朝ごはん貰つたの？」

「二ちゃん」

まさこその通りなので、返事をする。

お魚、最高～

「魚つてことは、港まで行つたのね…。結構ここから距離があるのに…」

呆れたといった感じで俺を見てくる水蓮。

……わかつてないな。

その距離を頑張ればおいしいお魚が食べれるんだぞー！

行くでしょー 普通ー

猫まつじぐいーーー！

抗議の目線を水蓮に向けてこむと、さつきから視線を別のところから感じるのでその方向を見る。

「…………」

セイジー、と俺を見つめる蓮華がいた。

う、うん。見るからに不機嫌だ…。

これはひょっとして、いやしないでも…。

「蓮華が蓮がいなくなつたーって泣いてたわよ…」

「宥めるの大変だったんだからね…。貸しーつ
小声で俺にそりこつてくる似たもの親子。

貸し一つって汚いな、さすが水蓮、汚い！
てかやつぱし、俺の所為なんですか…。
はあー。

「…………」

未だに俺を無言で見つめる蓮華さん。

正直こわいです。

これは将来、病んでしまったりしないよな…。

俺はそこはかとなく不安になりました。

不機嫌な蓮華ではありましたが…。

そこはこの蓮さん、伊達に何年も飼い猫をせつてござるよ。

足にすりすり、お腹を見せて撫でてくれポーズ、喉を「ロロロロ」と鳴らす、など飼い猫に必須の108の技を駆使して、うまーへ、じょーずに甘えてみせれば、あら不思議。

いつの間にかすっかり機嫌を直して俺を撫でている蓮華の出来上がり！

ふつ、ちゅういな…。

俺にかかるばこんなもんさ。

すみません、うそです。
結構しんどかつたです。

何度もやりたくないです。

自分調子に乗って、すみませんでしたー。

そんな感じで少しグツタリと昼飯を食べ終え、ゆっくつとお昼寝でもしようとするが…。

「蓮！ 遊ぶわよー！」

今度は大変元気な長女に捕まりました。

いつして始まりました。

雪蓮vs俺、蓮華連合とのかくれんぼ対決。

俺はまあ、隠れた雪蓮を探す蓮華のサポートを担当するだけなんだ
けどね。

この血縁の五感をフルに使つて見つけやがるぜ。

では、スタートーー！

「れんー、どっか?」

「いやーー。(右)」

蓮華の腕に抱かれながら、においのある方を指差す。
それに蓮華は頷いて進んでいく。

今の気分はオペレーター。

次の通路を右、(左)はまつすぐで、もつ一度右だ……などなど様々な指示を蓮華に出し、どんどん進んでいく。

そして、部屋の前でにおいが途切れている所を見つけた。
つまりあの部屋の中に雪蓮はいる!

「いやー、いやー。(左)、(左)ー。」

「(左)のへやでいるのね。いくよ、れん」

そして、部屋に突入。

しかし(左)の部屋は倉庫だったみたいで…すぐには見つからなかつた。

「わいと、ねえねまほぞーかにかくれてる。さがすよ、れんー。」

「いやーー。(左)」

(左)して(左)みつぶして探ししていくと、一番大きな木箱からわずかに音が鳴つた。

そこかーー。

「二十九一。」

俺の指示で蓮華がすぐさま木箱のフタを開けると……。

「ねえとも、みーつけた！」

「あいやつや、見つかっちゃったか～」

そこには予想通り、雪蓮がいた。

この勝負、俺たちの勝ちーー！

さてと、結構頑張ったから疲れたし、お昼寝を……。

「なら次は私が鬼ね。蓮華、隠れていいわよ

「うんー。」

……まだ続くみたいです。
「ううう。ドナドナ……。」

結局、夕飯まで遊びまわることになった。
確かに楽しかったけど、めっちゃ疲れた～。
そして今はすぐねむー、です。

水蓮の膝の上に座つて頭を撫でられていたら、だんだんと瞼が落ち

てきた。

「あらり、もうここで？」

「いやー」

うん、もう限界。

「ふふふ。仕方がないわね……おやすみなさい、蓮」

おやすみ……。

第一話　ねじライフ。（後書き）

見ていただいてありがとうございます。

まだまだ原作ははじまりません。

スロースタートですけど、お付き合い頂けるとありがとうございます。

誤字脱字がありましたら、報告をお願いします。あと感想などもお待ちしています！

第一話　お風呂でペーパークー？

お風呂。

それは、身体の汚れを落とせる素晴らしいもの。

お風呂。

それは、一日の疲れを癒してくれるオアシス。

お風呂。

それは、命の洗濯。

お風呂。

それは、自分だけの至福の時間。

様々な言葉はあるが、結論をいえば……。

お風呂はすばらしいものであるーー！

かくゆう俺も大好きだった。

長い時は一時間とか普通に浸かってたし……。

温泉とかもいいよね。露天とか、景色最高だし。
そつ。大好き、だったんだよ？ 皆は……。

だけど、今は……。

「蓮華ー！ そひちひいつたわよーー！」

「うんー！」

「！」

お風呂なんか大嫌いだ――！！

どうも、蓮です。

たた今
逃走中であります！

「待ちなさいー！」

۷

後ろから追いかけてくる雪蓮から逃げ、前に立ちふさがつて、捕ま

ふつ、今の俺は誰にも止められない、止まらない「いたぞーーー！」

セ ?

余裕の表情で逃げていた俺の目には、一いちらを指差す兵士の皆さま。

これは緊急停止だ。

俺が止まつたのを見て、二からに向かつてぐる兵士さん。

その数を見て、冷や汗が出了。
いやいや、何人いるんだよ…。

慌てて、逆方向に引き返そうとするが…。

「蓮！ 覚悟しなさい！！」

「もう、にげられないよ」

そつちには一人の姉妹と数人の兵たちで塞がれていた。

「「」覚悟くだれこ、蓮様」

いや、あの～、兵士のみなさんたち？　あんたら他の仕事をしようよ…。

「これも孫堅様の命令ですので…」

あー、わ～ですか…。

「さこなのです」

てか心読むなし…。

お前はエス…「エスパーではありますよ？」
……。もはや何も言つまい。

しかし、マズイ。これは非常にマズイですよ～！
今俺にはオボロガードは使えないといつのに…！

そんなことを考へている間にもどんどんと距離がなくなつてきた。
くつ、仕方ない。ここは一か八か、正面突破だ！
俺がそう考へた、その時。

「みんなして一体、何をやつてあるんじゅ？」

救いの神はやつてきた。

おお、祭！　今、君が輝いて見えるよ…！

「ん？　なんじゅ？　蓮、また追いかけられておつたのか…」

祭は囲まれている俺を見つけると、ひょこと両手で持ち上げてそう聞いてきた。

「「いやーー。」

俺はそれに頷く。

「うなんだよーー。また、なんだよーー。
ちょっと聞いてよ、祭姐さんーー！」

「全く…こんな人数で何をしていくと思えば…
そうだよーー。三十人はいくらなんでも多すぎるだろーー？
もつと言つてやつてくれ、姐さん！

「孫県の兵ならばせめて、半分の人数で捕まえて見せんかっーー！」

「「「すみませんでした」「」」

祭の一喝で一斉に頭を下げる兵士たち。

え？ ていうか怒るとこ、そこなの？
追いかけるなよ、とかじやなくて…？

俺の疑問を余所に、祭は話を続けていく。

「まつたぐ、こんなに大騒ぎにしようって。策殿、権殿。少し騒がしすぎますぞ？」

「「「めんなさい」「」」

雪蓮と蓮華も祭に謝る。

「うそうそ、やすが姐さんだ。
わつきのせ氣のせい……。」

「大体、相手はこの蓮ですぞ？ もっと頭を使えば、捕まえるのは
簡単だろ？」

「……じゃない、だと……？」

「本当に……？ そんな方法があるの？」

「もううんじや。簡単に捕まえるわい」

「ふ～ん。じゃあ、祭のお手並み拝見ね！」

「あれー？ これって俺、また逃げなきゃいけないパターン？
マジですか……。」

「けど……簡単に、ねえ。

言つじやないか……。」

追加ミッション…祭の魔の手から全力で逃れろ！ が発生しました。

勝利条件…制限時間内までに捕まらないこと。

敗北条件…祭、雪蓮、蓮華もしくは兵たちに捕まること。

受けない

受けける

祭！
君の挑戦、俺は受けよう！！

ニシジョンを受諾しました。

カウントを開始します。

5
4
3
2
1
0

では、ミッション、スタート…

れぬ、始めよいか！

「ウル」

「逃げようとしたしなーのー」

どうも、蓮です。

負け犬、ならぬ負け猫の蓮です。

もつね分かりかもしだせませんが…。ミシショーンは失敗しました。
まさか、あんな手を使つてくるとはあの蛇さんもびっくりだよ…。
あれが孔明の罷つて奴です。

「何言つてんのよ…。焼き魚のにおいに釣られていのいやつて
きただけじゃない」

「うん、すじくかんたんだつた。 irgendからまあのとくせんでこり
うね、ねえせー…。」

ぬぬぬ。

なんと卑怯な……。

てこうか、心を読むな！

「まあ、いいじゃない。兵士にも読めるんだし、私たちが読めても

…」

「れん、わかりやすい」

いや、全然、良くないんだが…。

そんなこんなで結局、風呂場に連行されました。

「ふふふ、やーて。今日は隅々まで綺麗にしてあげるわよ」

「わたしもがんばるー。」

田をキラキラと光らせていく雪蓮。

小さく拳を作つて、気合を入れている蓮華。

はあー、もう諦めよ。

やる気満々な一人を見て俺は深くため息をついた。

「ねこ、洗浄中

「はい、終了。蓮華、もう蓮を連れて行つていいわよ?」

「うん。」

身体の隅々を洗われ、ぐつたりした俺を抱きかかえ湯船へとむかう蓮華。

もうやめて、私のライフはゼロよ。

ううう。
毛が…。毛が…。ベチョッとして気持ち悪い…。
だから、嫌なんだよな…。
濡れるとすごく体温下がるし…。
すぐに乾かないし…。

「れん?　だいじょうぶ?」

俺の方を心配そうに見てくる蓮華。

「いやー

俺はそれこそ弱々しく返事をする。

全然、大丈夫じゃないです。

けど、逃げる元気もないくらい疲れてます……。

「やつか。あとで、ちゃんとふこてあげるからね」

「いやー

ありがとうございます。

蓮華……君、ええ子やな。

……なんて言つと思つたか！

次は！ 次こそは逃げ切つて見せる……

やつらに誓つ、蓮なのでしたー。

第一話　お風呂でペーパックー？（後書き）

第一話、終了です！

やつと祭さん登場でした。

これからは他の人も出していきたいなと思っています！

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！

第二話　見た目はねこ、頭脳は大人…。その名は、蓮！

ねこ、それは仕える者。

ねこ、それは傳ぐ者。

ねこ、それは主の生活すべてをサポートするフォーマルな守護者。
そう。これは少女たちのため、命を賭けて戦うねこの超コンバット
バトルストーリーなのである。

中庭にある屋根つきの休憩所。

そこには一人の少女と一匹の猫の姿があった。

白い猫は盤の上を真剣に見詰めた後、自らの主に指示を出す。

「いや…」

「わかったわ。いいね…」

「なつ！　今度はそうくるのか…」

ども、蓮です。

ただいま、雪蓮に駒を動かしてもらひて、冥琳と将棋で勝負してお
ります。

これに勝てば今日の夕飯はお魚なのです！！

俺、張り切つちやこますよー！

切つ掛けは俺がのんびりと城内を歩いていたときだった。
中庭に行くと聞きなれた声が聞こえてくる。

「あ～、また負けた～」

「ふふふ。まだまだだな、雪蓮」

近づいて行ってみると、どうやら雪蓮と眞琳が将棋を打っていたみたいだつた。

盤を見てみると…。雪蓮はほとんどの駒が取られてしまっていた。
雪蓮の勘も将棋には効かないんだなー。
てか、将棋なんてもう何年も打つてないな…。
そう思つて、自分の手を見てみる。

.....。

ピンクっぽい肉球と出し入れが出来る爪があつた。
これじやあ駒がもてねーよ。
はあ～、とため息をついてると…。

「あ、蓮じゃなー」

「ん?」

俺の姿に一人とも気がついたようだ。

早速、雪蓮に抱きかかえられる。

そして、俺を見ると何か思いついたような顔をした。

「あ、うだ！ 蓮、もう一度やりましょ」

「ああ、別にかまわんが……」

「あと蓮も一緒にやるけど、いい？」

「蓮が…？ まあ、いいけど…」

眞琳が怪訝そうな顔をしながら俺を見てくる。
まあ俺、ねこだし。当然かな…。

「蓮…。もし眞琳に勝つたら、今日の夕飯は魚にしてあげるわよ」

そう俺に小声で言つてくる雪蓮。
将棋でねこに頼るとは…。

あー、これが猫の手も借りたいって奴なのかな…？

しかし、お魚のためなら…。

やつてみせましょー！ マイロードー！

「ここやん…」

俺は力強く頷いた。

「よし、ならもう一度勝負よー。眞琳ー！」

と、まあそんなこんなで頑張つてるわけなんですが…。

うん、眞琳強いね。

とても八歳とは思えないよ…。

俺が小さいことは比べ物にならないくらい眞琳は強かった。
これなら、雪蓮が苦戦するのも頷ける。

けどな…。

まだ俺の方がもう少しだけ強いー！

「いやー…」

「これで王手だー！」

「ああ、眞琳。貴女の番よ？」

「うべべ…」

雪蓮が余裕の表情でそう言つ。

対する眞琳は悔しそうな顔をしながら、盤を見つめている。

そして……。

「……参りました」

「やつたー！　冥琳に初めて勝つたわー！」

〔冥琳の降参宣言を聞くと、雪蓮は俺を上に高く持ち上げてすゞしく喜びます。〕

俺もすゞしつれしいです。これでお魚ゲットだぜーーー！

ただ……雪蓮……。

勝つたのがうれしいのはわかるけど……あんまり振りまわさないで……田が……田が……回る。

～SIDE[冥琳]～

うれしそうにはしゃいでいる雪蓮に振りまわされ、グッタリとしている蓮を見て私はため息をついた。

負けた……。猫に負けた……。

そういうえば母さんが昔、蓮に将棋で負けたって言つてたわね。

正直、冗談だと思ってたんだけど……。

実際に負けたしな。

はあ～。

しゃりく落ち込みそうだ…。

「冥琳？ 何、ため息をつこてるのよ？」

「…こや、猫に負けたのが、少しな…」

「ふふん、すゞしじょ～。つうの蓮はすゞへ賢いのよ」

そう言つて、雪蓮は膝の上に座つてゐる蓮を撫でていた。
蓮は大人しくされるがままになつてゐる。

頭を撫でられると皿を組めて、首の下を撫でられると「ロロロロ」と聲
を鳴らす。

その姿はとてもかわいらしくはあるが…。

やつぱり何度見ても普通の猫にしか見えない。

それが、あんなにこいつの手を先読みしてみると…。
とてもじゃないが、猫とは思えん。

まあ、街では猫神様なんて呼ばれて親しまれているし。
あと私たちよりも永く生きていらじり。

前に聞いた何百年も生きてこようのはさすがに嘘だらうナビ…。

私がそんなことを考へてみると、いつの間にか蓮が目の前にいた。

蓮は私の顔をその深紅の瞳で見つめて、首を傾げながらかわいらしく鳴いた。

「こや～」

私が手を差し出すと、それをペロリと舐め、頬を「あつた」としてくる。

か、かわいい…！

私は思わず笑顔になり、蓮を撫でた。

蓮は「口、口と喉を鳴らしながら、なおも舐めてくる。

蓮…かわいすぎるひつ…！

私ももつと優しく蓮を撫でてあげる。

ああ、なんか蓮に負けて落ち込んでたことも、蓮の不思議でもひつでもよくなつて来たな…。

いいじゃないか、蓮はこんなに可愛いのだから…。

「あら、あの堅物の冥琳も蓮の前では形無しね」

私の顔を見て雪蓮が笑う。

まったく、私だって可愛いく思つことがあるんだぞ。

しかし、本当にかわいいな。

あつ、そうだ。

蓮を家に連れて帰ろ!。

「堅物は余計だ。なあ、雪蓮…」

「んー？ 何?」

「蓮を私にくれ… 「蓮はあげないわよ」… そつか… 残念だ」

本当に、残念だ…。

仕方がないな。

今、目一杯愛でるとするか…。

それからは私と雪蓮の二人で、夕飯までたくさん蓮を可愛がった。
蓮は少しグッタリしてたけど…まあ、大丈夫だろう。

その日の夕飯の時。

好物に見向きもせずに爆睡している猫を見て、多くの人が心配した
というのはまた別のお話…。

第三話　見た目はねこ、頭脳は大人…。その名は、蓮一（後書き）

第三話、終了です！

今日は冥琳でしたー。

どうでしたでしょうか？

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！

では次回にお会いしましょう～。

第四話　ねい、たたかひ。（前書き）

今日は少し悲しいお話をす。

第四話　ねこ、たたかひ。

負けられない戦いがある。

譲れないものがある。

護りたいものがある。

何もそれは人間に限つた話ではない。

それは俺たち、ねこだってあるんだ。

これは悲痛な運命と戦つた男の…いや、ねこのお話である。

今でも思い出すと震えちまつ。

あれは猫なんかじゃねえ…。さう、虎だ…まるで虎だった。

- - - - - 田撃者△男さんの証言。

か「かつたでやあ～～～

また」一騎当十。

彼の真の……二回無双ですか。

田撃者ひぐこの証言。

田撃者ひぐさんの誓言。

猫神様、強くてカッコ良かつた。

田撃者ひぐこの証言。

その日、彼はすく機嫌が良かつた。
今日の昼食にお魚が出たし、その後、一人の姉妹にプラッシングも
してもらつた。

先日、水蓮が三女を出産するところれしきコースもあり、そし
て何よつこに連日続いていた雨が止み、今日は晴天なのである。

そんなわけで彼は猫のくせに歌を歌いながら、散歩していた。

「いや、いや、いや、まあまあまあまあまあまあ～～～」
「いや、いや～～～」

そう、本当に機嫌が良かつたのだ、この時までは…。

「にゅ？」

街の子供たちに撫でられ、老人たちに揉まれ、お店の人たちに食べ物を貰う。

そんな風に街を歩いていた俺は路地裏で、ある奴らに遭遇した。

飼い猫とは反対の位置にいる、野良猫たちである。

もともと、毛が真っ白で目が真っ赤というアルビノ系のねこである俺は、非常に他の猫から絡まれやすい。やはり、どうしても目立つてしまつしな。

しかし、そこは昔からこの街、建業に住んでる俺。この街の野良猫のボスとは仲がいい。

だから、野良たちがケンカを売つて来るはずがない…。

そう、思つてた時期が俺にもありました。

「ウゥウウ」

「フ・、フ・」

何やら戦闘態勢に入っている野良猫たち。

仕方がないので、

たたかう

にげる

まほう

はなす

まずは話しかけむ」とした。

注意・「」から先は猫語となつてあります。傍から見れば、「いやー、いやー」と言つてるだけです。

「おい。お前ら、一体どうしたんだ?」

「うるさいー。この悪魔めー。ここで死ぬお前に話すことなんか何もないー。」

「お前の討伐命令が出たんだ、悪いが死んでもいいつづく

猫Aは言わなかつたが、猫Bが事情を話してしまつた。

大丈夫か。その連携のなさで…。

てか悪魔とかすつしく久しぶりに聞いたなんだけど…。

「…討伐命令ね。穏やかじやねえな、ブンタの奴がそいつ命令したの

か？」

一応、あいつとは杯を交わした仲だし、信じられないんだが……。
俺が猫どもに問う。

「…………

しかし奴らは何も言わない。
何か事情があるのか……？

「だんまり、か」

俺がそう呟いた瞬間に、もう一匹の猫が飛び掛かってきた。

「……この……身の程知らずがっ！－

「はあ、はあ、はあ」
俺は街を走っていた。

急げ、急げ、急げ！！

人々が慌ててる俺を見て驚いていたが、それを全部無視して駆け抜

けた。

クーデター。

簡単に言うとそれが起こった。

どうやらノ・2だった、ギンが反旗を翻したみたいだ。

ギンはその冷酷さで有名だった猫だ。

一応、ブンタに従つてはいたが、ずっとチャンスを狙つていたのだろう。

そんなことを考えながらも、俺は目的地へ向かう足を止めなかつた。
そして、辿り着く。

人間がほとんど入つてこないその場所に…あいつはいた。

…傷だらけの姿で。

「ブンタ！」

俺はブンタに駆け寄り、容体を見るが…酷かつた。
全身引っ搔き傷だらけで、毛玉も飛び散つている。そして首には一
番大きくて深い、噛まれた傷があつた。
…もう永くはない。そう思つた。

「ブンタ！ おいつ！ 聞こえるか！？」

「ううう。れん、にい？」

俺が再度呼びかけると、ブンタは焦点のあつてない目で俺を見て、

俺の名を呼んだ。

「ああ、蓮だぞ！ しつかりしろ……」

「……蓮にい…頼みがある…んだ。俺の…俺の息子を…」

意識の戻ったブンタに俺はさらに声をかける。
すると、ブンタは弱々しい声でそう言つてきた。
息子…？ 確かコタロウ、だつたか…？

「息子がどうかしたのか…？」

「今、ギンの奴…に捕まってる…んだ。頼むよ、蓮にい…。俺じゃ
あ…無理だつた…。あいつを…助けて…やって…くれ…」
弱つてゐるブンタは俺に必死に懇願する。
自分の息子を助けてくれつて…。

「…わかった。この兄ちゃんに全部任せとけー…」
それに俺は大きく頷き、そう言つた。
弟分の最期の頼みだ、もちろん聞くぞ…。

「へへへ、あり…がと…蓮…い…」

ブンタはそれを聞くと、笑顔を浮かべた。
子猫の時からちつとも変わらない、あのとても無邪気な笑顔を…。
そして、静かに目を閉じた…。

「…………ねやすみ、ブンタ」

～SHIDE雪蓮～

「つー」

〔冥琳と話をしていると突然、蓮の鳴き声が聞こえたような気がした。いつもとは全然違う鳴き声が…。〕

「ん？ どうしたんだ、雪蓮？」

「す、怒ってる……そして、それ以上にす、悲しんでる……？」

「うしたんだろう……？」

〔氣のせいじやなこって勘が言つてゐる。〕

「雪蓮、何を言つているんだ？」

「蓮よ。蓮が泣いてるわ」

「あの蓮が？ ……またいつも勘か？」

「ええ、それに声が聞こえたの…すゞく悲しそうな声が…」

そう言って私は窓から外を眺める。

蓮が帰ってきたら、頭を撫でてあげよう。

だから無事で帰つてくるのよ、蓮？

（SIDE水蓮）

「かあさま…れんが…」

「ええ、泣いてるわね…」

新しく生まれた娘、小蓮を寝台で抱えながら、横に付いている蓮華の頭を撫でる。

蓮の悲しい声を蓮華も聞いたみたいだ。

「だいじょうぶかな？」

「ええ、大丈夫よ。だって蓮は守り神だもの…」

「…まもりがみ？」

きょとん、とした蓮華の顔を見て、笑ってしまった。
あれ、守り神の話は前にしなかったかな…？

「ええ、守り神。前に話せなかつたけ？」

「ひひん。きいたことはあるけど……それが、れんなの？」

「ああ、蓮だつてことは話せなかつたんだつたわね。
今、思い出したわ。

「そうよ。私たちを何百年も守ってくれている神様なの」

「れん、す」「いんだねー」

まあ、今はただの猫なんだけどね……。
でもいつかはこの子も会えるでしょう、本当の蓮に……。

そう思いながら、私はまた蓮華の頭を撫でた。

→ SHIDE蓮へ

俺は野良猫がたくさん集まっている広場にやつてきた。
奥の方にはコタロウがいる。

「来たな、悪魔め……」

俺をたくさんの数の猫が囮んで来る。

その中で、少しだけ身体の大きな灰色の猫…ギンが俺を見てそう言った。

惡魔

五年ぐらいたまに俺と「ンタの」一四で、じこに近で悪ををしてた野良猫達をぶつ飛ばした時にいた俺の渾名だ。今、思えばすごく懐かしくも感じる。

「二」の数を相手に一人で勝てるとも思つてんのか?」

- 7 -

おつと、昔のことを考えてたら…話が進んでたみたいだ…。
なぜかギンも周りの猫たちもバカ笑いをしている。

「どうせブンタと同じでお前も大した事ねえんだろ…？」

「違うねえ。あいつ、息子を見せた途端に大人しくなったしな」

折角、俺がさ...。

違うことと考えて。

「お前ら、そいつもブンタみたいじゃつまつだー。」

そのヤンの言葉で囮んでいた猫たちが一斉に俺に向かって来る。

「のびのびとつもない怒りを抑えてたつて誰のこ……」

「死ね……」

もつこいか。

限界だ……。

「……なめるなよ、この小僧どもがつ……」

周囲に俺の咆哮が響き渡った。

戦いが終わった……。

俺の周囲には野良猫たちが倒れこんでいる。

致命傷の傷は付けてない。

殺す気はもともとなかった、そんなことをしてもブンタは喜ばないからだ。

「今度、『タロウに何かしてみろ』お前ひ、全員歯み殺してやるー。俺はそいつに残して、『タロウのもとに向かった。

「誰ですか……？」

「俺か……。蓮だ」

俺は『タロウに名前を教えてやる。あれ?』の状況、前にどこかで……。

あつ、そうか。

初めてブンタと会ったときに似てるんだ。

それだからだらうか……。

「蓮、さん……」

「……。別にやさづけはしないでここ。俺のことは……蓮さん、ヒドも厚んでくれ

「タロウにやつれてしまったのは…。

夜も更けきった頃、俺は城に帰った。

静かに部屋に入ると、水蓮が起きていた。
どうやら俺の帰りを待っていたようだ。

「遅かったわね…。頑張ってあの子たちも一緒に待ってたんだけど

…」

視線を向けると一人で仲良く寝ている姉妹がいた。
幸せそうに寝ているみたいだ。
それを眺めていると…。

水蓮が俺を持ち上げて膝の上に置き、俺を撫で始める。

「お疲れ様…。今日は色々あつたみたいね…」

ああ、あつたよ。

うれしこじとも悲しこじとも……。

一つの出来ごと一つの別れがあつたよ……。

「あら、なり今田せもつ黙づなさい。…疲れたでしょ?」

「うん、やつするよ……。

おやすみ、水蓮。

「ええ、おやすみ……蓮」

その日、俺は昔の夢を見た。
すいへ懐かしげ夢を……。

第四話　ねこ、たたかひ。（後書き）

第四話、終了です。

いつもより少し暗いお話でしたが、どうでしたでしょうか？

誤字脱字がありましたら、報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！

では。

第五話　陽だまりの中で

赤ちゃん…。

それは愛であるもの。

猫…。

それも愛であるもの。

では、その二つが一緒にいたら…？

そんなの決まっている…！

超、愛でるんだ！！！

どうも、みなさん。

孫家さん家で飼い猫をやっています、蓮です。

突然ですが、貴方は子守りをしたことがありますか…？

私はあります。

人間の時もそして猫のときも…。

そつ、もつお分かりかも知れませんが、私こと蓮は……。

只今、子守りをしています！

お相手は、生まれてまだ四ヶ月の女の子、小蓮ちひるんです。

振り返れば今日の朝の話。

朝食を食べている時に水蓮が話しかけてきた。

なんでも今日はいつもより政務が忙しいとのこと。

それで何を思ったのか、彼女は俺に小蓮の面倒を見るよつに頼んできただ。

いや、侍女に頼めばいいんじゃあ……？ といつ俺の意見はもうひろん却下されてしまつ。

断れば、じばらりくお魚抜きとのこと。

なんと理不尽な世の中か……。

絶望した！ そんな世の中に絶望した！

とまあそういうわけで、今日は子守りをする」と云ふ。

さつきまでは雪蓮も蓮華も一緒だったのだけど、今はお勉強の時間らしく、今は小蓮と一人つきりです。

まあ、でも子守りは慣れているので俺だけでも余裕でしょ～。

「あー、あー」

「」やーーー。」

ちよ、おま、止めて！
ヒゲは握らないで！！

そう思つていた時が俺にもありました。

ねこ、大苦戦中です。

前の蓮華がすごく大人しい子だったので、完全に油断しました。

そういうえば、孫家の子供はこいつ子ばっかりだったな。

水蓮然り、雪蓮然り……。

元気があるというか、落ち着きがないというか、なんというか。
そんなことを考えていると……。

「う~」

小蓮が不機嫌そうに顔を歪めて、こっちを見ています。

どうやら俺が構わなかつたのが気に入らなかつたみたいですね。

とりあえず、小蓮の前で尻尾をゆらゆらと横に揺らしてみます。

これで可愛いあの子の視線を釘付け大作戦。

今まで成功率80%を超える、この作戦によつて小蓮は俺の尻尾に
夢中になつたようだ。

目が楽しそうに尻尾を追つてゐる。

はあ～、とりあえずこれで機嫌は戻つたかな。
でもしんどいぞ、これ……。
くそ、おのれ……水蓮め～。

俺は水蓮に呪詛を送りながら、もう一度小蓮を見た。
小蓮はきやつ、きやつとうれしそうに俺の尻尾に向かつて手を伸ば
している。

.....。

ま、今日一日くらいなら頑張るか。

たまにはじついうのもいいかもしれなしな

それから俺は子守りに全力を挙げて挑むのであった。

全力で赤ちゃんをあやす猫。

その、見た目は大変にシユールではあるが微笑ましい光景を、こつ
そりと扉を開けて覗いている侍女たちが多くいたとかいないとか。

「むー」

私の隣で蓮華がむくれている。

理由は簡単、蓮だ。

というか、蓮華の機嫌が悪くなるときの大半の理由は、実は蓮のことでだつたりする。

「もー、蓮華？ そんなにむくれてもしようがないでしょ~」

「うー、だつて…」

「仕方がないじゃない。シャオはまだ小さいんだから」

蓮華に促すよついで言つてみるが、効果はこまひとつみたい。いつも聞き分けのいい蓮華も蓮のことになると駄々をこねる。

実は今日、蓮華が蓮といつしょに寝る予定だった。だけど思いのほかシャオが蓮に懐いてしまったのよね。離れると泣き出しちゃうからこには。

これは仕方がないことで、蓮が今日はシャオの所で寝ることになつたのだけど…。

「きよひは、わたしだったのに…」

その結果、私のもう一人の妹がへそを曲げてしまつたみたい。

今も頬を膨らませている蓮華を見て、思わず苦笑してしまつ。

そういえば蓮華がもつと小さいときに私も同じよひむくれてたわね…。

別に蓮華のことが嫌いだつたわけではなかつたんだけど、なんか蓮を取られたみたいで「ごく嫌だつたな」。

たぶん、今の蓮華もそうなんでしょうね。

蓮は、私と蓮華にとって家族であり、初めての友達でもあるわけだし…。

それに蓮と一緒になぜかよく眠れる。

理由はよくわからないけど、なんかすこく安心できるのよね。

陽だまりみたいに暖かいし…。

さてと、考えていても仕方がないわね…。

この状況を解決するのは実は簡単なの。

蓮がこっちに来れないのなら、こっちから行けばいいじゃない！

そうすれば私も一緒に寝れるし…。

「なら、蓮華…。今日は私と蓮華とシャオ、そして蓮のみんなで寝ましょ」

「えつ？ みんなで…？」

「えりよ。それなら問題はないでしょ？」

「はい、ねえさまー。わたし、みんなでいっしょにねたいです！」

私の提案に手を挙げて賛成する蓮華。

その顔はさつきまでのむくれたものではなく、弾けんばかりの笑顔である。

私はそんな蓮華の手をひいて、蓮とシャオのいる母様の部屋に向かうのだった。

その日、夜。

夜遅くにやつと政務を終えた水蓮が部屋に戻つてみると…。
一匹の猫を中心にはぐらかして寝ついている三姉妹の姿があった。
始めはそれを微笑ましく見ていた水蓮だが、完全に寝るスペースの埋まっている寝台を見て気がついた。

「あれ？ 私は何処で寝ればいいのかしら？」

そう漏らし、孫吳の王は静かに絶望した。

第五話。陽だまりの中で（後編）

第五話。終了です！

どうだつたでしょうか？

うへん。もつとシャオを出したかつたけど、まだしゃべれなかつた
といつ眼。

誤字脱字がありましたら、「報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！

では。

第六話 プライスレス

お金では買えないものがある。

友達もそうだし、家族もそう。

時間もそうだし、自分たちの感情だつてそういうだ。

お金では買えないものがたくさんこの世の中にはある。

今、世は乱れている。

国では賄賂が横行し、金があるものが高い地位を得るそんな時代。だけど、忘れてはいけない。

家族や友達と過ごす時間というのは…その暖かい日々は…決して百万の富に劣るものではないということを。

あっ、でも買えるものは…頑張って貯めましょうね…！

「れん、はやくおきてー。」

俺はそんな声と身体を揺さぶられる感覚に目を覚ます。

寝起きの焦點が定まらない田で、俺に声をかけている女の子…蓮華を見つめた。

「あ、やった

そつぱんひうれしそうな顔を見せる蓮華。

あれ？ 寝過したのかな…？

そつ思つて外を見てみるとまだ真つ暗である。

…………。

つまり、これはあれだ…。

運動会とか遠足の前に早く起きあがいたといつ奴だよね。
俺も昔にやったなーと思いつつ、なんで俺を起こしたし、と蓮華を見る。

しかし、返つてきたのは…。

「へへへ。れん、きょうはたのしみだね？」

蓮華の弾けんばかりの笑顔だった。

相当、今日を楽しみにしていたみたいだ…。

うん、負けたよ…。

しゃうがない。もう起きようじやないか…。

自然と出でてくる欠伸を噛み殺しながら俺はうへんと身体を伸ばす。
さて、それじゃあ時間までお姫様のお相手でもしますかね。

あ～、蓮より本部へ。

本日は晴天なり、くり返す本日は晴天なり。オーバー。

青い空、白い雲。

今日は絶好のピクニック日和となりましたー。

そう。今日私たちはみんなでピクニックに来たのです！

建業の街から少ししたところにある森。

その奥にちょっとだけ進んだところにはとてもきれいな川辺があります。

実は以前、雪蓮に連れて来られた探索で見つけた所だつたりします。

「う～ん！　いい所ね。空気もおいしいわ

「うむ。たまには外でやるのも粋なもんじゃ

「もう、祭は…。私の分もある？」

「もちろん用意してあるわい。ほれ、堅殿

「ふふふ。ありがと」

なんとこいことでしょう。

年長者の一人が着いて早々酒盛りを始めているではありませんか。

いーなー。はつ！？

べ、別に羨ましいだなんて思ってないんだからねつ！

と、とりあえず俺は一人…特に水蓮に抗議の声を上げてみると…。

「こやー

おい、そこの一入…。

いきなり酒盛りはさづつよ、ビーフ、ビーフなのよおーつー。

「いいじやない、たまには息抜きも必要よ?」

「やつじやぞ。堅い」とをこうな

まあ、間違つてはainいんだけどさ…。

今日は家族サービスの日だつたのではないのかい?

「それは大丈夫よ。だつてほら…」

そう言うと水蓮はある方向を指差した。
俺がそちらの方を向くと…。

「蓮ー! 早くこっちに来なさいー!」

「れんー。あそぼー!」

「みんなが待つてるのは蓮だし…ね?」

こつちに向かつて手を振り、俺を呼んでる雪蓮と蓮華。
声こそこそ出していいもののこつちの方を見ている冥琳。
みなさん、お待ちかねよつだ…。

「せひ、行つてきなさい。我が家のお猫様？」

「了解ですよ……。

じゃあ、小蓮もこるんだからあんまり羽皿をせすりなこよーにー。

「つよーかい」「

笑いながらそつ言つてくる水蓮に少し不安を感じながら俺はお姫様たちの所に向かった。

「蓮ー、今よー！」

「「」や、」やー..」

雪蓮の合図に合わせて、我が必殺の爪を一閃。

すると、あら不思議。

お魚さんが宙を舞つているではあーりませんか。
これぞ飼い猫108の技のひとつ、魚獲りである。

「つむ。一度こーとまー…。雪蓮に聞いたことがあるとまーえ、実際こーの田で見てみるとすーこな…」

「れん、すゞい！」

俺の華麗な技を見た一人が感嘆の声を上げる。
蓮華にいたつては目がキラキラと輝いているようだ。

ふふふ。どうだ！ 俺、すぐない？
とはいつたものの、実はこの技は俺だけでは出来なかつたりする。
うまく呼吸のあつた相方が必要なのだ。

「やつたわね、蓮」

雪蓮が俺に声をかけてくる。

そして、俺の顔の前に掌を向けてきた。

ふむ。なるほど……。

ではいっせーの！

「「イエ イ(に)ちーん）！」」

こつじて俺と雪蓮はハイタッチもどきをするのであった。

その後は獲った魚を食べたり、飛んでいるセミを追いかけたり……。
水を掛け合つたり、追いかけっこをしたりと楽しく遊んだ。
それはいい、それはいいんだけど……。

ただ、ひとこと言わせてもうりぐるな、俺を川に投げ込んだその

酔っ払い一人！

世が世ならそれ、虐待になるからな！

そう、何を思ったのか。

あの酔っ払いどもは蓮華たちが遊んでいるのを眺めていた俺を川へと放り投げたのだ。
なんでも…。

「いやー。蓮も参加したいのかなーって思つたし。それに…」

「その方がおもしろゲフンゲフン。もといい肴になるかなと思つたからじや」

だめだ。

こいつら早くなんとかしないと…。

そう思つていた俺に救いの神が現れました。

そう、未来のメガネ軍師様こと冥琳ちゃんです。

俺は蓮華にタオルで身体を拭いてもらひながら、冥琳に怒られてい
る年長者達を見る。

正座をさせられ、まだ10にもならない子に怒られているその姿は、
とても孫吳の王とその忠臣には見えなかつた。

そんな一人の姿を見ていて、なんか悲しいけど…これも現実なのよ
ね…。とは雪蓮の言葉だ。

ただ雪蓮…。

たぶん近い未来…お前もあつち側にいる気がするやつ?

俺はこいつそりそり思つた。

第六話 プライスレス（後書き）

第六話。終了です！

さて、どうだったでしょうか？

休日つて感じが出てたなら幸いです。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。
あと感想などもお待ちしています！
では。

第七話　満月の夜(前書き)

時系列的には順序通りですが、同じ口となつてあります。

第七話　満月の夜に

（SIDE雪蓮）

古人、曰く。

古くから孫家には守り神がいる。

いつも見せる姿は仮のもの、満月の夜だけにその本当の姿を表す。しかし、その姿を見れるのは孫家の者で成人を迎えた者に限る。それ以外の者が見たならば、即、天罰が下るであろう。

「成人、か。まだまだ先よね〜」

私ははあ〜と深くため息をつく。

孫家の守り神。

そう呼ばれているものがいる。

孫家では知らない者はいないほど有名な話で、にわかには信じられない話。

だつて……。

「あの蓮がね〜。どう見ても猫だし……」

確かに普通のとは言い難いかもしねない。

私たちの言葉を理解しているみたいだし、言うこともちやんと聞く。冥琳に将棋で勝つほど頭がいいし、子守りもする。

色は純白と言つてもいいほど真っ白だし、その瞳も真紅といつていほど真っ赤だ。

尻尾もすりと擦れて…毛並みもすくへい。

寝ている姿はかわいいし、私がものを投げると取つて来るし、お手もする。

猫パンチもあるし…あれ、なんかかわいいのよね。見ててなんか和むし。

抱きしめると暖かいし、モフモフして気持ちいいし……って違う違う。今はそうじゃなくて…確かに蓮はすごくかわいいけど、やっぱり猫以外には見えないのよね。

「でもじゃないけど…守り神には見えない。
そう、確かに見えないんだけど…。」

「…それだけじゃないって私の勘が言つてる」

そもそもなんで守り神って言われてるのかつて言つと、昔にあった大きな戦いで孫家の主を守つたことから始まつたらしい。その後、ついて行つた戦場で負けたことがないとか。

猫が戦場に行くって何つて聞いたときは思つたんだけど、実際に蓮も昔は母様について行くときもあつたらしく…。

「あ～もうつ！ 考えるのは冥琳の仕事なのに…」

でも、このことでは冥琳には相談できない。調べよつとするだけで天罰が下るかも知れないし…。
母様に聞いても蓮が守り神様つて言つただけだろう…。
うーん、八方塞りね。

「今日は満月の日…」

私は暗くなつた空に浮かぶ月を窓から眺めながら呟いた。

うん。考へても仕方がないし、やっぱりここは行動あるのみよねーー。

昼間に蓮華も蓮の本当の姿を見たくない？　って聞いたら。

「ねえさま、わたしもみてみたいです！」

つて目を輝かせて言つてたし、約束通り一人でこっそり見に行こう。
今日は蓮と蓮華と二人で一緒にお昼寝もしたし、準備はバッチリ！
さあ、蓮華と合流して蓮の姿を拝みにいくわよー！

→ SIDE蓮

俺は今の孫県の王であり、別名江東の虎とも呼ばれてゐる孫堅」と
…水蓮の部屋に一人でいた。

小蓮は別の部屋で侍女が見ているらしい。

約束の刻まであと少し。
そう、もう少しで俺は…。

「蓮、まだなの？ 私は早くこの酒を飲みたいんだけど…」

「こやつ」「こやつ」

もう少しあと待て、と酒に伸びた水蓮の手をねこパンチする。

俺が百年くらい前から寝させておいた特級品だ。

水蓮の気持ちがわからないでもないが、それは認めん。

そう、もう少しで俺はうまい酒が飲める。

猫の姿だと舐めることが出来るんだけど… どうしても飲んだ感じがしないんだよな。

あと、舌も猫と同じで熱いものがダメで、お魚が飛び抜けておいしく感じるんだよね。 前は肉派だったのに…。

「ううう。蓮、まだ？」

ずっとお預けを食らって、いい加減に水蓮の我慢が限界に近くなつてきたその時。

「こやつ…」

俺の身体が発光し出した。

…どうやら約束の刻みたいだ。

御苦労さま、佐伯先生…。

眩い光が部屋を包んで、一瞬、視界が何も見えなくなる。
そして…。

「ふう…。限定解除、完了」

「久しぶり、蓮。ふた月振りかしい」

「ははは、一応毎日会ってるけど……久しぶり、水蓮」

ひつして俺はひと月振りに人間の身体に戻った。

けど、これも夜が明けるまでの間だけ…。

その間だけ、俺はこの姿に戻れる。

もう四百年くらい前から続いていることだ、慣れたと言えば慣れたな。
戻れるだけでも…幸運、なんだし。

「「乾杯！」」

俺たちは、一人で酒を飲む。

ふた月振りの酒はすぐくうまかった。

先月は蓮華に捕まつて逃げれなかつたし…。

俺たちは飲みながら…昔のこと、最近のこと、家の姫様たちのこと。
たくさんことを話した。

田頃、話が出来ないから人と会話するのがとても楽しい。

水蓮も笑っているから、別にいいんだけど…。
できるならもっとたくさんの人と話がしたいな。
そう思つた俺は水蓮に聞いてみることにした。

「それにしても…俺と一人だけで飲んでて楽しいのか？」

「ええ、楽しいわよ…。蓮は古今東西、色々な話を知つてるし、す
ぐ面白いもの」

まあ、長生きしているしな。

話はたくさん知つてるさ。けど、だからって…。

「それにしてもあんな嘘の話まで作ることはなかつたんじやないか
…？」

そう。

成人まで俺に会つことが出来ないというのは真つ赤な嘘なのである。
あと、孫家の者以外がダメということも…。

「ふふん。私も子供の時はやられたんだし。これも家の伝統ですよ
」

そう言って、水蓮は笑う。

「うやうやしく上機嫌のようだ。

「やうかい。さて、あいつらは何歳で俺と会ったんや？」……

「私は11歳の時だつたし……あと何年かはかかるんじやない？」

「そういえば水蓮がはじめて俺と会つた時は笑つたな……。
大きく口を開けてポカーンって顔してたし……。

それ見て大笑いして、嘘のことばらしたらなんかすぐ怒られたな
ー。」

もつと早く教えてよ、とか何とか。

つて、嘘つてばらしたらまた怒られるのかな、俺。
しかも雪蓮達はたぶん……。

「……いや。たぶん、あいつらはもつと卑いような気がするぞ」
「へえー。ならその時はみんなで宴でもしようかしら」

孫家の者はなんか俺と会話して初めて一人前になるんだとか、昔に
誰か言つてたしな……。

うん、宴はするべきだろ? な。

「ああ、そうしよう。その方が楽しいそうだ」

「なーに? 今だつてこんな美人と二人っきりで飲めて、男として
はうれしいでしょ?」

そう言つて、水蓮は俺に酌をしてくれる。
それを飲み干し、今度は俺が水蓮に酌をする。

「まーね。うれしいつちや、うれしいんだけど……俺、お前がおね
しょしてた頃から知つてるからな~」

「ふうつー ゲホゲホッ！ も、もつ変なこと聞こ田わなこでよ…」

「ははは。わりい、わりい」

そんな風に樂しく？ 会話をじてること夜せどぞどん更けていった。

まだ小さな小蓮もこるので日付が変わる前にはお開きとなつた。
それから俺は夜が明けるまで、お気に入りの場所で月を眺めることに
にする。

「月見酒つてのもたまにはいいかな…」

そう言つて、ゆっくつ酒を楽しむ。

月がすゞく綺麗だ…。

まん丸で、大きくて、だけどその光はとても優しくて…。

周りの星たちもキラキラと輝いている。それがいいアクセントにな
つていて、まるで一枚の絵画のようだ。

「この世界に来てから上を見上げるとこ、」とを覚えた。

あつひじや、下を見下す」とはあつひじも上を見上げる「となんてほとんどなかつたしな。

そんな「とを考えてこねる」、「ひがひが近づいてくる」感配を感じた。

「うわ、今日のメインは今から始まるみたいだな…。

」ひがひが走つてもいた氣配… 雪蓮は俺の後ろにひさしひさつてきた。
そして、口を開く。

「貴方が蓮、なの？」

その声を聞いて後ろを振り返ると。

信じていらないような… けど、どうか確信してこないかな… そんな半信半疑の表情があった。
だから…俺は…。

「ああ。 ほんわ、雪蓮…」

まあ、あこやつから始めたこととした。

第七話　満月の夜（後書き）

第七話。終了です！

どうだつたでしょうか？

蓮、人間に戻る。といつお話でした…。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。
あと感想などもお待ちしています！

ではでは。

第八話。これが我が家のお猫様！（前書き）

前回の続きです！

第八話　これが我が家のお猫様！

～SIDE雪蓮～

蓮の本当の姿を見るために蓮華と蓮を探していたけど、なかなか見つからなかつた。

今は蓮華が眠てしまつたので部屋に届けた後、一人で探してゐる。けど、見当たらない…。

「どうにいるのかしら…」

そう呟いていふと、今日蓮がいた場所を思い出した。
街が一望できるあそこならいるかも知れない…！

そう思い、向かつた先で私は目撃した…。
月を見上げている一人の人を…。

「貴方が蓮、なの？」

私はどこか恐る恐る聞いてみる。
まだ確証はない。だけど…私の勘がいつていて、この人が蓮なんだ
つて…。

「ああ。こんばんわ、雪蓮…」

私の方に顔を向けて、そう言つてくるのはたぶん男の人。
すく中性的な顔立ち。

腰に届くかと思うほど長い髪の色は、蓮の毛と同じ真っ白で、目
色も蓮と同じ真っ赤だった。

この一見、女の人にも見えるこの男の人があの猫の蓮の本当の姿…。

「本当に蓮、なのよね？」

「まあね、昼にヒゲを抜かれた孫家の飼い猫こと、みんな大好き蓮
ちゃんですよっと」

その人はそう言って、優しく笑う。

その笑顔が、いつも見ている蓮の顔とダブつて見えた。
私はそれをただ、じつと見つめる。

「…………」

「あれ？ 信じてない感じ……？」

うー、困ったなーと呟く男の人。
でも全然困っていないのは一目瞭然だった。
だって目が笑ってるし…。

「それにしても、まさかこんなに早く会うとは思わなかつたぞ…」

「えつ…？」

「あの水蓮でももつ少し掛かったの了些」

「や、そつなんだ…」

「うふ。優秀、優秀。そついうわけで…」

そう言つと、男の人、「うん、蓮は私に新しい杯を渡してきた。
それを私が受け取ると、持っていたお酒をトクトクと注いでいく。

えーと…?

私の頭の上に疑問符が浮かぶ。

お酒はまだあんまり好きじゃないんだけど…。

「まずは、乾杯しようつか」

そう言つて蓮は杯をこつちに向けた。
それに合わせて私も杯を持ち上げる。

「何に乾杯するの?」

「この月の下で俺と雪蓮が会えた」と…」

笑いながらそつぱつ蓮はとてもうれしそうで…。

月の光と合わせたその顔はとても…とても綺麗だった。

少しの間それに見惚れてしまつたけど、不思議そつて首を傾げた蓮
を見て、私は慌てて頷いた。

「う、うん

「それじゃあ……」

「「乾杯!」」

私と蓮は同時にお酒を飲む。

以前、飲んだ時は変な味でんまり好きではなかつたけど……。
この時飲んだお酒はなんでかすこくおこしいと感じた。

だからこの後、私がお酒好きになつてしまつたのは仕方がないこと
……。

そり、全部蓮が悪いの……！

それから私は蓮に色々なことを聞いた。

もつ実は四百年くらゝ生きてゐるところいふ。 （けど、不死つてわ
けではないらしい）
この姿に戻れるのは満月の夜だけで、さつきまで母様と晩酌をして
いたといふこと。

『天』と呼ばれる国からこの国にやつてきたこと。
この国に来てすぐに私たちの『』先祖様に拾われて、それからはずつ
と一緒にいること。

一度だけご先祖様を助けたら、いつの間にか守り神なんて呼ばれる
よくなつたこと。

本当に色んなことを聞かせてくれた。

蓮は話上手で、どんな話もとてもおもしろかった。

信じられないような話もたくさんあつたけど、なぜか蓮が嘘をついていないとわかった。

話している時の田が嘘じやないつて、そう言っていたから…。

→ SIDE 蓮 →

雪蓮と酒を飲みながら、色んなことを話して聞かせた。

昔のこと…。天のこと…。俺の知っている昔話。

その話の一一つを田を輝かせながら聞いている雪蓮を見て、まだまだ子供だなって思った。

ただ、天から墮とされたことと力を封印されたことは話さなかつた。
別に暗くなるような話は、ね?

けどやっぱり孫家の子だな…。

これ結構、度数の高い酒なんだけど、うまそうに飲んでるし…。

「うそっ、本当に将来が楽しみだ。

楽しい時間とこののは早く過ぎるもので、だんだんと自分が泣くできた。

この楽しい時間もおしまー、かな…。

さてと、やれじやあ最後に一言だけ言つておこうかな。
俺は回じよひにて空を見上げていた雪蓮に声をかける。

「雪蓮…」

「えー？ なー?..」

「あいつ…雪蓮もこつかは王になれる…」

「うん」

それはたぶん決定事項だ。

水蓮のあとはこのまま雪蓮が継ぐことになるだら。

後はそれが遅いか早いかの違いでしかない…。

「王は臣下達といひの地に住んでこゝの民たちを導いてやらないことにな
ない」

「うそ、そうね」

王は常に先頭に立つ、云わば道標だ。
前を切り開き、後ろの者たちを率いていく。
そう言つものだって俺は考えている。

雪蓮も王の役割が分かつてゐるだらう。
俺の言葉に大きく頷いていた。

「だけど王は孤独だ…。たとえ、どんなに仲の良い信頼できる臣下
にも言えないことが出て来てしまひ…」

王はじ、悲しい仕事はないような気がする。
常に私ではなく公として動かないといけないし…。
やりたいこともできない…。
言いたいことも言えない…。
きっと…そんなこともたくさんできる…。

「うん…」

その時のことを考えたのか…。

少し顔が暗くなる雪蓮。

だから、や…。

「だからそんな時は…。俺に話せばいい。俺はずつと傍にいるし、
愚痴くらくならこくらでも聞いてやるから」

そう言つて俺はポン、と雪蓮の頭に手を乗せる。

孫家と共にあること…。

それが昔の当主との約束…。

守り神としての俺の役目…。

そして、今の俺ができるたつた一つのことである。

「聞く、だけなの…？」

少し、不満そうに雪蓮がそう言つてくる。

力を貸してはくれないのかと、田がそう言つてくる。

「聞くだけだよ」

「なんで…？」

「だつて俺、ねこだもん」

それ以上を求められても困ります。

少し上目遣いで膨れている雪蓮にそう言つて俺は笑う。
それにつられて雪蓮も笑った。

夜が明け、太陽が出てこようとしている。
それと同時に俺の身体もゆっくりと光り出す。

「れ、蓮！？」

雪蓮は光り出す俺に慌てて声をかけてくる。
なんかすじく必死だ。

「ははは。もう時間切れ、だな」

「そつか…」

寂しそうな顔になる雪蓮…。
まったくそんな顔、すんなよ。

仕方がないので雪蓮の頭を撫でてやる。
いつもは撫でられているのに今はまったく逆の立場だ。

「雪蓮、またね」

「うふ…また」

最後にそつ言葉を交わすと俺はねっこ戻った。

むう。…。

視線がやつぱりすくく低い。

「本当に蓮だつたんだ」

「こやーん」

俺の方をマジマジと見る雪蓮に返事を返す。

つて、信じてなかつたんかーい！
心のなかで突つ込みを入れつつ、俺は欠伸をする。
すると俺のが移つたのか雪蓮も欠伸をした。

「…寝よっか

「こやー

俺は返事を返して、雪蓮とは反対の方向へと向かつ。

まあ正体を明かしたわけだしな。

まだ子供だって言つても一緒に寝るのはもう嫌だらう。

そう俺は思つたわけだつたんだが。

「蓮？ どこに行くの？」

そう言つて俺を捕まえる雪蓮さん。

いや、ほら。

一緒に寝るのはあれかなーって思つたんだけど……。

「私は別に気にしないわよ。だって人間でも猫でも蓮は蓮でしょ？」

そう言つてもうえののはうれしいんだけど……。

…本音は？

「正直、猫の印象が強すぎてそれ以外に見えない。人間が猫になつたつていうより猫が人間の形に化けたつて感じがするのよね~」

とこうわけで、一緒に寝ましょ？

そつ言いながら雪蓮に連れていかれる俺。

どうやら俺は結局、飼い猫の蓮君のままのようです……。

それは別にいいんだけど、なんか人の尊厳を奪われたような……。

ま、いいのかな……？

そんな風に思いながら、俺と雪蓮との初対面は幕を閉じるのだった。

その後。

お昼になつて起き出すと、すゞくむくれている蓮華がいた。

なんでもねえさまだけずるい、とのこと。

そのご機嫌取りが大変だったことはいつまでもない。

第八話。これが我が家のお猫様！（後書き）

第七話。終了です！

どうだつたでしょうか？

結局は猫扱いをされる蓮なのでした。

お気に入りが400件、総合評価が1000点を超えていました。
みなさん、ホントにありがとうございました！

これからもがんばつていいくので応援してくれるとうれしいです！
では。

第九話　宝探しヒレッジ&パー！

皆さんには「存知ですか？''

建業のどこかに、こゝんなどでかいお城がある事を。

お家の名前は『孫家』。そして、そこのおじ君の名前は『蓮』。

ねこにはちょっとひり秘密があつて、ちょっとひりと書つてない」ともあつたりして。

でもとてもとてもかたゞい家族の愛で結ばれているのです。

ども、毎度おなじみ、飼い猫の蓮です。

前回、人間だつて教えたのに全然扱いが変わらないことについて。
次の時に蓮華にも教えたんだけど……。

「す」いね、れんはにんげんにもなれるんだ～
そう言って田を輝かせるだけでした。

うん。

やっぱり俺はあくまでも猫らしい。

ちょっとへこんだので、水蓮に話したら大爆笑してた。

悔しかったので酒を取り上げたら、速攻で謝ってきたからまあ許し

た。

それにしても、雪蓮も蓮華ももうしゃべりコアクションしてくれたっていいと思つんだよ。別に嫌われるよりはいいんだけど…。

そんなことを少し黄昏ながら、考へてみると…。

「蓮！ 宝探しに行くわよーーー！」

俺の所にやつてきた雪蓮がいきなりそいつ言つてきたのだった。

急遽、決まった宝探し。

構成パートナーは以下のようになつた。

勇者：雪蓮

賢者：冥琳

魔物使い：蓮華

魔物：蓮

うん。

なんかすげ文句を言いたいというがあるんだけど…。
いいかな？ ねえ、いいかな？

「よし、これなら完璧ねー。」

「ああ、最高の編成だ。どこにも隙がない」

いや、あるよね。

突つ込む隙が、わりと普通に…。

「れん、がんばりつけねー。」

はあ～。

もう魔物でいいですよ…。

「書庫でこれを見つけたの」

それにしてなんでも宝探しなんぞを?
俺がそう思つて首を傾げると雪蓮が説明してくれた。

そう言つて雪蓮が見せてくれたものは一枚の地図だった。

良く見てみると、どうやらこの周囲のものみたいだ。
その中で一ヵ所だけ田印の付いている場所がある。
何かがある場所を示しているのかな…?

「これはきっと街の地図よー。ここに何か隠されていくよいな気がするのー。」

「また、勘か?」

「ええ、そうよ」

雪蓮は冥琳の問いにそう笑顔で返す。

雪蓮の勘がいっているのなら、たぶん何があるんだろうけど…。

ただ、どーも昔に見たことがあるような気がする…。

それに加えて、嫌な予感も…。

「それじゃあ、行くわよーー！」

「しゃりぱりーー！」

そんな不安を感じながら俺たちの冒険は始まったのだった。

「れん！ みゃー！」

「へーちゃんー！」

「了解です！
マイマスター。」

俺は一いつ瞬に飛び掛ってきた野犬にストライクレザーコローを食らわせる。

まあ、ただのひっかき攻撃ではあるんだけど…。

野犬は予想外の反撃に怯んだみたいだ。
そして、その隙を見逃す雪蓮ではない。

間髪いれずに野犬に攻撃を加えた。

その結果、簡単に吹き飛ばされる野犬。

てか、鍛錬をしているとは聞いてたけど、雪蓮がマジで強いんですね
けど…。

もしかしたらもう一般兵より強いんじやないか…？

俺がそんなことを考えている間に、勝てないと見たのか野犬たちは
逃げ出していた…。

ふう〜。

戦闘終了なり〜。

俺たちの探険はなかなかスリルのあるものとなつていて。

今みたいに野犬に囲まれたり、ハチの巣から大群が攻めてきたり。
熊の親子と遭遇したので音をたてないように静かに逃げたり、巣か
ら落ちてきた雛鳥を巣に戻してあげたり…。

うん。

普通に本でも出せるくらいの大冒険をした気がするぞ。

少しほ蓮華が怖がるかなーとも思つたけど…。
どうやらこの子も間違になく孫家の子のようだ、終始樂しんでこる
様子。

今も二二二二二顔だ。

雪蓮は言わざもがなで。

鼻歌を歌いながら、先頭を歩いている。

となると、一番大変なのは冥琳だ。

顔を見れば、若干お疲れのご様子。

「? ～せば」

心配になつたので、とりあえず声をかけておく。すると、眞琳は俺を見てすぐに抱きかかる。

「ありがとう。蓮だけが私の癒しだよ…」

そしてモフモフしながら俺にそう言つてきた。

なんというか、まあ……。

名物と云はれるやの田まで…。

朝に出発したが、今はもうお昼だ。

雪蓮の武勇、冥琳の知略に俺と蓮華の連携。これらがいい感じ融合した俺たちは、結構いいパーティーだったようで割かしサクサクと、先に進んで行けた。

これなら、もうすぐに田的で到着するだらうな。俺は昼食を食べながらしきつ思想のだった。

「うへん。このあたりのはずよね……」

「ああ。地図に書いてあるのはこのあたりだな」

森の奥にある少し開けた場所で止まると、雪蓮と冥琳がそり出た。確かに地図を眺めてみると、この辺りを指してこるみつて見える。

地図を見ながら、みんなで少し考え込んでいると…。

「あつーー、エーハツーー。」

そつ言つて、蓮華が指を差した方向には少し小さめの洞窟があつた。
どうやら、うまく木の枝で入口が隠れていて見えなかつたようだ。

「お手柄よ、蓮華！」

「良く見つけましたね、蓮華様」

「えへへ～」

蓮華を笑顔で褒める一人。

一方の蓮華も褒められてうれしそうだ…。

ただ俺だけは、少しだけ考え方をしていた。

うーん。

この洞窟つて見覚えがあるぞ…。

うん、絶対にあるはず…。

ここは確か…。

「よし、じゃあ中に入るわよ

「おーー。」

「やつだな。本当に何か隠されているのかもしれん」

そんな間にも三人は洞窟の奥へと進んで行く。

その顔を見れば、みんなどんな宝があるのかを楽しみにしてくるようだ。

俺も昔の記憶を思い出しながらそれに続いた。

。。。

。。。

。。。

あつ。。。

思い出した。。。

思い出したぞつ！

つてことは宝物つて。。。

あれ、だよな。。。

ここにある宝物の見当がついた俺は顔を引き攣らせる。

洞窟の一番奥には小さな木でできた箱があった。
そしてその中には。。。

「ん~。何かの本かしら」

「みたい、だな。題名は……」「

「れんとわたし……?」

「作者は……」

「孫 文台……」

やつぱり水蓮の黒歴史日記だつた――――

あの所々によくわからないポエムとかが書いてある奴……。
しかも日記の中身はほとんど嘘な、妄想日記だし……。
今になつてみれば、大層黒歴史な代物だらう。

そう言えば確か……。

捨てるのは嫌だとが言つてここに隠しに来たんだつたな。
無理矢理、連れて来られた覚えもあるし……。

てか、あれを娘たちに見られるとか……。

ご愁傷様、水蓮……。

そつこいつしている間に中を覗いていた三人が、ぱたんと日記帳を閉じた。

中を覗いていた三人は何やら非常に微妙な表情をしていいる。

「……これは持つて帰れないわね……」

「あ、ああ。ここに置いていた方がいいだろ？」「

「かあさま……」

早速、封印指定が掛かった日記帳。
うん、その選択はただし。

俺たちは何も見ていない……。

それがみんなで幸せになれる唯一の方法だ……！

「……して俺たちの冒険は幕を下ろした。

最後に、変な空気になつたけど……。
気にしたら負けだね！！

後日、娘たちから何やらすく生温かい目で視線を送られている江東の虎がいたとかいないとか……。

第九話　宝探しにレッジ&パー！（後書き）

第九話。終了です！

いかがだったでしょうか？

誤字脱字がありましたら「報告をお願いします。
あと感想などもお待ちしています～！
ではでは。

第十話。ねこ、攫われる

この物語はスーパー・ハンサム・ネコ、蓮と彼を取り巻く美女達の愛と肉欲とポロリが満載の小説である。注：嘘です。

姉さん、事件です！ SOSです！

どうも只今、誘拐されている真っ最中のねこ、蓮君です。
なぜかはわかりませんが、人攫いに攫われているみたいです。

押し込められた馬車のなかには、俺の他に数人の子供たちもいます。

はあ～、姉さん…。

どうやら面倒事のようついです…。

話は今日の夜にまで遡る。

あの満月の夜の雪蓮との対面から時は流れ、早五年。
水蓮の黒歴史の発見からも早五年。

あれから毎回、孫家のお姫様たちと過ぎすことになった。
まー、正確には水蓮と一緒に所にみんなで乗り込んで来るんだけど
ね。

俺の知ってる面白い話を聞かせてやつたり、一緒に月を眺めたり、
なぜか武術の稽古をつけてやつたり。
毎回、楽しくやらせてもらつてる。

昨日の夜もそんな感じで過ぎ、蓮華と小蓮を寝かしつけた後に水
蓮、雪蓮と酒を飲んでいた。
結局夜明けまで飲んでいて、蓮華に見つかり水蓮、雪蓮共々怒られ
たのもいつものことだ…。

説教が終わり、ここに戻るとすぐ睡魔が襲ってきた…。
このまま城内で寝てると怒られるかなと思つた俺は城を抜け出
たわけなんだけど…。

なんか五、六人のおっさんズ…所謂、賊のみなさまにあつといふ間
に攫われちゃいました。
そして冒頭に戻る、というわけである。

うへん。どうじよつかな。

一人で逃げられるわけもないし……。

…………。

…………。

ふあー。

……ねむ。

とつあえずは寝よっかな……。

いずれ水蓮たちが助けに来るだろ、うじ。
まあ、なんとかなるでしょ。

助けが来るまで寝てようかとを考えていた俺だったが……。
ふと、一番奥で泣いている女の子が田に付いた。

蓮華くらいの年齢だらうか……。

小柄で真っ黒な髪の女の子だった。

びつやから危てこむ子供たちよりももつと怖がっているみたいだ。
今も身体を震わしながら、泣いている。

女の子が泣いてこるのはあんまり見ていたいものじゃないしな……。

そう考へた俺は女の子の方と向かって行くのだった。

「SIDE蓮華」

「蓮一？」

「れーんー？」

私は今、シャオと一緒になつて家の飼い猫の蓮を探している。
探しているのだが…おかしい。
いつもなら、もう私たちの声を聞いてすぐにやつてくるはずなのに
…今日は一向に姿を現さない。

私はそれを不思議に感じながらも蓮を探す。
しかし、なかなか蓮は見つからない。

街の方に行っているにしても毎には一度帰つて来るはずだし…。

「れん、 いないねー」

「うーん。おかしいわね」

私はシャオと一緒に考え込む。

本当におかしいわ。

今までこんなこと一度もなかつたのに…。

私がそんなことを考えていると、別の所を探していた姉様がこっちはやつてきた。

「蓮は見つかつた？」

「あつ、姉様…。いえ、どこにもいません」

「れん、よんでもでこないのーー！」

「そう、私も見つけられなかつたわ…」

どうやら姉様も見つけられなかつたらしい。
姉様はそのまま考え込むと顔を少し顰めた。

「しゃれんねーさま？」

「どうかしたのですか？」

「ううん。ただちょっといやな予感が、ね…」

姉様がそう言つと、何人かの兵士を連れた母様が歩いてきた。
けど、いつもどじこか様子が違う。

そり、あれはまるで戦場に向かう時みたいだ。

「母様、どうかしたの？」

母様の様子を見て、不思議に思ったのか。

姉様がそう問い合わせる。

そして、私たちは驚きの事実を聞かされた……。

「…蓮が攫われたわ」

「SIDE蓮」

「モフモフです〜

「…や、や二一」

あ…ありのまま今、起じた事を話すぜ！

『俺が女の子を慰めようと思つたり何時の間にかおもかせられて
た』

な、何を言つてゐのかわからぬーと細つが、おれも何をされたのか

わからなかつた…。

催眠術とか超スピードとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ…。

もつと恐ろしいものの片鱗を味わつたぜ…。

「次はおれ～」

「私もさわりたーい！」

そして次々と俺の周りに寄つて来る子供たち。

おいおい、お前ら。

俺らつて一応、誘拐されたんだぜ？

ちょっとは緊張感持とーよ。

ま、でも泣いてるよりは全然いいのかな…？

仕方ない、付き合つてやるか。

ほら、好きにし…

「モフモフモフモフモフモフ。ん～、気持ちいいです～。最高です

」

「うわー、気持ちい～」

「ほれほれほれー」

つてお前ら、少しは加減つてものしるー。
いや、してくださー！ も願いしますからー！

そんなに適当に触られると…。

「「いやあ…」

ほら毛が逆立つた…。

はあ～、また毛繕いしなくひや…。

「うじて俺は全身を触られまくった…。
うう。もう好きにして……。

そんな風に馬車の中で流れていた緩やかな空気は、馬車が止まり、
一人の男が入つて來たことで終わりを迎えた。

男たちはかなり慌てているようだ。

何か予想外のことでも起こつたのか…。

「あいつら…こんなに早く追いかけてくるなんて…！」

「へやつー 簡単な仕事だと思つたのによお…」

どうやら、水蓮たちが追いかけてきたみたいだ。
しかももう確認できるといひここまで来ている……。
あと少しの我慢だな……。

じゃあ、なんでこいつらは止まつたんだ……？

一瞬、そう思つた俺だったが答えは簡単だった。

「仕方ねえ、人質使つてなんとか逃げるしかねえな」

そう言つと男は俺の周りに固まつてゐる子供たちに視線を向ける。
子供たちは先ほど元気はもう見る影もなく、その顔には恐怖が張
り付いていた。

「おいつー、お前に俺らの人質になつて貰うぜ」

「大人しくしていろよ」

男たちはこの中で一番小柄な女の子……あの黒髪の女の子に両手を付け
たようだ。

ゆっくりとその腕を伸ばし、女の子を捕まえようとする。
女の子は両手をぎゅっと閉じ、小さな声で助けてと呟いた。

はあ～。

どうやら俺は結構、バカ野郎らしい。

だつてこんな時、勝手に身体が動き出すんだから…。

「こやつ…」

「うわっ、痛つ！」

俺は後先考えずに男へと飛び掛かる。いきなり顔を引っ掻かれた男は一瞬、慌ててたが…すぐに俺を引き剥がした。

「なんだ、こいつ…」

そう言つと、もう一人の男が持っていた剣を大きく一振り。俺はその攻撃をうまくかわし、男の顔の横側に猫キックを食らわせる。

男は猫キックをもろに食らい、その場に倒れた。

うん、我ながらうまいといったな…。

俺がそう思った瞬間。

「ここのくそ猫がっ！」

始めに引っ掻いた男に俺の腹をおもいつきり蹴りつけられた。蹴り飛ばされ、何度も叩きつけられる俺。

一瞬、息が止まつたかと思うほどの衝撃とその後に来る猛烈な痛み。
何本か骨が折れたかな…。

弱いよな～この身体…。

本当にこういう時、猫の身体の自分が恨めしい。

男は相当、頭に来たのか。

倒れている俺の首を掴むと、そのまま俺を持ち上げた。

苦しい…。

すっげえ苦しい。

けど、この腕を離さることは俺には出来ない…。
もう力はほとんど残っていなかつた。

てかおっさん、本当に首絞まつてるから…！

俺、死んじやうから…！

いやまあ、殺す気なんだろうナビ。

「Jのバカ猫が！ 人間様に楯突いてんじゃねえよー！」

そう言つて、さらに手に力を入れる男。
それに呑わせて俺の意識もだんだんとなくなつて来る。

ははは、これは死んだかな…。

けど、おっさん…。そうやつて俺に構ってるのもいいけどさ…。
あなたの後ろに桃色をした虎が一匹いるから気をつけた方がいい
ぜ…。

そつ思いながら、俺は意識を失ったのだった。

まだ最終回ではないぞい。
もうひとだけ続くんじや。

はっ！ 何か今、亀の甲羅を背負つたサングラスの老人がいたよ
な…。

俺はそんな変なことを考えながら、目を開ける。
上には見なれた天井があつた。

どひやら、建業の城に戻つてきたみたいだな…。

「目が覚めたのね…」

その声に視線を向けると、水蓮が横の椅子に座つていた。
少し動いただけで、身体に激痛が走つたのはここだけの秘密だ。

「まつたく無茶するわね…」

いや身体が勝手にね…。

そういえば、あの子供たちは…？

「全員、無事だつたわ。今は自分たちの家にみんな帰つてる

そつか。

それなら良かつた…。

「あの子たち、みんな言つてたわよ…。猫神様にお礼がしたいって
る。特にあの黒髪の女の子」

ふーん。

別にそんなのいいのにな…。

この時の俺は知る由もなかつた。

あの時助けた子たちが恩返しと称して全員、土官していくのことを…。そのメンバーが中心となり、お猫様親衛隊なるものができたりすることを…。

この時の俺はまだ知らなかつた…。

「貴方が氣を失つた後は大変だつたわ…。子供たちは泣き叫ぶし、雪蓮は暴れるし…」

それは…悪い」としたな。
んで、お前は…?

「もうひろん、あいつらを皆殺しにしてやつたわよ」

そう言つて、笑顔を見せる水蓮。
あ～、お前もキレてたわけね…。
それにしても身体が痛すぎるんだけど…。

「自業自得よ…。まあ、今日はもう休みなさい?」

そう言つて、俺の頭を一撫ですると水蓮は席を立ち、扉の方に向かつ。

さて、俺はもうひと眠りしますかね…。

そう思つていた俺に一度、こちらを振り返つた水蓮が爆弾を落としつきた。

「ああ、あしたぶん畠山には蓮華の説教があるから、楽しみにしてなさい」

えつ？ マジ…？

それってなんて死亡フラグ…？

れんは めのまえが まっくらになつた。

第十話　ねこ、攫われる（後書き）

第十話。終了です！

いかがだったでしょうか？

黒髪の女の子…後の明命である、の巻でした。

誤字脱字がありましたら報告をお願いします。
あと感想などもお待ちしております！
ではでは。

第十一話 猫は「たつや」たつがないだと…? (前書き)

少し、日が空いてしまってすみません。
ちょっと季節外れですけど、なんとなく書きたくなつたんで書きました!

では本編をどうぞ

第十ー話。猫はいたつでいたつがないだとー?

季節は巡り、時は流れる。

今年もあの季節がやつてきた。

みなさんも好きな季節がありますよね?

春夏秋冬。

どれもいい所がいろいろあります。

もちろん、俺にも好きな季節があるわけで……。

春はいいよね。

夏もいいよね。

真っ青な空に白い雲が浮いてて、見てるだけでのんびりできめんし……。

秋もいいよね。

涼しくなってきて、山とかの色とかも変わっていってすいへん綺麗だし……。

ただし冬……てめえはダメだー!

今も外では雪が降っている。

しとしとしとしと、雪が降ってやがる。

俺のテンションも比例してどんどん落ちてこく…。

確かに綺麗だとは思うよ??

真っ白だし、ふわふわだし。

雪化粧つてもこんなものだと想つし、結晶とかもみんな違う形でいいと思つぶ。

だけど…。
そんなことじつを差し引いても…。

冬は寒くさむんだよ…!!

俺も一応はさ。

毛を冬モードにしているんだよ…?

空氣も入れて膨らませてしているんだよ…?

なのに何を、これ?

もう一步も動きたくないんだけど…。
てか動くと凍え死ぬ。

どこかで聞いた歌だと雪が降ると犬は喜んで庭を駆け回るしこな
どや。

正直、理解に苦しむわ…。

俺は無理。マジで無理。

名も知らぬ犬たちよ…俺にもその元気をわけてくれ~。

あと確かに猫はこたつで丸くなるんだよね。
いいよね、こたつ。

人間は素晴らしいものを生みだしたと思うよ。

だけども~だっけど!

この世界というか時代にはこたつがないといひ間に。

なぜだ――――――――!

普通、冬こたつとみかんはワンセットじゃないのか…!
神よ、なぜこんな試練を俺に下さるのですか…?

俺のことが嫌い…?

はいはい、そうですか~。

俺もお前らなんて大っ嫌いだよ――!

実際にはろくな奴はないしね…。

そんなこんなで比較的暖かい部屋の中で、小さく丸くなっていた俺
は突然の襲撃に遭う。

そう、今日もあいつがやってきたのだ。

「れん」

「ウ！」

声を聞いたとたんに俺の身体に緊張が走った。
身体をさらに小さくし、なんとか忍び寄る魔の手から逃げようとする
が…。

「ふふふ。甘い甘い！」

「...ハセガワ」

奴の手は俺の鉄壁？　の防御をひらりとかわし、懐へと侵入。
そして…いきなりお腹に氷のような手をつけられた。

「うわ～。やっぱ蓮は最高の湯たんぽよね」

いやあつたか、あつたか、じゃないから！
俺を便利グッズと勘違いしてないかにや！？

俺の抗議の視線は無視され、なおも身体を弄られる。その度に俺の毛が逆立つ。

הנִּמְלָאָה

これって、ある意味拷問…。

「マジでやめてくれないかにゃ……。

所々、語尾もなんかおかしくなつてきたり。

折角、温めて置いた俺の体温がつ！

「ほひほひ、蓮華もビーフヘ

自分の手が温まってきた後、雪蓮はさりに追って打ちをかけてくる。
鬼だ！ ここに鬼がいるぞー！

「も、もう、姉様？ 蓮が嫌がつてますよ？」

いやいや、蓮華さん？

そう言いながら冷たい手をつかむのは……。

「ヒヤん！」

やめて貰えるとうれしいな～なんて。
もひづいんだけど……。

「本当。暖かい……」

俺を弄りながら、ほつこつ笑う蓮華。

そんなにいい笑顔を見せても許してやんないんだからね……。
という元気も今の俺には残されていなかつた。

体温カムバーアク！！

「わーいと、手も温まつたことだしぃ…」

「そうですね。もう充分です」

あらかた満足した後、姉妹はこともあらうか俺を外に連れ出したりとする。

やめて… もう俺の残基は一基も残つてないぜ…。

「折角、雪が降つてゐるんだからもつたいないじやない

「蓮、外の景色もすゞしく綺麗よ?」

そつと云つて俺を説得しようとしてくる一人。
いや正直、引き籠りたいんですけど…。
寒いの嫌だし。

「もう仕方ないわね…」

「強制連行よー!」

「「」やーー!」

そういうと雪蓮は俺をひょいと持ち上げ…。

俺を外へと連れ去つた。

助けて、蓮華～!

と最後の頼みである蓮華を見るも…。

「まつたく姉様は…」

そう言いながらも笑顔で付いてくるだけだった。

ブルータス！　お前もかつ…！

結局、その後。

外で雪だるまを作っていた小蓮にまた湯たんぽ代わりにされた。今度は逃げることもできたけど、俺は逃げなかつた。

べ、別に作つてた雪だるまが俺を似せてて、うれしかつたとかじゃないよ？

真っ赤になつてた小蓮の手を見たからとかでもないからね…！

勘違いしないでよね…！

「きやー…？」

なんか変にツンデレつてた俺に、突然飛来してきたものが直撃する。声をあげた所を見ると横にいた雪蓮に当たつたようだ。

たいして痛くもなかつたそれは、よく見てみると雪のかたまりだつた。

ふと視線をすらりすと、こちらをにやにや笑つて見ている水蓮の姿が…。

ふふふ…。

俺は少しだけ笑いながら、雪蓮に視線を合わせる。雪蓮も俺を見ると大きく頷いた。

気持ちは一つ。

よひじい。ならば戦争だ！

「ついで第一回、仁義なき雪合戦大会が幕を開けた。

まあ結果は…。

「こぐらなんでも因対一はずるこんじゃないー？」

「何をいつてるのよ！？ 先に仕掛けってきたのはそっちでしょー！」

「今回は母様が悪いです。これはお仕置きですー！」

「シャオもなげるー」

逃げ回る水蓮を三姉妹が追撃している。

わっははは！

圧倒的じゃないか、我が軍は！

しかし、そう思つてた俺の顔に雪玉が直撃。

「油断大敵」

そう言つうと笑つてまた逃げる水蓮。

俺はそれを追いかけよつとしたが、すぐに止めた。

だつて水蓮の目の前に…。

「水蓮様？ お部屋にいらっしゃらないと思つたら…」

すつじい笑顔の鬼がいるんだもん。

「め、冥琳？ ほらたまには家族との時間も大事かなーって、ね？」

「ほひ。では政務は大事ではないと？」

「そ、そんなことはないのよ？ た、ただ……。ほらみんなも何か
……」

助けを求めるようと水蓮が後ろを振り返つてみると、

自分の家族の姿はどこにもなかった。

ただあるのは自分の飼い猫に良く似た雪だるまだけ……。

「裏切つたな。私の気持ちを裏切つたんだ！」

「変なことを言つてないで政務に戻つてください」

「い、嫌～！」

そして、そのまま水蓮は引き摺られて行きましたとさ。

お・し・ま・い。

第十一話。猫は「たつで…」たつがない…だと…? (後書き)

第十一話 終了です！

いかがだったでしょうか？

猫つていえば「たつじやね？」って思つて書きました。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！

では。

第十話。 ひみつ？ 俺は簡単には負さんよーー（前書き）

更新が遅くなつてすみません。

なんとか角膜炎になつてしまつて苦しかりました…。

だいぶ治つてきたので更新します！

では、どうぞ！

第十一話。元気なついたい？ 僕は簡単には負けんよー！

「ひめっしー。」

みなさんも子供のころ一度はやったことがあるのではないだろうか？

無表情、またはおかしな表情をつくり、どちらかが先に笑つたら負け、というルールで雌雄を決するといついたって簡単なものだが、それだけに奥が深い。

代表的な子どもの遊びのひとつであるが、これはある種の決戦でもあると言える。

声を出すまでとか色々とローカルルールもあるらしいが、俺の中のルールでは基本的に変顔オンリーである。

しかしまあ、なぜこんなことを書い出したのかといつてだ……。

「…………」

それは今まさに、にらめつゝ中なわけでも……。

しかもお相手は最近、我が孫兵に入ってきた一人の武将。

甘寧さんである。

その甘寧さんは今も俺に鋭い視線を向けていますよ、はい。

でも俺は
……。

俺はあいつらのためにも簡単に屈するわけにはいかないんだーー！！

彼女の名前は甘寧。

真名は思春といひりし。

もともとは江賊つて奴だつたらしいけど、水蓮にその腕を買わされて

今は蓮華に付いている

いつもは政務をしている蓮華の手伝いや護衛をしているらしい。

いやはや、あの蓮華が政務をしているとか。
すごく時間が流れた感じがするよね……。
感慨深いというか、年取ったっていうか……。

まあ、それは置いといて。

問題はその甘寧さんである。

少し取つ付き難い雰囲気を醸し出していくことからもわかるけど…。みんなに話を聞いてみると今まで笑顔になつたのを見たことがないらしい。

たぶん真面目な人なんだと思うからそつとしておけばいいのに、なんとかその笑顔を見たいというアホな君主様が現れたのだ。

「というわけで蓮。思春を笑顔にしてきなさい」

そしてこの無茶ぶりでる
いやいや、あの人も人間なんだからきっといつかは笑つてくれると思つよ。
だからそれまで待てばいいじゃない。

「私はすぐに見たいの。それにあの子もその方が早くここに馴染めるかもでしょ？」

もう慣れたもんであるが俺の意見はすぐさま却下された。
もう…。

あの雰囲気が少しでも和らげば、周りともっと仲良くなれるのは確か…。

「そ」は水連の言つとおりなのかもしないけど……。

「まあ、蓮じや無理だつてこいつのなら仕方がないけど……」

そつ言つて水連はにやりと笑つた。

むむむ。

いやつ……。

俺が笑つてゐる水蓮を睨んでいると、傍で話を聞いてきた姫様たちが話しに入つてくる。

「大丈夫よ、母様。蓮なら余裕余裕」

ね？ つといった感じで俺に話を振つて来る雪蓮。

「蓮…出来る？」

聞いてこりよつとも聞こえるけど……。

その日は期待に満ち溢れてこる蓮華。

「シャオも思春の笑つてこるとこみたーー」

弾けるばかりの笑顔を見せ、俺の逃げ道を完全に失くしてくる小蓮。

「もちろんタダではないわよ。お魚一週間分でいいっ！」

そして、水蓮のトドメの一撃。

.....。

.....わかつたよ。

やつてやろーじゃないかっ！

ミラシモン・気になるあの子を笑わせりー···が発生しました。

勝利条件···今日中に甘寧さんを笑わせる!」と。

敗北条件···上記が達成できないこと。

成功報酬はみんなうれしいお魚一週間分。

なお失敗した場合はしばらくお魚抜きとなつてこるので、注意を。

これが俺に不利なような気がしないでもないが···。

まあいい。やつてやんよー！

そんなわけで、俺の絶対に負けられない戦いが幕を開けるのだった。

（蓮が部屋を出た後）

「もひこつちやつた。意外と蓮つて単純よね～」

「うそ、」優美には魚を出せば一発だしねー。」

「あれは昔から変わらないのよね。本当に扱いやすいわー」

そんな三人の会話を横で聞きながら…。

「蓮…。色々頑張つて…」

蓮華がそう呟いていたとかなんとか。

さて、まずは敵を知るうつと言つわけで、追跡をして見る」とい。敵を知らずんば百戦危うからず、といつやつである。

追跡して見れば、何かしらのヒントがあるはずと思巻いていたんだけど…。

結果は……。

うん、予想以上だった。

兵の鍛錬や街の警邏をしてても好きな物とか何にもわからない。

基本的に鋭い空気を醸し出しているし……。

おやつさん、隙がないぜい。

ここつは強敵だ……。

敵の強大さを確認した俺は、とにかく策を練つてみることにした。好きなものがわからなかつたから、あと笑わせる手段で思いつくのは……。

くすぐりの計。

モノマネ。

一発ギャグ。

ショートコント。

（

むむむ。

どれも行ける気がしないぞ……。

そこまで考えていて気がついた。

あつー？ 僕、ねこじやん……。

考えたやつがどれも実行できること……。

仕方がないので、ねこの姿でも出来るることを考へる……。

.....。

何も浮かばねえ……。
てか動物がきらいな可能性もあるし、アレルギーとかだつたりびつ
するよ……。

あれ？ これって軽く詰んだ？

そんな状況に軽く絶望していた時。

俺の脳裏には水蓮たちの顔……ではなくて報酬の一週間分のお魚た
ちが浮かんだ。

お魚たちはつぶらな瞳で俺を見つめている。

……そうだ。

ここで諦めてどうするんだ！

俺がここで諦めたらあのお魚たちは……俺に食べて貰えないじゃな
いか！

俺は腹を括った。

かくなる上は突撃あるのみである！

昔の偉い人もいつていたはずだ。

当たつて砕けると！ ジャパンーズ玉碎精神だと！・！

今こそ俺はその精神に則る！

俺は決死の覚悟で飛び出した。

「…………」

「…………」

こつして中庭で休憩中の甘露さんとこりめつこじしているわけなんだ
けど……。

ダメです。

全然、笑つてくれないです。

間抜けな顔をしたり、舌を鼻まで伸ばしてみたりと色々身体を張つてみたけど、少しも表情がかわらない。

おまけに…。

「…何がしたいんだ？」

そんなことを言われる始末。
うう。もう心が折れそうです。
てか折れた…。

さよなら、俺のお魚たち…。

とこうか俺の変顔、面白くなかったのかな…。
祭とかは前、大爆笑してたのに…。

そんなことを思いながら傷心中の俺が爪を器用に使って地面にのの字を書いていじけていると…。

「もしかして…私を笑わせようとしてくれたのか？」

甘寧さんが俺に疑問を投げかけて来る。

俺はそれににゃーと返事をしながら大きく頷いた。

「そうか…変な猫だな」

そう言つと甘寧さんは俺と視線を合わせるよつにじやがみ込んだ。
そして、慣れない手つきで俺を撫でてくれる。

表情に変化はないけど、その雰囲気は少し柔らかくなつたよつに感じた。

おれるおれるといった感じだけど、優しく触ってくれていることから動物が嫌いとこつわけではないみたいだ。

俺を慰めてくれていいみたいだし、この人はいい人に違いない。
そう思つた俺は喉を「ううう」鳴らしながら、その手に頭をこすりつけて甘えることとした。

「私は余り動物には好かれなかつたはずなんだが……」

そう言いながらも撫でる手は止めない甘寧さん。
だんだんとうまくなつてきたその手捌きが俺を夢の世界へと誘い始めた。

「ん?
眠いのか?」

「……」

俺がそう答えると、甘寧さんは座り込んで俺を膝の上に乗せてくれた。
そしてまた撫で始める。

んー、ねむ……。

おやすみなさい……。

「うひって俺はそのまま寝をするのだった。

～SHIDE思春～

「眠つてしまつたみたいだな……」

私は静かに眠つてゐる猫を撫でてやりながらそつ呟いた。

たしかこの猫は孫家の飼い猫の蓮といふ猫だ。

猫神様饅頭というものもあるぐらい街でも民たちに好かれていて、城の中でもみんなに可愛がられている。

私が今お仕えしている蓮華様もとても可愛がられている様子で、よくお話を下さる。

だから話には聞いていたのだが、直接見たのは今日が初めてだった。

しかし、直接見てみるとわかる。
確かに可愛い。

始めはいきなり変な顔をして見せて、変な猫だと思ったが……。撫でててやると甘えてきて、すこしかわいい。そして……。

「……」

どんな夢を見てこらのやう……。

なこやひ寝言を言しながら眠っている姿を見て、自然と頬が緩んだ。なんといつかずくへ和む……。

まだ仕事が少し残っているが、もつゞじのままでもいいかな。そう思いながら、私は蓮を優しく撫でるのだった。

～ちょいとその頃～

「うわ。思春が微笑んだ！」

「本当だ！ 母様～。思春が笑ってるよ～」

「やつたね！ シヤオちゃん！」

「母様…。そのネタは…」

陰から見ていた孫家ファミリーがいたとかいないとか…。

第十一話。アーヴィング？ 俺は簡単には負さんよーー（後書き）

第十一話 終了です！

いかがだったでしょうか？

思春さん登場の回でした。

誤字脱字がありましたら報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！

ではでは。

第十二話。予感（前書き）

今回から少しだけシリアスになります…。

第十二話。予感

月日が流れるのは本当に速い。

気がつけば、雪蓮も蓮華も小蓮も大きくなつてた。

上の二人は毎日政務とかもしてるし、小蓮も勉強が大変そうだ。

まあ、内一人は俺を連れ出してよく逃げ出しているけれど…。

今の県は平和といつてもいい。

祭などの古参の将たちや思春や明命などといった新しく入ってきた将たちみんなが頑張ってくれている。

武官も文官も自分の力を余すことなく民たちのために使っていた。

漢という国は荒れているが、こここの街のみんなも変わらず元気に生活出来ている。

これもみんなの頑張りのおかげだと想つと少し誇らしく。

そんな中、俺はといつとこいつもと変わらずのんびりと過ぐしている。しかし、ある意味ではねことこのことは相当にこじ身分なのではないだろうか。

寝て、食べて、寝て、遊んで、食べて、また寝る。

たまに連れ出されたり、無茶ぶりされたりすることもあるけれど。うん。本当に今が幸せだつて感じてる。

ずっとこのまま過ごしていけたらいいな。

俺は心からそう思った。

満月の夜。

いつものように酒を飲んでいると水蓮が口を開いた。

「蓮……劉表を攻めるわ」

いつもとは違った雰囲気だった。

戦のことでもいつもなら笑いながら話すのに、その時の水蓮はどこかおかしいと思った。

何か焦つてる……？

「劉表、ね……」

話によると、最近、荊州の劉表が兵を集めていると暗部から報告が上がっているらしい。

呉の民たちが危険に晒されるのなり王として動かねばならない。それは当然だと思つて、仕方のなことだとと思つ。

だけど、なんとか俺はすぐ嫌な予感がした。

別になにか根拠があるわけじゃない。

水蓮たちが負けるとも思えない。

だけど…なんとなく何かが起るような気がした。
それも孫臭に悪いことだが…。

それに水蓮の様子もどこか変な様に感じた。

そんなことを俺がしばらく考え込んでいた。

「何を深刻そうな顔をしているのよ？」

水蓮が俺の方を見ながらそう言つてきた。
どうやら結構な時間、考えてたみたいだ。

「ん？　いや、ちょっと、ね」

「…もしかして心配してるの？」

「心配はいつもしているよ。水蓮はいつも無茶するから…」

といふか無茶しかしないし…。

未だに最前線で戦いたがるのは総大将としてどうなのよ。
いつも冥琳が頭を抱えているぞ…？

「あははは。いつも心配をおかけします、」

「…お前、改める気ないだ？…」

俺はじとー、とした田で水蓮を見るが効果はもうひんむしだ。
それを見て、はあーとため息をつくと杯を空にする。

俺の方を見て笑っているのはいつも水蓮だった。
さつきのは俺の気のせいだったのか……？

「蓮。ため息をつくと幸せが逃げるわよ？」

「へーへー」

俺に酒を注ぎながらせつ言つてくる水蓮。
俺はそれに適当に答えるながら杯に口をつける。

気のせいならその方がいい。

戦前に不安になるのはいいことじゃないしな。

「それに、もし危なくなったら蓮が護ってくれるんでしょう？」

ちゅっとおどけた感じで水蓮がそう聞いてくる。
いつもなら猫の俺に無茶を言つなって言つんだらひつ。

だけば、気がつくと俺はいつもとは違つことを口にしていた。

何が出来るかはわからない…。

けど、この飼い主様を絶対に護つてやる。

そんな誓いと共に…。

「…ああ。」の命にかけても護つてみせるよ

「つー…ふふふ。期待してるわよ」

水蓮は少し驚いた表情をした後。
笑いながらそう言って杯を傾けた。

「大丈夫…。きっと大丈夫…」

その後、小声で何か呟いていたみたいだが俺には聞き取れなかつた。

「ん? 水蓮、何か言つたか?」

「なんでもないわよ。ほら蓮。私の杯が空になつたんだけど?」

「おつと、それは失礼しました。お嬢さま」

俺は恭しく頭を下げる。酌をしてやるのだつた。

出陣の朝。

俺は部屋に置いてある箱の前に立つていた。
その中には深紅のスカーフと蓮と刻まれている鈴付きの首輪が入っている。

昔から戦の時に俺が身につけているものである。

それを見ると必ずと身体に気合いが入っていくのがわかる。

未だに嫌な予感は消えていない。

こんなに不安な気持ちで戦場に出るのはもしかしたら初めてかもしれない…。

「蓮、少し動かないでね」

小蓮に首輪をつけて貰う。

りん、と綺麗な音を立てる鈴。

昔にお守りがわりといつて子供たちに貰つたものである。
戦場でいつでも俺を守ってくれる大事な宝物だ。

次は右手に深紅スカーフを巻いてもらひ。

スカーフの赤は孫吳の赤。

今までの孫吳の礎となつた者達の血の色。
孫吳のために戦つた英靈たちの色だ。

「よし、完成……うん、蓮。これでバツチリだよー。」

「二七一」

褒めてくれた小蓮にお礼を返す。

そして今回の戦はお留守番の小蓮に外まで見送つてもいい。

広場に行くと、もうみんな集まっていた。

兵達も己が武器を持ち、整列している。

その表情はみな凜々しく、逞しい。

まさに孫興の精銳たちと呼ぶにふさわしい者達だと思つ。

俺は歩いて水蓮の下に向かい、定位置である水蓮の馬に飛び乗つた。

「ふふふ。蓮、似合ひてるわよ」

乗つてすぐに水蓮にそう言われた。

決して嫌な気はしないが、特別にうれしいとは感じなかつた。

出陣の時にいつも言われてるし…。

水蓮は俺の頭を一撫でした後。

顔を引き締まつたものに変える。

雰囲気も王のものに切り替えたようだ。

「よし、出陣よー。」

水蓮がそう言つと兵たちが雄叫びをあげる。
それは真っ青な空へと大きく響いていった。

俺は右手に巻かれた深紅のスカーフを見つめる。

またここにみんなで帰つて来よう。
そして、みんなで笑おう。

だから…英靈たち…。
俺に力を貸してくれ。

こつして俺たちは戦場へと足を進めるのだった。

第十二話。予感（後書き）

第十二話。終了です！

いかがだったでしょうか？

次回の繋ぎみたいなお話をした。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。
あと感想などもお待ちしています！
では。

第十四話。風と共に去りぬ

劉表との戦が始まった。

敵の兵数はほぼ同じ。

しかし、こちらは孫吳の誇る精銳たちと優秀な将たち。戦は終始、こちらが優勢に進めていた。

「呆気ないわね……」

雪蓮が引いていく劉表軍を見てそつ然ぐ。

その顔には不完全燃焼だとでも書いてあるようだ。

「雪蓮……戦はまだ決したわけではない。『氣を抜くな』

「冥琳）。でも、つまんない）

「確かに呆気ないのや〜」

「祭殿まで…。はあ〜」

冥琳が雪蓮を宥めているがほとんど効果はなく、さうに祭も便乗してくる。

冥琳は頭を押され、深いため息をついた。

「いや〜」

俺は慰めの意味も込めて冥琳の足に頭を擦りつける。

「蓮…。お前だけが私の味方だ…」

そう言つと冥琳は俺を抱きかかえ、撫でて来る。その姿は仕事に疲れた一人暮らしの〇〇のようにも見えた。

「なによー。蓮は冥琳の味方をするのー」

「姉様…」

そう言つて頬を膨らませる雪蓮。それを見て蓮華もため息をつく。

するとその横に冥琳が近づき、口を開いた。

「蓮華様…蓮を撫でますか?」

「ええ、 そうさせて貰うわ…」

そして二人して俺を愛でてくれる。

今、戦の最中だよ? とは言わないでおこう。何というか、真面目組のみなさん。いつもお疲れ様です…。

そんなやり取りをしている中。

いつもなら、率先して話しに入つて来る水蓮が妙に大人しい。

俺がそれを不思議に思つてゐると……。

戦場に動きがあつた。

劉表軍が撤退をはじめたみたいだ。

「堅殿！ 敵が撤退を始めましたぞ！」

祭がその動きを見て、すぐに水蓮に声をかける。

水蓮はその声に頷くと……。

「よし！ 追撃に移るわ！ 祭、私に付いてきなさい！」

「応！」

「母様！ 私は……？」

「……雪蓮は留守番よ。あんまりわがまま言わないの」

「そんなんあ～」

打ちひしがれた顔をしている雪蓮を尻目に、水蓮は祭を引き連れて追撃に出ていく。

どんどん小さくなつていいく水蓮の姿を見ていると、俺の頭のどこかが警鐘を鳴らした。

マズイ……。

何がマズイのかはわからないけど……。

とにかくマズイ！！

「ん？ 蓮？」

「蓮？ どうかしたの？」

雪蓮と蓮華が俺に声をかけてくるが、俺はそれに何も返さない。

行かなくちゃ！

ただ漠然とそう思った。

「蓮！？ ビニに行くのーーー？」

「蓮！ 待ちなさい！」

後ろで雪蓮たちが何か言っているが……それを聞き流して俺は走り出した。

水蓮の下に……早く……！

劉表との戦は私たちが優勢だった。

戦の前に感じた嫌な予感も今は感じない。

最近、重く感じていた私の身体も今はなんともないみたいだ。

私がそんなことを考えていると、劉表軍が撤退を始めた。

今が好機ね…。

早くこんな戦いを終わらせて、いつちを心配そうに見ている蓮を安心させてあげましようか。

「よし！ 追撃に移るわー 祭、付いてきなさいー！」

私はそつと、祭を連れて追撃に移るのだった。

山間部へ逃げていく劉表軍の逃げ遅れた兵達を討ちながら、尚も追撃していく。

横を見てみると激流の流れる谷があるみたいだった。

足場が悪く、体力の消耗や士気の低下を及ぼすような場所ではあるが、孫吳の兵達はなんなく進んで行く。

そして、もう直ぐ敵軍の殿に食いつくと言つ所で…。突然、森の中から敵兵たちが飛び出してきた。旗には、黄と書かれている。

「くつ、伏兵ね！」

「そのよしじやな…」

私と祭は追撃を止め、その場に急停止した。
逃げていた敵兵たちも引き返して来て、兵の数はあちらの方が多くなっている。

びつやらまんまと嵌められてしまつたみたいだ。
けど、そつ簡単にはやられないわよー

私と祭は手勢を率いて迎撃に移つた。

「こいつの一ー」

私は向かつてくる敵兵を南海霸王で叩き斬る。
戦況はあんまりいいとはいえない。

数を頼りに攻めてくる敵に、私たちはどんどん押されていった。
祭も矢を使い切り、今は剣を振るつている。

このままじゃあ、マズイ……。
なんとかしなくちゃ……。

私がそう思った時。

「堅毅ー！」

祭の切羽詰まつた声が聞こえてきた。
その声で私が後ろを向くと……。

一本の矢が私に向かつて飛んできた。
それをなんとか南海霸王で防いだが、体勢が完全に崩れてしまう。
そして、その隙をついて兵士が斬りかかって来た。

「孫堅つー！ 覚悟ーーーーー！」

兵士の振りかぶった剣の動きがすゞぐゅうぐりに見える。
ダメ、これはかわせそうにない。

そして悟った。

ああ……私はここで死ぬんだなって。

今までの人生を思い返してみる。

私は全力でここまで駆け抜けてきた。

前を向いてまっすぐ進んできた。

雪蓮なら立派に私の後を継いでくれる。
それを支えてくれるみんなもいる。

だから……何も後悔することはない。

ああ、でも蓮の無敗神話崩しちゃったな……。
それが少しだけ残念かな。

それともう一緒にお酒を飲めないことも……。

蓮……。
蓮……。

もう会えないみたい……。

雪蓮達のことをお願いね……。

そう最後に祈つて私は目を閉じた。
死を受け入れるために……。

どん、と押された衝撃と綺麗な鈴の音が聞こえた。
それと同時に剣が何かを切り裂く音も聞こえた。

私の身体には何も痛みが来ない。

不思議に思った私が田を開けると、田の前には……。

蓮がいた。

本陣で雪蓮たちと一緒にいるはずの蓮が田の前にいた。

ただいつもと違うのは……。

その真っ白な毛が真っ赤に染まつていて……。
いつもの元気な姿じゃなくて、地面に倒れていことだ。

「れ、蓮？」

私が声をかけても、蓮は何も答えない。
それどころかピクリとも動かない。

嘘よね……？

冗談、だよね……？

私は蓮に手をおせるおせる伸びやうとする。
しかし、それより前に……。

「ちつ！ 猫のくせに邪魔しやがつて！」

田の前の兵士が倒れている蓮を蹴り飛ばした。
蓮は「ロロロと地面を転がると、そのままゆづくつと谷に落ちてい
く。

「蓮つ！」

間に合つて！

そう思い、私は手を精一杯伸ばして蓮を捕まえようとする。
しかし、その手は僅かに届かず空を掴んだ。

蓮はそのまま谷底に落下していく。

そして……谷底の激流の中に姿を消してしまった。

「いやああああああ————————つ——————！」

辺りに私の絶叫が響き渡る。

私の横では蓮の巻いていた深紅のスカーフがひらひらと揺れていた。

第十四話。風と共に去りぬ（後書き）

第十四話。終了です！

いかがだったでしょうか？

誤字脱字がありましたら「報告をお願いします。
あと感想などもお待ちしています！
では。

第十五話。だけれど、きみがいない。（前書き）

今回、視点の変更が多いです。
ご了承ください。

第十五話。だけど…おみがいない。

（SIDE雪蓮）

突然駆けだした蓮の後を、私は軍勢を率いて追いかけている。

あんな蓮の姿は初めて見た。

きっと何かがあつたんだと私の勘もそう言つてる。

あの時の蓮はすごく焦っていた。

それこそ私たちの声が届かないくらいに……。

もしかしたら蓮と母様にしかわからない、何があるのかもしねない。

…やうだとしたら、少しだけ悔しい、かな。

私がそんなことを考えていると、戦っている両軍が見えた。
しかも、こちら側が押されている。

母様達が危ない！

そう思つた私が救援のために突撃の指示を出した、まさにその時。

「いやあああああ―――――っ―――！」

天にまで響くような母様の絶叫が聞こえた。

いつもの母様らじくない叫び。

何かがあつたんだ！
急がなくちゃ！！

私が急いで母様の下に向かつと、何か赤いものを握り締め、剣を振るつてゐる母様がいた。
その表情はどこか鬼気迫るものがあり、本物の虎のように敵を殺していた。

「母様っ！」

「……雪蓮。これを持つていてくれないかしら……」

私は母様に声をかけると母様はこちらを向いた。
そして、母様があるものを渡して来る。

「えつー!? これって…」

母様がさつきまで握り締めていたものの赤色のそれに私は見覚えがあった。

さつきまで蓮が身に着けていた、深紅の布。

なんでこれを…?
少しの間考えた後、私は気がつく。

いない…。

周りを見渡してみる。

いない…。

蓮が、いない…。

「蓮の大事なものをあいつらの血なんかで汚したくないの…」

母様がいつもより低い声でさつり言つた。

良く見てみると、目も赤い。

考えたくない予感が私の頭を過ぎる。

「か、母様…。蓮は……」

「…………」

母様は私の問いに何も答えず、敵兵に向かつて行つた。
でも一瞬だけ、辛そうな顔をしたのを私は見逃さなかつた。

蓮は死んだの…。

そう言われた気がした。

泣きたい…。

悲しみたい。.

泣き叫びたい……。

でも、それより先にやることがある。

「許さない……！」

お前たち…！

全員殺してやるつ！！

SIDE 祭

策殿が連れてきた軍勢を加えた儂らは怒涛の反撃に移つた。特に堅殿と策殿の勢いが凄まじい。

物に黒風の箭風の勢いが満ちてゐる。今も一匹の虎が劉表軍を蹴散らしてゐる。

…それは当然じやろ。

あの蓮が死んだのだから…。

あれだけ可愛がっていたのじや…。

大事な家族だつたのじや。

怒らないわけがない…。

蓮はただの猫ではない。

勿論、見た目などはどうからかう見ても猫じやが…。

我ら孫県の者からすればそれだけではない。

県の民は皆、子供の頃から蓮と遊び、可愛がる。
そしてそれは大人になつてからも変わることはない。
じやからあんなにも多くの者達に好かれている。

孫家の守り神。

そう言われているほど、蓮は孫県の象徴にもなつてゐるのじや。

それが殺されたのじや。

何も怒つておるのは堅殿や策殿だけではない。

兵達、皆が怒つておる。

その貌をみればよくわかるわい。

この士気の異常な高さ。
この怒涛のような攻め。

劉表軍はやつてはいけないとをしてしまったんじゃ……。
おまえら
覚悟するんじやな……。

ああなつたあ奴らは簡単には止まりんが。

かくいづ儂も相当怒つておつてのつ……。

蓮の仇……。
今こじで討たせてもうおつかつ——！

～SIDE水蓮～

斬る。斬る。斬る。
向かつてくるものは全部斬る。
逃げるものも全部斬るつー！

生かしてくれたのは嬉しいわよ！

だけど…。

こんな結果は望んでいなかつた…。

蓮がそう言つてくれただけで、嬉しかつた。
安心できた。
きっと大丈夫だつて思えた。

「この命にかけても護つてみせるよ」

嬉しかつた。

私が劉表を攻めるつて言った時。
少し嫌な予感がしていたあの時に。

私を庇つて死んだ…。

死んだ…。
蓮が死んだ…。

底づてくれたのも嬉しいわよー

でも……。

だけどね……。

蓮……。

あなたがどこにもいられないじゃない……。

それじゃあ、ダメなの……。

そんなことそれでも……嬉しいもなんともないのよつーーー

私は思いのすべてを込めて剣を振るひ。

振るひ剣は南海魔王。

孫家に伝わる宝剣。

こんな私怨で振るひついものじゃないのはわかってる。

だけど、今は振るわせて……。

そうしないと、あのバカな猫おとといに対する怒りとそれ以上の自分に対する怒りでどうにかなってしまいそうだから……。

私は剣を振るひた。

怒りとか悲しみとか全部込めて……。

何人、斬ったのだろうか…。

気がつけば辺りには数多くの屍が落ちていた。

劉表軍が撤退していく。

一時はあんなに攻めてきていたが、すべて蹴散らした。

伏兵の将だった黄祖も討つた。

雪蓮が追撃に行こうとしたので私はそれを止めた。

こちらの兵達も少なくない損害を受けている。

兵士達も行きたそうな表情をしてはいたが、追撃はさせない。

「母様、なんですよ！ まだ敵が残ってるわ！」

「雪蓮、落ち付きなさい」

興奮している雪蓮を落ち着かせようと宥める。その時、少し胸に違和感を感じた。

「なんだよー！ 蓮が殺されたのに！ なんでそんな風にしていら

れるの…？」

「兵達も疲れているわ…。また伏兵もいるかもしない。だから…」

…

「だから…。だから蓮の仇は取らないでいいっていうの…？ 蓮が死んだのは母様のせいなのに…！」

雪蓮の言葉が私の胸に大きく刺さった。
わかってる…。

私のせいだつていうのはわかってるわよ…。

私の胸がズキズキと痛み出す。

「そ、策殿！」

「兵達に聞いたわ。母様を庇つて、蓮が斬られたって…！ そして谷に落とされたって…！」

「……」

祭が雪蓮を止めようとするが、雪蓮は止まらない。

私は何も言えなかつた。

だつて全部、事実だもの…。

胸の痛みはどんどん大きくなつていぐ。

「それなのに…庇つて貰つたくせに…！ なんで仇も取らないのよ

「…

泣き叫びながら雪蓮がそう言つた。

私は静かに口を開く。

「雪蓮…。私は…。」

言葉の途中で私の胸に激痛が走った。

その今までにないくらいの痛みに私はその場に倒れてしまつ。

「ひー 堅殿ひー」

「母様…？」

慌てたよつの祭の声と、呆然としたよつの雪蓮の声が聞こえる。
だけど私は、自分の意識がどんどん遠くなつて行くのを感じた。

「堅殿…。しつかりするんじゅー…。」

「母様！ ねえしつかりして…。母様…。」

祭と雪蓮の叫んでいる。

それをどこか遠くに感じながら思ひ。

「めん…。

返事できなこや…。

そして私は完全に意識を失つたのだった。

～とある河原～

「ん？ あれは…」

少女は河原であるものが目に付いた。

良く見ると一匹の猫が倒れている。

その身体には刃物でつけられた傷があり、全身はびしょ濡れだった。

「まだ、生きているわね」

まだかすかだが、その猫は呼吸をしていた。

それは弱々しいものだったが、どこか強い意志を感じた。

「そう…。貴方はまだ生きたいのね」

少女がそう言つと、その猫はぴくりと少しだけ動いた。

少女はそれを見てくすりと笑うと、その猫を抱きかかる。

「いいでしょ。助けてあげるわ…。」の図 孟徳が

第十五話。だけれどもみがいない。（後書き）

第十五話。終了です！

いかがだったでしょうか？

あれ？ 作者は吳が嫌いなの…？ って思つた方。
ごめんなさい…。あさきゆめみし（ 曲名書いていいのかな）を聞
いていたらこんなことにつ！

あつ！ でも吳は大好きですよ！

まあ、別にどの国が嫌いとかはないんですけどね！

誤字脱字がありましたら」報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！
ではでは。

第十六話。あの〜。I'm not a manのじゃうへ。（前編）

お気に入り登録が1000件を超えてしまいました！
正直、すこく嬉しいです！

これからもみなさんが、楽しんでもらえるような作品にしていく
よつに頑張りますので応援して貰えると嬉しいです！

第十六話。あの〜。『JJK』なのでしょうか〜。

水蓮に敵兵の剣が振り下ろされる。

しかし、水蓮は動かない。

それだけじゃなく、水蓮はどこか諦めたような…悟ったような顔をした。

ムカついた。

すっげえムカついた。

俺が護つてやるつていつたのに…。

あんな顔をした水蓮にどうしようもなく腹が立つた。

そして気が付いたら飛び出していた。

まあ、斬られた時はヤバいかなって思つたけど…。

俺にはまだしないといけないことがある。
いや、できた…。

俺はあのバカに一言いってやらないといけない。

簡単に諦めんな！　つて……。

だから……。

俺はまだ死ねない……。

死ぬわけにはいかないんだつ……！

「う、こやう？」

最初に感じたのは眩しき日の田の光だった。

俺は気がつくと寝台の上にいた。

一瞬、建業に帰つて来たのかと思つたけど、なんとなく寝台の感触が違つ。

部屋を見渡しても、俺が知つているものとはやつぱり違つた。

「こまどりだ……？」

そんなことを考へるが、じつとしていても何もわからぬ。なので、とりあえず起き上がりうと身体に力を入れることにした。

すると…。

「に、やあー！」

全身に猛烈な痛みが走った。特に脇腹が痛すぎる。
やばつ、すぐ冷や汗が出て来たんですけど…。

ここはゆっくりと呼吸を整えるんだ!
なるだけ動かないことが一番大事。

少しでも動いたらまた泣きを見る事になってしまつ。

確認事項を頭に入れて俺が呼吸を整えようとしたまさにその時。

「おっ！ 田が覚めたのか！？」

どん、と音を立てて扉を開けるとともに女性が大声を出して入つて
きた。
俺はそれにビッククリして身体を動かしてしまい、身体にまた激痛が
走る。

「ん？ 何を悶えているんだ？」

いやいや、あなたのせいだからね…。

すくなく突っ込みたいけど、痛くてそれどころではない俺だった…。

痛みがなんとか引いた後。

俺は女性と対面した。

女性は黒髪で赤いチャイナ服を着ている。

「しかし、お前は運がいいな。もし華琳様が助けてくれなかつたら確実に死んでいたぞ？」

「いや～？」

いや華琳つて誰？

つていうか貴方も誰なんですか？

俺は疑問を投げかけてみる。

「ん？ そうだぞ。華琳様は素晴らしい方なのだっ！」

ありや、ダメだ。通じないや…。
むう。呉のみんなだつたら会話できるのに…。
しかし、これが普通の反応なんだつ。
そう思うと呉の人達つて……いや、何も考えまい。

「…それでだな…。その時の華琳様が…」

まあとりあえず、この人がその華琳様つて人のことが大好きなのはよくわかつたかな。

俺は適当な所で相槌を打ちつつ、話を聞くのだった。

「……とこりわけで華琳様は本当に素晴らしいのだ… 良くわかつたか？」

「いやー」

かなり長いお話がやつと終わつたよしなので、頷きながら返事をしておく。

田の前の女性はそれを見て、うれしそうに頷いた。

「うんうん。お前、中々話のわかる猫だな…」

つ、疲れた。

ケガ猫にこれはちと辛いぜ…。

でも、この人は何をしにここに来たんだらう。

時間とか大丈夫なのかな…？

俺がそんな風に思つていろと…。

「あっ！ しまつたー！！ 華琳様に田を覚ましていたら呼ぶよう

に言わっていたんだつたつ！」

女性は大声でそう言つと、頭を抱え出した。

どうやら、噂の華琳様とやらに用事を頼まれていたみたいだ。

「マズイ。す、マズイ…。」そのままでは華琳様に叱られてしまつ

…

今度は落ち込み出した女性。

すごく忙しい人だなーと思いつながらも、俺のせいで怒られるのはなんか申し訳がないなとも思った。

仕方ない…。

少し我慢しよう…。

俺は寝台から起き上ると、女性の足に頭を擦りつけた。

身体に走っている激痛は我慢します。

でも涙がでちゃう…。だって、ねこなんだもん。

「…慰めてくれるのか？」

「へーちゃん」

女性がそう言つてきたので俺は返事を返す。

元気出せよって意味も込めて…。

「そりゃ…。うん、お前は中々…いや、かなりいい猫だな

そつ言つて今度は何やら考え始める女性。
本当に忙しい人だな…。

「よし、決めた！ お前にいいものをあげよう！」

やつ言いつと女性は胸を張った。

いいもの……。

できればお魚がいいな……。

いや、俺はお魚を所望しますぞっ……！

「んー。やつ言えよ、お前の名前は何と言つのだ？」

女性が突然名前を聞いてきたので、俺は首を伸ばし、首輪についている鈴を見せる。

しかし、なぜにこのタイミングで？

「んー。蓮、とこつのか？」

「こやんー。」

そうだと言わんばかりに俺は元気よく答える。
そのせいでもた痛みが走ったのは、いゝ處敬だ……。

「やつかそうか。ならば蓮ー、お前に私の真名を預けるー！」

ああ、真名ね……。

つて、ええー！？ 何、この急展開……。

「あー！ 真名とこつのはな……。すぐ大事なものなんだぞ？ お

前がいいやつだと思ったから預けるんだからな？」

俺の驚きを余所に女性は真名の説明をしてくれた。
それはわかってるけど……。

「まあ、とにかく私の真名は春蘭だ。よろしくな、蓮ー。」

そう言つと女性…春蘭は俺の頭を撫で始めた。
まあ、預けてくれるのなら受けでおいつかな。
気を許してくれてることだし…。

「ここもあー…」

俺がそう考えて返事を返すと、春蘭は嬉しそうに笑い、そして俺を
ガツチリ掴んだ。

「よし、蓮。なりば早速、華琳様の所に行つて一緒に怒りやれよついで
はないか！」

「ここも？」

あれ？ 雲行きがなんか怪しくなつきましたよ。
嫌な予感もひしひしと感じますよ…。

「うーん、話はこうだな。私が部屋に行くと、皿を覚ましたお前が
逃げ出してしまつた。それを私が追いかけて捕まえていたら遅くな
つたと。つむ、完璧だ」

いやいや、穴だらけだよー…?

まず、前提条件として俺は今、走つたりできないし…。
とこつかその理由だと俺が患者に…。

はっ！ まさかそれが狙い…。

春蘭……！ なんて恐ろしい子！！

といふか、真名もこのために教えたのかつ！

驚愕する俺を余所に春蘭は意気揚々と部屋を出る。
俺を逃がさないよう離さない今まで…。

はあ～。もうどうでもなれ…。

そんな投げやりな気持ちの俺はこの後に出来つ。

一人の女の子に…。

霸王と呼ばれる女の子に…。

第十六話。あの〜。 いりせんのやつや〜。 (後書き)

第十六話。 終了です！

いかがだつたでしょうか？

まだ華琳様は出ませんでした。

春蘭のキャラがおかしくないか、少し心配だつたり…。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！

では〜。

第十七話。お猫様と霸王様。

目の前に女の子がいる。

金色の髪で、宝石みたいに綺麗な青い目をした女の子。

彼女が纏っているのは凡人とは一線を介した雰囲気。

彼女に初めて会った人はその王たる霸氣によつて氣押されるだらう。

そして、ある者は心酔し、ある者は恐怖する。

そんな空氣を彼女は出していた。

たぶん、彼女に会った人は初めに思うだらう。
この人は人の上に立つべき人間だ、と…。

だけど、俺は少しだけ違つた。

王たる器の持ち主だとかそんなのは関係なく…。

彼女にはただの女の子に戻つていられる時間はあるのかな…?
その身に纏つた鎧を…その仮面を…脱げる場所はあるのかな…?

そんなことを思い、彼女のことが少しだけ心配になつた。

「春蘭……。ずいぶん遅かったわね……」

華琳という人が口を開く。

その声には不機嫌さが少し滲み出でていた。

「は、はい。私が部屋に行くときなり蓮が逃げ出しまして……」

少し慌てて春蘭が言い訳を始める。

あんまり動搖すると嘘だつてばれるよ……と俺が思ったのはここだけの秘密だ。

「蓮……？」

「この猫の名前です。この首輪の鈴にも彫ってありましたー。」

そう言つと春蘭は俺を前に突き出した。
前に出された俺は宙ぶらりん状態である。
なんかすゞしく間抜けっぽい。

「ふ~ん、なるほどね。といひで春蘭……。嘘をつくないうち、もつ少し上手くつかなさい」

「べ、別に私は嘘にやが……」

うわ~。

余裕でばれてるよ~!!

しかも春蘭、嘔んでゐる……。

「じまけでもダメよ。だいたい、今も自分で歩けないその子が逃げられるわけがないじゃない」

それは！」もつとも。

俺、今も春蘭に抱えられてる状態だしね……。

「うう、それは……」

「やつ、春蘭は私に嘘をつくな……。悲しいわ」

そう言つと華琳さんは悲しそうな顔を作つた。
だけど、手で隠した口が少し笑つている。
さすがにこれは嘘だつて春蘭も……。

「つ！ 華琳様！ 申し訳あつません！ 蓮と話をしていたら遅くなつてしましました！」

氣付かなかつた——！！？

春蘭……なんて素直な子つ——！

「猫と話を……？」

そう駄くと華琳さんは少し怪訝そうな顔を俺の方に向ける。
ちょうど俺もそつちを向いていたので、ぱつちり田と田が合つた。

「……」

また春蘭が嘘をついたと思われるのは可哀想なので…。

俺は大きく頷きながら返事をした。

「へえ、人の言葉が分かるみたいね。始めて、蓮。私は曹 孟
徳よ」

少し笑みを浮かべながら、俺に自己紹介をしてくれる華琳…いや孟
徳さん。

やつぱり勝手に真名で呼ぶのは無しだよね！

「こやん！」

「ふふふ。本当に賢いみたいね…。それこ…」

「どうもです、孟徳さん！」

というわけで元気よく挨拶をしてみる。

それを見た孟徳さんは笑みを深くすると、俺を抱きかかえ、顔を近
づけてきた。

「いい瞳^めをしているわ。とても強い意志のある瞳……」

そして俺の瞳をしっかりと見つめてそう言つてきた。

強い意志、ね。

意志…何かを成し遂げようとする心。

それにしていい瞳をしているなんて、に直接言われたのは初めて

だ。

「貴方はとても氣高く、美しい」

それはたぶん彼女の最大級の賛辞であろう。とても猫に言つような言葉ではない様にも思つたけど……。

それにそれを言つたなら、俺は孟徳さんの方がすげえ氣高くて綺麗だと思つよ……。

「ありがと。やつても貰えると嬉しいわ」

そう言つと孟徳さんは嬉しそうに笑つた……。
ん、あれ？ もしかして考えが伝わってる？

「何故なのかしらね……。貴方の瞳を見ていれば、何を思つているか良くわかるわ」

おう……。まさか会話できるとは……。

春蘭とは出来なかつたのに……。

「春蘭……？ あら、真名で呼んでいるの？」

ああ、何でか預けてくれたんだよね。
理由はよくわかんないけど……。

「やうなの……。なるほどね……」

すると、孟徳さんは何せやら考へ始める。

どうかしたんだろうか？

「それじゃあ、私も預けるわ。私の真名は華琳よ」

えつー？

マジでーー！？

そんな簡単にいいのかな？

「いいのよ、私は貴方のことが気に入ったもの」

そつか…。ならよひじへつ！

あと遅くなつたけど、華琳。助けてくれてありがとう。

俺はぺこり、と頭を下げる。

「ええ、よひしべ。後、そのことは気にしなくていいわよ、ただの
氣紛れだもの」

氣紛れでも華琳が助けてくれなかつたら、俺は死んでいたと思つし
…。

だから、ありがとう。

いつかこの恩は必ず返すからっー

「そう。まあ期待しないで待っているわ

そう言つと華琳はふわりと笑い、俺の頭を撫でる

その時の笑顔はさつきまでのものとは違い、年相応のものだった。

「あの～、蓮？　華琳様？」

その後も少し俺と華琳で話をしてくると、おれのおれの春蘭が話しかけてきた。

そういうえば春蘭……影薄くなつてたね……。

あつ、別に忘れてたとかではないよ？　ホントだよー…？

「あら春蘭、まだ居たの？」

「か、華琳様～」

ひでえ……。

華琳つてどうなのかな……？

ほら、春蘭が泣きそうな顔をしてるよ～。

「ふふふ、冗談よ」

その楽しそうな顔。

やつぱりどうみたいだ……。

てかアホな子とどうつ子つて……。

まだ一人しか会つてないけど、ここの人とはみんなキャラが濃いな……。

一人のやり取りを見ながら、そんなことを思う俺なのであった。

～SIDE華琳～

私は今日の分の政務を黙々と片付けていた。

私がこの陳留を治めてまだ日が浅い。
まだやらなければならないことは山ほどあった。

次の書簡を手に取り、ふと考える。

あの猫は田を覚ましたのかしら…。

河原での子を拾つてからもう一週間。
あの子は未だ、田を覚まさない。

大きな刃物で斬られた傷どこかで打ちつけたのであるひつ全身の打撲。

正直、生きているのが不思議なほどの大怪我だった。

けどあの時、今にも死んでしまいそうな状態だったあの子は、それ

でも必死に生にしがみついていた。

生きたい…生きなきやいけない…。

私にはあの弱々しい呼吸がそう言つてこるよつに聞こえた。

無様な生より誇り高い死を…。

私は常にそういう思つて生きてゐる。

だけど…。

なぜだらけ…。

その時のある子の姿が、とても尊いものだと感じたのは…。
その今にも消えそうで消えない命の灯が、とても綺麗だと感じたのは…。

気が付くと、完全に手が止まっていた。
いけない…。

まだ片付けなければならぬ書簡が残つているんだった。

私は頭を切り替えて仕事に戻る。

それでもあの子のことが少しだけ…ほんの少しだけ気になつたので、少し様子を見に行って貰うこととした。

私も秋蘭も書類仕事で忙しい。

今、手が空いているのは春蘭だけだった。

それで春蘭に頼んだのだが…遅い。
すごく遅い…。

自分で見に行こうかしら…。

私が半ば本気でそう思つてると、扉が開き、春蘭が戻ってきた。
あの子を連れて…。

春蘭が連れて來たこの子の名前は蓮、といつらしい。
しかも、どうやら人の言葉を理解できるみたいだ…。

私が自己紹介してみると、よろしくとも言つよつと鳴く蓮。
不覚にも、少し可愛いと思つてしまつたのはここだけの秘密だ。

私は蓮の瞳を見てみる。

その真っ赤な瞳は、とても澄んでいて強い意志と光が宿っていた。
その瞳を見ていると、こちらが吸い込まれてしまいそうな感覚に陥

る。

美しい…。

純粹にそう感じた。

それと同時に蓮は普通の猫ではないとも思った。
まだ蓮には他になにか秘密がある、そんな気もした。

もしかして私が蓮を助けたのは…。

私が蓮と出会ったのは…天命なのかもしない。

私は自分が映っている蓮の深紅の瞳を見ながら、そう思うのだった。

第十七話。お猫様と霸王様。（後書き）

第十七話。終了です！

いかがだったでしょうか？

遂に華琳様登場でした。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。
あと感想などもお待ちしています！
では～。

第十八話。最近つて……そつなんだね。

華琳が春蘭を弄つて遊んでいるのを見ていると……。
がちゃりと扉の開く音がした。

「おや？ 何やら楽しそうですね

「あら、秋蘭。もつ仕事は片付いたの？」

入ってきたのは青い髪の落ち着いた雰囲気の女性だった。
口調からすると、華琳達とも親しいみたいだ。

「はい、今日の分はすべて。といひで……姉者がまた何かしたのです
か？」

女性：秋蘭さんは華琳の問いに答えると、そつ聞き返した。

「秋蘭！ 別に私は何もしてないぞ！」

秋蘭さんにそつと春蘭は少し、頬を膨らませる……。
姉者……
春蘭が姉者……
つて！？

「いやああーー！」

いかん、ビックリしちゃって思わず声を出しちゃった。

そのせいで三人の視線が俺に集まる。

うつ。

そんなに見ないでもらえると嬉しいな～。

「蓮、一体どうしたのだ？」

「いや、「やあ～」

頭にクエスチョンマークを浮かべる春蘭。
言えない…。

春蘭が姉だとは思えないなんて本人には言えない…。

俺は内心冷や汗を搔きながらも、可愛らしく鳴いて誤魔化そうとする。
よし、春蘭ならこれで誤魔化せ……。

「春蘭が姉と聞いて驚いたみたいよ？」

「いやー？」

「うおー！」

華琳をーん！？ 何て事をいつのぞーー？

「ふふふ…」

華琳に抗議の視線を向けるが、意地の悪い笑顔で返された…。
悪女や。

ここに悪女がおるつー！

「なにい～？　おい蓮つ！　お前は私が姉らしくないといつのがー！」

華琳がそんなことを言うから案の定、春蘭が絡んできましたよ…。大丈夫。秋蘭さんがお姉さんっぽいとか、少しも思ってないから落ち着いて、ね？

「秋蘭の方が姉っぽいらしいわよ」

「ちょっと、華琳をーん。

もう誰かあの子を止めて…！」

「れへん～？」

えっと、春蘭…？」

とりあえず、その物騒な剣を仕舞うことから始めよつか。ていうかそんなの食らったら俺、一発でアウトだから！？

前門の春蘭に後門の華琳。

俺はここで終わってしまうのか。

俺がそんな状況に軽く絶望していた時、救いの女神が現れる。

「まあ少しは落ち着け、姉者。その子も怖がっているぞ？」

「秋蘭。しかしだな…」

その女神は青い髪の女性…秋蘭さんだった。
宥めるような口調で見事にあの春蘭を押さえている。

おおっ！

まさに救いの女神っ！
それいけ、ぼくらの秋蘭さん！

「華琳様も…。あんまり姉者を煽らないでください」

「ふふふ、悪かったわ。つい、ね？」

華琳はそう言つけど、顔が笑つてゐる。

華琳さん？ 貴女、絶対に反省してないですよね…。
俺が華琳の方をじとー、と見ていると…。

「それはそつと、もう田が覚めたのだな」

「いやーん！」

秋蘭さんが俺にそう聞いてくるので、返事を返す。
そして、ついでに秋蘭さんに頭を擦りつけて愛想を振りました。

この三人の中ではこの人が唯一の良心だし…。
さつきのお礼も込めてみた。

「そりゃ、元気になつたのなら良かつた…。しかし、人懐っこい猫
だな…」

秋蘭さんはそう言つと俺を撫でてくれる。
その顔には少し笑みが浮かんでいた。

「どうもその子は、人の言葉がわかるみたいなの。だから秋蘭も自

「己紹介をしなさい。私と春蘭は真名も預けたわ

「はー、華琳様。私の名前は夏候 妙才だ。真名を秋蘭といつ、お前の名は?」

華琳がそう言ひつと、秋蘭さんは自己紹介をしてくれた。

俺も名も聞かれたので、春蘭の時と同じよひに首輪を見せる。

「蓮、か。よろしく、蓮」

「うーー！」

「はい、よろしくです！

ここで一番頼りになるのは貴女だと想つてますから…。

何かあつたら助けてね！

「それとさつきは姉者がすまなかつたな

」そう言ひつとすまなそうな顔をしてくる秋蘭。

俺は気にしてないよ、といった感じにゴロゴロと喉を鳴らしながら思つ。

本当にしつかりしてゐる妹さんや…。

それにしても秋蘭といい、蓮華といい、最近は妹の方がしつかりする傾向にあるのかな…。

なんというか姉のみなさん…もつと頑張つてー

「あら？ 蓮は秋蘭によく懷いてゐるみたいね

「？ そつなのですか？」

華琳の言葉に秋蘭が首を傾げる。
俺も別にそんなつもりはないんだけど…。

「ええ。私にはそんなに甘えて来なかつたわ…」

そつ言つと華琳はちよつとだけつまらなそうな顔をした。
んー？ どうかしたのかな？

「蓮…。華琳様はお前のことをすぐ心配されていたんだぞ？ 仕事中もよく気にされていたし…」

少しの間、華琳の顔を見た後。
秋蘭が俺にそんなことを言つてへる。

なぬっ！

華琳がそんなことを…。

俺は少し驚きながら華琳の方を振り向いた。

「後、お前が一週間も田を覚まさないから、たまに部屋を覗きに行つたりもさせていたな…」

華琳…。

お前…。

「なつ、秋蘭！ 余計なことは言わなくていいわ！」

秋蘭にいきなりカミングアウトされた華琳は、顔を赤くして文句を

言つてゐる。

どうやら、この子はからかうの好きだけど、からかわれるのには慣れていないようだ。

それにしても、そんなに心配してくれていたとは。
気紛れとか言ってたくせに……。

俺は少し生温かい目で華琳を見つめる。

「な、なによ？ 私はただ面倒は最後まで見ないと気が済まなかつただだけよー。」

「うん、なんていうか……。

その顔で言われてもなーって感じが……。

でも、感謝はしているよ。

華琳、本当にありがと。

「ふんー。」

俺がお礼を言つと、華琳は顔を横にふいと向ける。
その顔は未だ、赤いままだつた。

「あれは照れているだけだからな

小声で秋蘭がそう教えてくる。

俺はそれに頷いた。

さすがに俺もそれはわかつてますよ、姉さん。

「しゅうじゅん? 何か言つたかしら?」

「いえ、華琳様。特には…」

華琳の地獄耳にはそれが聞こえたみたいだが、秋蘭はなんともない
ように返す。
もしかしたらこの人がラスボスなのかもしれない。
俺が少しそう思い始めていると…。

「あの~、みんな?」

少し前から話に置いていかれていた春蘭が話しかけてきた。
俺達、三人は春蘭を一斉に見る。
そして…。

「ああ、姉者。まだ居たのか」

「春蘭、まだ居たの?」

「いや? (春蘭、居たんだ?)」

そう言つた。

「へ、うわあ~ん!」

三人からの一斉攻撃を浴びて、泣きながら外へと飛び出していく春
蘭。

ノリだったとはいえ、可哀想だったかな…。
俺が少しそう思つていると…。

「ふふふ。やつぱり姉者は可愛いな」

秋蘭が笑顔でそう言っていた。

おう…。

この人もやっぱ普通じゃないよ…。

拝啓、異のみんな…。

ここの人たちはみんなキャラが濃いみたいですね…。

俺、大丈夫かな…。

第十八話。最近つて……そなんだね。（後書き）

第十八話。終了です！

いかがだったでしょうか？

いかん、すげえ難産だつた…。

三人つてこんな感じだよね？ 大丈夫だよね？
違和感があつたらすみません…。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。
あと感想などもお待ちしています！

ではでは。

第十九話。それゆけ！ 僕らの春蘭号ー（前書き）

今回、少し長めです。
ご注意ください！

第十九話。それゆけ！僕らの春蘭号！

ども、只今、陳留にレンタル移籍中の蓮です！

そういえば、この登場の仕方もかなり久しぶりだつたり…。

さてさて、借りてきた猫という諺もありますが、現在の俺の状況はまさしくそれと言えるでしょう。

簡単にいうと、俺は今、すこく大人しくします…。

まあ、なわばりとか云々じゃなくて怪我が主な原因なんだけれどね…。

どうやら怪我は動いた時に走った痛みの通り、結構酷いみたいで…。半年くらいは安静にして置かないといけないらしい。

つまりそれは最低、半年は帰れないといつことで…。

はあ～。

ちょっとだけ、ため息が出た。

華琳は怪我が治るまで、ウチで面倒を見るといつてくれた。

さすがに申し訳なかつたので、一度は遠慮しようとしたんだけど…。

「中途半端なままで怪我人を放り出すような真似を私にさせる気なの？」

そう言わてしまつと、俺は何も言えないものである。

それに実際、このままでは戻るのは無理っぽい…といふか、そもそも帰る手段がない。

歩いて帰るのは…ちょっと、無理なような気もあるし…。なので結局、俺はしばらくここで御厄介になることになつたのだった。

はあ～。また借りが増えていくよ…。
本当にどうしよう…。

まあ、それは一回置いといて…。
今の俺はとても大きな悩みがあつた。

それは、暇なことである。

自由に動けないので予想以上に辛い。

しかも、たまに無理して外を歩いたりすると、何故か華琳に見つかって部屋に連れ戻される…。
もう。華琳には何かセンサー的なものが付いているに違いないと思うんだ。

しかし、何度も止められようが、俺のこの熱いバースは止められない。

「蓮、ここで何をやっているのだ？」

部屋から出た瞬間に止められた、だと！？
ただ、救いだつたのは華琳ではなく春蘭だつたことだ。

ここはなんとか誤魔化して、俺は外で散歩をするんでえい！

「こやこやー

俺は笑顔を浮かべて可憐らしく鳴いてみる。
スマイル、スマイル…。

「あまつうちゅうあると、また華琳様に叱られるだ？」

「こや、こやあ

うつ…。

ここでも見たことないわ、内密こ…。

俺は春蘭に懇願の眼差しを向けてみる。
しかし…。

「うーん。よくわからんが、私は今から警邏だ

つ、伝わってねえ…。

コンビニーションの壁は思つたよりも厚かつたようだ。

でも、これはいいことを聞いたぞ。

春蘭に着いていけば、街に出れるじゃないか！

「こや、こやん！」

「ん？ 蓮も着いて来たいのか？」

俺は春蘭にきらきらと何かを期待した目を向けた。すると、今度は正しく意味を理解してくれた春蘭。

これは、いけるっ！

しかし、華琳様がな…とか言っているけど、もうひと押しだ！

俺はきらきらした目をひるひるした目に変更する。

俗にいう、捨てられた子犬の眼差しビームだ。別名、君に届け、この想い！ 攻撃でもある。

「う…ええい、わかった。連れていくから私をそんな目で見るな！」

ふ、他愛のない。

またつまらぬものを攻撃してしまった…。

なんーてね。

やばい、街とか久々ですげえ嬉しい！

「しかし、お前は今あまり動けないだろ？ 一体、どうするんだ？」

ふふふ。春蘭、それは問題ないよ。

ちやんと考へてるか、ひ……。

「うつむけね……。うつあるのだつ！」

～SIDE秋蘭～

今日は午後から、姉者と警邏だ。

私は城門の前で姉者を待っていた。

しかし、時間になつても姉者はやつて来ない。
さすがに仕事をさぼるのはマズイ。

仕方ない、呼びに行くか……。

私がそんなことを思つていると、後ろから姉者の声がした。

「おーい！ 秋蘭～！」

「遅いぞ、あね、じや……」

私が姉者の声を聞いて振り返る。するとそこには…。

「あ、姉者？ 何故、蓮を頭の上に乗せて…」

蓮を頭の上にのよこん、と乗せた姉者の姿が…。

くつ、いかん。

これはなんて最終兵器リーサルウエポンだつ！

私は慌てて、視線を逸らす。

その時、少し鼻を押さえていたのは「愛敬だ。

「い、いや。これはだな、蓮の奴が勝手！」…」

「いや、いや！」

「おわっ！？」

姉者が言い訳をしようと私に詰め寄ると、頭の上の蓮が落ちそつとなつた。

それで蓮も姉者もあたふたとし出す。

くつ、なんだこの破壊力は…。

私を悶え殺す気なのか…。

私は少し、強めに鼻を押さえる。

そこから少しだけ赤いものが見えていたのも「愛敬だ。

「…」

「…」

私は少しの不安を抱えながら、まだ慌てている姉者達を見る。

私は早々とそう悟ったのだった。

「うむ、無理だな…。」

警邏をしていると姉者がいきなりため息を吐いた。

「はあ～」

「姉者、大丈夫か？」

私は姉者にそう尋ねる。

ここまで警邏で、凝視しなければなんとか大丈夫な状態までの耐性を作ることができた。

まあ、いくらかの鉄分は失ってしまったが…。

「まあ、蓮は小柄だから重くはないのだが…」

「…」

そう言つと、姉者は困った顔をする。

そんな姉者も可愛いなと思いながら、私は周囲に視線を向けた。

「すうじく見られてるな…」

「むう。まつたく私は見世物ではないところの…」

今度は、少し不満そうな顔になる姉者。

ここまでの警邏の最中、民達の視線は蓮と姉者に集中していた。まあ、どれも微笑ましいものを見るようなもので、悪いものではなかつたから問題はないが、姉者は少し堪えたらしく。

それでも蓮を下さないのは、蓮が嬉しそうにしているからだ。

今も楽しそうに辺りをキョロキョロして見ている。

そんな蓮を見ていると、蓮がある所に視線を集中させた。そちらの方を見てみると、一人の少女が籠を売っている。

「おっ、姐さんら。どや、竹籠一つ買ってくれへんか？　四の皆が丹精込めて作ったからそいらの竹籠よりも丈夫やで」

少女はそう言ひと、並べている商品を見せてくる。

うむ。これは中々の代物だ…。

「いやー…」

私は竹籠を見てそう思つたが、蓮はどうやらその横にある木箱の方に興味があるみたいだ。

木箱の方を凝視しているその田もどりが輝いている。

「おひ、そのにゃんこは中々お田が高いで！ これは、ウチが開発した全自动籠編み機なんや！」

「全自动…」

「…籠編み機？」

「せや。まずはこの籠の材料となる細う切つた竹をこの絡繆の底に入れるんや」

鸚鵡返しに聞き返す私と姉者の前で、少女は竹の薄板を木箱の底に一周するように入れていぐ。

「ああ、姐さん。」の取つ手をぐるぐる回してくれへんか？」

「ああ…」

少女が影になつて見えなかつた取つ手を姉者の方に向ける。
姉者も言われるがまま取つ手を持ち、ぐるぐると回してみた。
すると薄板が木箱の中に吸い込まれていき、木箱の上から編み込まれた竹籠の側面が姿を見せる。

「おおひー。」

「どうやー。」それで竹籠の周りが簡単に編めむつひつ寸法なんやー。」

「よくわからんが、これはおもしろいぞー。」

少女が自信満々に胸を張つて誇る。

次々と編まれていく竹籠に興が乗つて来たのか、姉者は楽しそうにさらにぐるぐると回している。

そんな姉者の微笑ましい姿と、姉者の動きのせいで落ちそうになり、必死にしがみ付いている蓮の姿を見て、私は思わず笑みが零れてしまつた。

たまにはこんな警邏も悪くはないな。
といづか、かなりいい…。

毎回これでも…。
いや、しかし…。

私がそんなことを考えていると、突然、脳裏に自分の主の顔が浮かんだ。

そして、その主が言つていた言葉も…。

「秋蘭。もし蓮が外に出ているのを見たら、すぐに部屋に戻しなさい。まったく、あの子は…まだ怪我も治つていないので…」

その後も何やら華琳様は言つていたが、今はそれは置いておいた。

これはマズイ。
非常にマズイ。

なにやら横で爆発が起こつて、姉者達が笑つているが……それも今は置いておいた。

今すぐ、城に戻らなければ華琳様が…。
あのどこか異常なまでに蓮を溺愛している華琳様が…。

鬼になつてしまつ…。

「秋蘭、見ろ。蓮が…」

「姉者、すぐに城に戻るぞ…」

「えつ！？ あ、ああ…」

姉者が何か言いかけたが、私はそれを遮つた。
そして少女にお金を払い、籠を一つ買つと、姉者を連れて城に急い
だ。

今はただ急ぐんだ。

鬼が…。

鬼が現れる前に…。

しかし、私の儂い願いはどうやら神には届かなかつたらしい。
急いで戻った城門の前には、我らの敬愛なる主が笑顔で腕を組んで

立っていた。

「華琳様…」

「二人とも御苦労さま」

「はい！ 華琳様、只今戻りました！」

姉者が華琳様にそう答える。

姉者…。華琳様の顔をもつとよく見てくれ…。
ほら、目が笑っていないぞ。

「さて、なんで蓮まで連れて行つ……ふつ…」

華琳様がそう言いながら姉者の方を向く。
しかし、突然その言葉を止めて、顔を横に向けてしまった。
そして、何かを必死に耐えている。

私は不思議に思い、姉者の方を見てみる。
そしてその瞬間、噴き出した。

蓮の…。

蓮の頭にすっぽりと未完成の竹籠が挟まっている…。
これでは猫というより…。

「何？ 蓮は何時の間にか猫から獅子にでも転職していたの？」

華琳様がそう笑いながら言った。

蓮はそれを見て、少し不服そうな顔をした後。

「こちあ～」

獅子の真似をし出した。

しかし、そのあまりにも可愛らしい獅子に私も姉者も華琳様もみんなで大笑いしてしまった。

それをまた不服そうな目で見てくる蓮。

蓮が来てからはなんだかみんな笑うことが多くなったみたいだ。

私も姉者も…そして華琳様も…。

私はそのことに少しだけ感謝しながら、蓮の頭を撫でるのだった。

その後。

私は何も言われなかつたのですっかり忘れていたが、きつちり蓮は華琳様にお叱りを受けていたところに追記しておこう。

どんまいだ、
蓮…。

第十九話。それゆけ！ 僕らの春蘭号ー（後書き）

第十九話。終了です！

いかがだったでしょうか？

ちょっとだけ、いつもより長くなっちゃいました。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！

では～。

第一十話。猫耳軍師、現る！

「どうも、ゆつくりしていってね！ でお馴染みの猫」と、蓮です！

前回、春蘭達と街に出て色々と見て回りました。
まあ、少し残念な目にも遭いましたが…。
あの籠は中々外れないし、みんなは笑ってるし…。
うん、災難だつた…。

そんなことがありながらも街を見て回るのは非常に楽しかった。
こここの街も建業の街と同じくらい活気があつたしね。
これも華琳達が日夜、仕事を頑張っているからなのかなーとか思つてみたり。

まあ、それは良かつたんだけど…。

そのせいで華琳さんに大変なお叱りを受けまして……その結果。

「ん？ 蓮、どうかしたの？」

何故か、一日のほとんどを華琳の執務室で過ごすこと…。
俺を監視している訳ですね…。そうなんですね…。

「さうよ、そうじないと貴方はすぐに動き回るじゃない」

むう。

それは確かにその通りなんだけど…。

ほら、あれはね。動物の本能というか、なんというか。

「本能ね……。普通の動物は怪我をしたら大人しくしているものだけれど?」「

まさしく正論を言つてこられる華琳さん。
どうやら俺にて反撃の余地はないよ!です……。

「……」
「やあ」

俺はしじぶしじぶそつ返事をする。

といふか、仕事の手を休めないで俺と会話するとか、何が、そのハイスペックつぱりは……。

華琳の能力の高さに俺が内心で舌を巻いていると、華琳は筆の手を止め、俺の方を向いて来る。

「……もう仕方がないわね」

そう言つと、華琳は俺を抱き上げた。
そして、扉の方に歩き出す。

あ、あれ? いざこへ?

といふか華琳さん? 仕事はいいの?

「とりあえず、急務なものは片付けたわ。……それに私も少し休憩しないと、仕事の効率も落ちてしまうしね」

俺の疑問に華琳はそう答えると、部屋を出て中庭へと向かつ。
なんだかんだ言って華琳は優しいなー、などと思いながら、俺は外に出れる喜びでどんどんテンションが上がっていくのだった。

～SIDE 桂花～

私が提出する書簡を持つて華琳様の執務室を訪ねる。

ああ、今日も華琳様のお顔が拝見出来るなんて…私はなんて幸せな
のかしり…。
どこもおかしな所はないわよね？

私は扉の前で身嗜みを整えると、ゆっくりと扉を開けた。

「華琳様。失礼しま……」

私は笑顔で華琳様のいらっしゃる方に声をかける。
しかし…。

「……あれ？」

華琳様がいらっしゃらない。

いつもならこの時間は仕事をしていらっしゃるはず…。
なのに部屋には華琳様の姿はどこにもなかつた。

休憩でもされているのかしり…。

はあ～。

思わず、自分のタイミングの悪さにため息が出た。

別に急ぎの用ではないのだが、肩透かしを食らつた気分である。

また後で届けに来よつ……。

仕方がないので、書簡を持つて華琳様の執務室を出る。

そして、仕事に戻るために自分の部屋へと帰つていると…。
ふと、中庭が目についた。

そして、そこには金色の髪をした愛しの主の後ろ姿が…。
私は途端に笑顔を浮かべると、華琳様に声をかけよつとした。

「華琳さ……」

「ふうん、そり…。なるほどね…」

しかし、それは華琳様の言葉で遮られる。
誰と話をしているのかしら…。

私はこいつそり隠れると、華琳様達の様子を窺つた。

そして見た。

愚かにもあの華琳様の膝の上に座り込み、頭を撫でて貰い、嬉しそうにしている白い猫の姿を…。

思わず、書簡を持つ私の手に力が入る。

あいつは最近、侍女達が可愛いと噂している…。

そして、華琳様を誑かせている猫…。

確か名前は…そり…蓮…！

私は最近、よく聞くあの猫の情報を頭に浮かべた。

大怪我を負っていた所を華琳様に助けられた。

人の言葉を理解できるくらいの頭がいい。

器量も愛想も良くて、みんなによく可愛がられている。

春蘭や秋蘭達に真名も預けられているらしい。

そして、何より…あの華琳様が溺愛している。

ほら、今だつてあんなに楽しそうに…。

私がもう一度、華琳様達の方を見てみる。

「ふふふ。 そうなの… 春蘭が…」

国宝級と言つても過言ではないような笑顔を、あの猫に向いている
華琳様とそれにこやーと鳴いて答える駄猫。

ああ…華琳様)。

最近、私との時間は減っているのに…その駄猫とは…。

しかし、華琳様に文句は言えない。

まあ、端から言つつもりは微塵もないけど…。

となると、あの駄猫ね…。

ちょっと可愛いからつて調子に乗つて…。

確かに噂の通り、真っ白で可愛いらしい猫だ。

それは認めて上げる。

けど、アンタが笑つていられるのも今のうちよ。一
覚悟してなさい！ ほ、泥棒猫つ！

私がそう胸に深く誓つていて。

あの泥棒猫がこっちに視線を移した。

そしてにゅ～、と私を見て鳴く。

そうなると、当然華琳様も私に気づくわけで…。

「あら、桂花。そんな所で何をしているの？」

「い、いえ。華琳様に提出する書簡を…」

「ひらりを振り返ってきた華琳様にそう言つて書簡を渡す。

咄嗟につまく言い訳できた自分に拍手を送りたい。

「やう、わざわざありがと。でもそれなら、すぐこの声をかければ良かつたんじやないの？」

「や、休憩中に申し訳ないなと思いまして…」

渡した書簡に目を通しながら、華琳様がそう言つて来る。
さすがに覗き見ていたとは言えなし…。

「もう、そんなに気にしなくていいのよ。はい、問題はないわ。
このまま進めて」

「はい、わかりました」

そう言つと、華琳様は私に書簡を渡してくれる。

仕事の方に問題はなかつたようなので、ほつと一息ついた。すると、今まで大人しくしていたあの駄猫が華琳様の服の裾を引っ張る。

「こらつ！ この駄猫！」

華琳様のお召し物に触るな！

ていうか、いつまで膝に乗つているのよ！

今すぐそこを退いて、私と変わりなさい！

「ん？ ああ、そうね。紹介してあげる。この子は私の軍師をしてくれている荀？ よ」

「「いやん！」

私がそんなことを考へてゐる間に、華琳様が私の紹介をしていた。そして、よろしくとも言つよつに可愛らしく鳴く駄猫。うつ、ちよつと可愛い。

「桂花。この子は蓮よ。聞いたことはあつたかもしれないけど、直接会つのは初めてでしょ？」

「は、はい」

駄猫の紹介をしてくれる華琳様に私はなんとか返事をする。もしかしたら、声が少し上擦つていたかも知れない……。

「「いやう？」

それをこの猫は感づいたのか。

わたしの方を見て少し頭を傾げ、不思議そうな目で私を見てくれる。
くるりとした真っ赤で無垢な瞳…。

思わず、この猫を撫でようとして伸びた手を慌てて止める。

騙されではダメよ、桂花！

「こいつは敵。

」こいつは敵なのよー！

私がそう自分に言い聞かせていると…。

「もしかして桂花は猫が苦手だったの？」

私の動きを見ておかしいと思つたのであらう。
華琳様がそう聞いてきた。

「えつー!? いえ、そんなことはありませんけど…」

実際に、猫が嫌いというわけではない。
わけではないのだけど…この猫は…。

「私はもう仕事に戻らないといけないの。だからその間、蓮を見て
てくれないかしら?」

「は、はーー！」

「それじゃあ、お願ひするわね

「つて！……あつ！ 華琳様」

思わず返事をして、しまったと思つた時には全部が遅かつた。
私にそう言い残すと華琳様は仕事に戻つてしまつ。
残つたのは空しく響いた私の言葉だけだつた。

私ががっくりと肩を落としていると…。
目の前にあの駄猫がやってきた。

「なによ…？」

私は駄猫を睨みながらそう言った。
しかし、駄猫は何もしないで、ただ首を傾げているだけだつた。
そして、私の横に座ると大きく欠伸をし出す。

「はあー。何かバカらしくなつて來たわ

私はその姿を見てため息を吐ぐ。

思えば、私は猫相手に何をやつているのか…。

猫に嫉妬するとか何か人として終わつてる氣もするし。

「つ！ いやつ…」

「え…？ ……あつ、『ごめん。痛かった？』

ちよつとむしゃくしゃした私は少し乱暴に駄猫を撫でる。
すると、駄猫は痛みが走つたのであろうか。身体をびくつとさせた

後、弱々しく鳴いた。

さすがに悪いことをした思い、私が謝ると…。

「二 も、二 もー」

少し、震えた声で駄猫…蓮が鳴く。

大丈夫と言っているのだろうけど、やせ我慢なのは見え見えだった。もう仕方がないわね…。

「もう、大人しくしてなさい…。アンタが早く治らないと華琳様も心配されるから

私はそいつと蓮を自分の膝の上に座らせて、今度は優しく撫でて上げた。

蓮の毛はモフモフして、すべすべ撫で心地がいい。

これは癖になってしまったと言っていた侍女達の言つ通りだった。

しばらくの間、私がその毛並みを堪能していると…。

「……みゅう……」

蓮の寝息が聞こえてきた。

どうやら、何時の間にか眠ってしまったみたいだ…。

「もう…少しだけよ…」

まだ片付けないといけないもの残っているが、今、蓮を起こすのは忍びない。

華琳様にも任せていることだし、しばらくそのままにしてあげよ。

やつよ、これはあくまでも華琳様の「命令だからあります、もう少しよつと撫ででたいなーなんて少しも思つてなんていない。

思つてないと言つたら、ないのだ！

そう誰かに言い訳をしながらも私の手が止まる事はなかつた…。

その夜、とある部屋にて…。

「ひーーー、全然終わらなーーー。これも全部あの駄猫のせこよーーー！」

必死に筆を動かしながらやう言ふてる猫耳と。

「くわーーー！」

寝台に寝ながらくしゃみをしてこの猫の姿があつたところはまた別のお話である。

第一十話。猫耳軍師、現る！（後書き）

第一十話。終了です！

いかがだったでしょうか？

猫耳さんの登場でした。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！

では！

第一十一話　いつだつて、みんなとわざつて、わづ廳つてる。（前書き）

シコトアスつぽこです。
「」注意を…。

第一十一話　いつだつて、どんなときだって、やつ廳つてる。

「んぢゃーす。

どいつも、華琳に拾われてそなへり一ヶ月にならうとしている蓮です。

突然ですが、私は前の暇な」とは、また違つた別の悩みを抱えています。

実は、もつそろそろ満月なんですよね…。

すっかり忘れてましたけど…。

てか、本当に何も考へていなかつたけど、どつじよつか…。
さすがに人になれるなんて言えない。

もしかしたら物の怪の類と勘違いされて、最悪殺されかねないしな

…。

うん。

あれつて時間が来たらオートで勝手になるものだから、自分じゃコントロールできないし…。
うん、マジでどつじよか…。

俺は自分に与えられた部屋でそんなことを考へている。
いつもなら華琳の部屋にいるんだけど…。

今日は何やらすげべ忙しいらしい。

それと同じように春蘭も秋蘭も桂花もみんな、朝から姿を見ていな
い。

こんな時、侍女さん達が俺を撫でに良く来たりするんだけど、それ

も今日はない。

まあ、みんな忙しいなら仕方がないんだるうか。 実はちょっと寂しかつたり…。

こんな一人でいる時は、少しだけ此のことが恋しくなつてしまつ。 水蓮や雪蓮がバカをやつて蓮華や冥琳がそれを見て、頭を抱えながらも説教して、その姿を祭やみんなが笑つて見てる。

そんなありふれた日常。

俺の大好きな日々。

どうしてもそんな光景を思い浮かべてしまつ。

これが所謂、ホームシックつて奴かもしれないな…。

水蓮はあの後どうなつたのか?
一緒にいた祭も無事なのか?

疑問は尽きない。
不安も尽きない。

俺がいなくなつたからみんなどうしているんだるうか?
雪蓮も蓮華も小蓮も…泣いているのだろうか?

泣いているんだろうな…。

俺の脳裏に泣きじゃくる三人の顔が浮かんだ。

嫌だ。

そんな光景は嫌だ。
たとえ、想像の中のことだとしても…。
見ていたくない…。

ダメだ。

一人になるとすぐこんなことばかり考えてしまう。
こんな暗いことばかりを考えても何にもならないのに…。

そうだ、外に出よう。

俺は寝台から少し勢いをつけて立ち上がる。

こんな嫌な気分のままでは居たくない。
また華琳に怒られるかもしれないけど……まあ大丈夫だよね？

のろのろと歩いて中庭に出ると、俺は空を見上げた。

今日もいい天氣だ。時折、吹いてくるこの風もすゞぐ気持ちがいい。
空はどこまでも青く、そしてどこまでも遠くへと続いている。

うん、ここから見る空も中々だ。

まあ、俺のお気に入りの場所には勝てないけど……。

みんなは今どこで何をしているのかな……。

この空の続く先にいるのかな……。

俺がいなくともみんなは笑顔でいてくれてるのかな……。

元気で……してくれるのかな……。

みんなにはいつだって……。

笑顔でいてほしい。

元気でいてほしい。

そのためだったら俺はなんでもしてあげる。

笑わせてあげることも……。

元気づけてあげることだって……。

そう、なんでもしてあげる。

でも、それは傍にいなきや出来ないことでも……。

傍にいない俺には絶対に無理なことでも……。

今の俺にできることはただ願つことだけ……。

みんなが笑顔でいることを。

みんなが元気でいることを。
みんなが…幸せなことを…。

願うだけ…。

ただ、それだけしかできないんだ…。

あはは。結局、みんなのことを考えてるよ…。
気分を変えに来たのに、一体、俺は何をやっているんだ？
少し、涙も出ちゃってるし…。

俺がそんな風に嘆いていると…。突然、一陣の強い風が吹いた。
中庭に植えられた木の葉が風によつて大きな音を立てる。

そう、まるで俺に何か語りかけているみたいに…。

…そうだね。

今は願うことしかできないのなら…。

もっと強く願おう。

みんなの幸せを…もっともっと強く。

だからみんなの所に運んでくれる?
俺の願いを…。

俺は風に祈った。

どうかこの願いがみんなに届きますように、と…。

（SIDE 華琳）

今日は朝から大忙しだった。

どうやら最近、この辺に賊が現れたらしい。

すぐさま、私達は軍の編成に兵糧の確保。
そして賊討伐のために軍議を始めた。

そのために今日は蓮に自分の部屋について貰つたのだけれど…。

「居ないわね…」

私ははあーとため息をつく。

蓮は一人にすると、こうしてすぐにどこかに行ってしまう。
まあ、大半は遠くには行かず、誰かと一緒にいたりするからすぐ見つかるのだけれど…。

今日は中々見つからない。

…本当にじつとしていない子。

まだ怪我も治っていないといつのに…。

それにも…。

誰かと居る時はじつとしているのに、一人になると途端に動き回るわよね…。

私が蓮の行動について考えていると、突然、ある仮説が頭の中に浮かんだ。

もしかしたら、蓮はじつとしているのが嫌なのではなくて、一人になるのが嫌なのかもしれない。

「…まさか、ね」

まったく何の根拠もない考え方。

普段なら一笑に付してしまいそうな考え方。

だけど、それは中庭に一人佇む蓮の姿を見て確信へと変わった。

そう、蓮は中庭にいた。

そして青い空の遠くをただぼんやりと眺めている。

何を考えているのかはわからない。

何がその瞳に映しているのかもわからない。

けど私は確かに見た、蓮の瞳から静かに零れ落ちる涙を…。

何を想つての涙なのかはわからない。

何かを嘆いているのかもしれないし、誰かのことを想つてのことかもしれない。

しかし、蓮のその深紅の瞳から零れた涙は…。

純粋な想いの結晶は…。

今まで見たどんな宝石よりも綺麗だと思つた。

私はあの子のことを勘違いしていたのかもしれない。
私はあの子は太陽だと思っていた。

人の心に元氣を『与えてくれる。

みんなに笑顔を与えてくれる。

そんな暖かな太陽だと思っていた…。

でも違うのね…。

あの子の本質は月。

静かにすべてを包み込んでくれる。

暗闇でも誰も迷わないように優しく照らしてくれる。
けど、どこか儚さを持つている…そんな月。

放つて置いたらそのまま消えてしまいそうな蓮の姿。

そんな蓮を見て私は思つ。

ああ……。

やつぱりあの子は美しい……。

その瞳に宿る強い意志が。
その身に纏う優しい空気が。
その心が持つ純粋な想いが。

あの子の在り方が美しい……。
どこか気高く、儂い……その在り方が……。

あの子のすべてが美しい……。
そう……。あの子のすべてが……。

欲しい……。

私は純粋にそう思つた。

あの子が……蓮が……。
欲しい……。

ずっと私の傍に置いておきたい。

私は心の底からやつぽつ思つた。

でもそれは叶わないものだと頭のどこかで悟つてもいる。

蓮には…帰る場所があるのだから…。
いつかは帰つてしまふのだから…。

そんなことを思つていると…。突然、強い風が吹いた。

すると、どうだらうか。

さつきまで泣いていた蓮が今度は祈り始めた。
その顔はすぐ優しくて、どこか愛おしいそつな顔だった。

私はぎりっと、歯を噛みしめる。
それと同時に私は自分の中に黒い感情が湧き上がつて来るのを感じ
た。

…いいわ。

私は欲しいものは必ず手に入れるの…。

だから蓮…。

貴方を必ず、手に入れて見せる。

そのためなら…私は…。

でも今はそんなことを考えている場合ではないわね。

私は浮かんできた考えをすべて仕舞うと、蓮の下へと歩き出す。

泣いている蓮もいいけれど、笑顔の蓮の方がもっといい。
だから今は素直に蓮を愛でましょ。う。

私が満足するまで…。

すべてはそれから…。

そう。その後からでもいい…。

第一十一話　いつだつて、みんなとわだつて、わづ騒つてる。（後書き）

第一十一話。終了です！

いかがだったでしょうか？

むむむ。ちょ、華琳さん！？

あれ…？ おかしいな…どうしてこうなった…？

誤字脱字がありましたら、「報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！

ではでは。

閑話。水蓮道場！（前書き）

30分で書いた駄文です…。
お手を汚してすみません。

関話。 水蓮道場！

水蓮道場はただのへんてこコーナーです。
少しキャラが変になつてるかも…。

なお、本編とは一切関係ありませんので、「注意を…」

「どうも～！ みんな大好き、水蓮道場。始まるよお～！」

「…………」

「ちよっとお～。蓮も何かいいなさ～～」

「……いや、なこと。これ？」

「何つて… 水蓮道場でしょ？」

「いやいや、それだけじゃわかんないから…」

「え～。まー、簡単に言つとね。ほら蓮が魏に行つちゃつたでしょ

？」

「まあ… そうだね」

「それで奥の方の出番なくなつちゃつたから、とりあえず救済処置
…みたいな？」

「……正直、いらなくないか？」

「むふ。弟子一号ー。わつまつとは思ひても言わないものよ」

「いや、何故に俺のポジションがそこなの?」

「だつて。髪が白いし、皿も赤いじゃない。ほりやの格好も中々似合っているわよ?」

「男にブルマが似合つわけないだろー。だいたい俺のビニローフ要素があるんだよー?」

「まあ細かい」とはいのよ。されでは、さて本題なんだけど……

「俺の意見は無視ー?」

「あーー! もう、うるせこわね。そんなことだから、華琳ちゃんが少し病んじやったのよ……」

「うーーそれは……たぶん氣のせこじや……」

「今日更新した話を見ればわかるじゃなー。ビー見ても、あれはダーグサイドに落ちてたわよ……」

「…………トイ」

「チヒストーー!」

「痛つ……。おー、うーー。こきなり南海霸王で叩くなよー。」

「現実から田を逸らしかつとした罰よー。それに大丈夫、これギャグだから……」

「もう聞ひ問題じゃないよね！？」

「いいつたらいいのよ。それより弟子一号。このままでは貴方はバツトーンでまじめりよー！」

「えー？ まさかそのせいでこの企画が…。師しょー、俺はビリすれば…」

「ふふふ、安心しなさい。すぐ簡単な方法があるわ」

「それは一体…？」

「私の出番を増やせばいいのよー…」

「…………いや、そんなドンドンって効果音が付きそうな感じに胸を張られても…」

「私なら華琳ちゃんの魔の手からでも守つてあげられるわよ？ それに私の出番も増えるし…」

「完全に後半が本音だよね…。あーやだやだ。これだから死亡フラグを立てた奴は…まだ完全には消えてないし…」

「チヨストオオオオ…！」

「グエッ！ いつたあー！ し、師しょー、その剣は本当に痛いであります！ もっと優しいものにしてくださいー！」

「却下。人が気にしていることをこうよくなバカ猫は道場三週！」

ほら、きつきり走りなさい！」

「えー、なんで俺が…」

「この水蓮スタンプが欲しくないの？」

「ちえ。わかつたよ、走つてきまーす」

「ふう、行つたわね…。さてさて。最近、少し作風変わっちゃったかなと作者がちょっとだけ悩んでたり…。のんびり分も少し足らなりような気もするし……本当、困ったものよね」

「でもまあ、このままでもいっかなーなんて思つちゃってるから、たぶんこのまま行くんでしょうけど…。初めの感じが好きな人には少し申し訳ないな、と思ってます」

「水蓮ー？ なんか道場の前に竹刀持つた女人がいるよー？」

「竹刀ぶんどつて追い返しなさい。後、ここでは師匠と呼ぶよーに…」

「はーい。つと、女人追い返しましたー。なんかパクんなーとか言つてしまひたけど…」

「それでよろしい。それにこれはパクリではないわ。パロディイよー！」

「はあ…そっすか」

「さて。結構長くなつちやつたけど、今回まじままでね」

「え？ 続くのこれー？」

「物語はまだまだ始まつたばかり。これからは乱世へと突入していくわ。その中で猫として生きていく蓮。華琳ちゃんも病んじやつたし、物語はこれからどう進んで行くのか…」

「あれ？ もうまとめに入っちゃつた？」

「次回は視点を眞の方に一回、移るわ。苦惱しているあの子達に蓮の願いは届くのかしら？」

「…………」

「とうわけで今回の水蓮道場はここまで！ また本編でお会いしましょうね」

「…………」

「もひ、蓮。すねないの」

「だつて…」

「ほり元氣出して。最後くらいは一緒に言つわよ。」

「…ひん」

「「それじゃあ、また見てね～」」

「あつ、あとユニークが10万人を超えたわ。みんなありがとう」

「どう考えてもメインはそれだよね！？」

閑話　水蓮道場！（後書き）

といつわけで、ユニーク10万人記念でした！

とりあえずやつた方がいいのかなーと思つてやつたんですけど…。
ただもう一度とやらないかな…。

会話文だけとか難しすぎるし…。

まあ。そんなわけですが、これからも『我が家のお猫様！』を読んでいただけると嬉しいです！
では～。

第一十一話　また会えると信じて…。

（SIDE雪蓮）

戦いの後、母様は倒れた。

そして、今でも母様は床に臥せつていてる。
医師の話だと、心の臓が悪いらしい。

もう王の激務には耐えられないそうだ…。

私達と劉表軍と戦いは結果的には勝利した。
だけど、それで得たものは何もない…。

代わりに私達はたくさんの中を失った。

先祖縁の土地を…。
呉に住む民達を…。

私達の誇りを…。

私達の平穏を……。

「そう、全部失つた…。
いや、正確には違う…。」

「……すべて奪われた。」

「……ところが、孫策さんには賊の討伐に行って貰いたいんですよ～」

「「つむ。妾のためにも早く行つてくるのじやー。」

「…………」

私は謁見の間で、私達からすべてを奪つた相手…袁術の目の前にいる。

正直、今にも斬り殺してやりたくて、殺氣が滲み出しそうになるのを必死に我慢している状態だ。

「「ひーー… 孫策！ 何とか言つたらどうなのじやー。」

「あの～、孫策さん～？ ちゃんと聞いてるんですか～？」

黙っている私が気に入らなかつたのか。
袁術が声を張り上げてくる。

袁術の声を聞く度に腹の底から沸々と怒りが湧いてくる。

その横にいる張勲のどこか伸びのある声もそれに拍車をかけた。

「……わかつたわ。行けばいいんでしょ、行けば…」

それでも今の私は袁術の客将なのだ。
命令は聞かなければならぬ…。

「やうじやー 初めからやうじなれば良このじやー ゃー」

「それではよろこべお願いしますね~

「…」解

形だけの礼をして謁見の間から出る。
そして、長い廊下を抜けた後…。

「くそつー。」

私は近くにあつた壁を殴りつけた。

固く握った拳から血が出てくるが気にしない。

もう限界だった…。

物に八つ当たりしても何もならないことはわかっている。

けど、我慢出来なかつた。

惨めだった……。

あんな子供に扱き使われなければいけないことが……。

悔しかつた……。

自分にみんなを纏める……惹きつける力が足りなかつたことが……。

私は弱い。

どんどん離れていく家臣達を引き留めることが……。
呉が壊れていぐのを止めることが出来なかつた。

そして、結局はこの様……。

本当、呆れてものが言えない。

ねえ、蓮。

私はどうしたらいいのかな……。
もうわからなくなつちやつた……。

「あつ……。あはは……」

私はそう考へて、思わず笑つてしまつた。

もつ蓮はいな……。
いないのこ、私はすぐこいつをひつけて頬うつとしている。
……縋るうとしている。

本当に私は弱いわね……。
こんななんじや……。

ダメだつてわかっているのに……。

私はぼんやりと空を見上げた。
真っ青に晴れ渡った空に綿のように浮かぶ白い雲。

そう言えれば、蓮は空が好きだったわね……。

いつも時間がある時に蓮はお気に入りの場所で空を眺めてた。
私や蓮華も何度も一緒に眺めたこともあつたつけ。

私は懐かしい日々のことを思い出す。

あの時はすぐ綺麗に見えたけど、今は余り綺麗に見えないわね……。

でもそれは何も空に限ったものじゃない。
海も……河も……山も……そして月だつて……。

全部、蓮がいなくなつてからはどこか違つて見える。
世界のすべてが輝きを失つたように……色褪せて見える……。

それは蓮華やみんなも同じみたいで…。
みんなから笑い声が…笑顔が消えた。

もう少ししたら、みんなバラバラになってしまつのに私はただそれ
を見ているだけ…。

何て声をかけていいのかもわからない。

蓮がいなくなつて初めて氣がついた。

私達はこんなにも蓮に支えて貢つていたといふことを…。

昔から傍にいたから氣がつかなかつた。

私達はこんなにも蓮から笑顔を貢つていたといふことを…。

最近、私はよく昔の夢を見る。

私や蓮華にシャオと母様と蓮。

家族みんなで楽しそうに遊んでる夢。

でも、楽しい時間はあつといつ間に過ぎちゃつて…。

そして夕方になると、突然、蓮が走り出す。

蓮は一度もこっちを振り返らないで、ただただ遠くへと走つていってしまつ。

私も必死に追いかけるんだけど、どうしても追い付かなくて…。

なら行かせなこよひつて、走り出す前に必死に手で歯もつとかる
んだけど。…。

まるで空氣みたいにすり抜けちゃって何も掴めない。

そのまま時間になつて…結局、蓮は走りだして、いなくなつたりやつ。
そんな夢…。

そして目を開けると、もう朝になつてて…。

私に残つたものはすゞしこ喪失感だけで…。

最近はそんな夢ばっかりを見てしまつ。
我ながら女々しことも想つナビ、見てしまつ。

ねえ、蓮…。

昔、蓮は言つてくれたわよね？

ずっと傍にいてくれるって…。
話を聞いてくれるって…。

私はあの時、すごく嬉しかったのよ?
王になるのは大変なことだけれど……頑張ろつて思えたのよ?

ねえ、なんで……？

なんで傍にいてくれないの？

私の傍にずっといてくれるんじゃなかつたの……？

ねえ、答えてよ……蓮……。

私は空に向かつてたくさんの疑問を投げ掛けた。
答えが帰つて来るはずなんて、あるわけないのに……。

何度も……そう何度も……。

どこのへりこ時間が経つたのだろうか。
気がつくと、空が少し赤くなってきた。
どうやらかなり長い時間、ここに居たみたいだ。

「早く帰らないとまた冥琳が心配するわね」

私はそつまつと、帰るために歩き始めた。
けど、それはすぐに止められることになる。

それは一陣の風だった。
少しだけ強い……けどどこか暖かい風。

「……蓮？」

気がつけば、私はそう呟いていた。

蓮だ……。

今、蓮の声が聞こえた……。

もちろん近くに蓮が現れたわけじゃない。
でも私は確かに聞こえた……感じた……。

蓮の声を……。

蓮の暖かさを……。

あの風の中で感じた。

蓮が……。

蓮が生きてる。

私の勘も蓮が生きてるって教えてくれている。

何より、さっきのは間違いなく蓮だった。
絶対に間違えるわけがない……。

蓮は生きてる……。

今もどこかで…私達のことを想ってくれてること…

私のすべてが歓喜している。

身体中が震え、ぽろぽろと涙も出てくる。

良かつた。

本当に良かつた…。

生きているのなら、きっとまた会える。
いつか、きっと…。

けど、それなら泣いている場合じゃないわよね…。

心のどこかに残っていた冷静な部分で私はそう考えた。

私は湧き出で来る涙を拭つ。

そして、頬を一度大きく叩いた。

蓮が生きているのなら、蓮の帰つて来る場所を取り戻さなきや…。
いつまでもこんな所で腑抜けている場合じゃない。

きっとまた会えるから…。
私は私のするべきことを…。

～SIDE冥琳～

袁術の所に行つた雪蓮の帰りが遅い…。

私はそれをずっと待つていると、雪蓮は夕方になつて戻ってきた。

私は文句を言おうと思つたが、雪蓮の顔を見て、すぐにそれを止めた。

最近、どこか陰りのあつた雪蓮の顔ではない。
以前の…いや、それ以上に今の雪蓮は霸氣に満ちている。

何があつたのかはわからないが…。

これなら…今の雪蓮ならきっと出来る。
失くしてしまつた黒をきっと取り戻せる。

そう思い、私は内心で喜んだ。

まあ、外には出さないように向とか必死に耐えたが…。

「冥琳、ただいま」

「ああ、雪蓮。おかえり。遅かつたな……」

「「」め～ん。ちょっと寄り道を、ね？」

「ふん。少し、待たせ過ぎだぞ」

私達はそう言つと、一人して笑いあう。
そして少しの間、そうしていると、雪蓮が口を開いた。
その目を真剣なものへと変えて……。

「……眞琳。私はすべてを取り戻すわ……。だから、私に……」

「言わなくてもわかっている。元より、私の知はお前と孫眞のため
にあるのだから」

雪蓮の言葉を遮つて私はそつと言つた。

今更、力を貸してくれなんて言葉は必要ない。
だからお前は王らしく堂々としていればいいんだ、そんな想いを込
めて……。

「やつか……。それじゃあ眞琳。頼りにしているからね?」

「ああ。私も頼りにしているからな。雪蓮?」

「ふふふ。まつかせなさい」

私の言葉にそう返してくれる雪蓮。

そういえば、こんなやり取りも久しぶりだな……。
さて。やる気のある雪蓮に早速仕事を与えるか……。

「それでは、まずお前が片付けていない書簡からだな。頑張れよ？」

そう言つと、私は雪蓮の前に大量の書簡を見せた。
積み重なつた書簡は山のようになつてゐる。

「えー？ これ、全部…？」

「そう、全部だ」

私がそう言つと、雪蓮は汗をだらだら搔き始め、少しづつ後ろに下
がつていく。
逃げる氣だな…。

「……ま、まあ、明日から頑張るってこと…」

そう言つて逃げよつとした雪蓮の腕を掴む。

ふふふ。逃がすわけがないだろ？

お前がしないと私がすることになるのだからな…。

「い・ま・か・ら・だ！」

「ふえーん！ 寅琳のいけず～」

私はそんな雪蓮の声を聞きながら思つた。

これからきつと呪を取り戻して見せる。
それがどんなに困難な道であつても…。

雪蓮と…皆と一緒になら、必ず出来る。

やつて見せる。

なあ、そりだね! へ。
雪蓮…。

第一十一話　また会えると嬉しい。　（後編）

第一十一話。終了です！

いかがだったでしょうか？

県からの視点でお送りしました。

誤字脱字がありましたら報告をお願いします。
あと感想などもお待ちしています！
では。

第一二十三話 シュガー＆スパイズ シュガー編（前書き）

更新が遅くなつて大変すみません！

一週間ほど原付で行く、ぶらり一人旅をしてました。
尻が非常に痛いです。。

ああ。来週から学校なのに…。

まあ、そんなこんなで第一二十三話です。

どうぞ！

第一二三話 シュガー＆スパイズ シュガー編。

～SIDE華琳～

「…………以上のことから、孫堅……いえ、その娘の孫策は袁術の下で密将をしているようです」

「…そう。ありがとうございます」

私は秋蘭の報告を聞いて考え込む。

蓮の飼い主は江東の虎とも言っていた、あの孫堅だった。
まあ、今は床に臥せつていてるみたいだけ……。

「孫策……英雄の娘にしては大したことないのかしらね……」

「……詳しいことはまだわかりませんが、臣下たちを纏める力はなかつたものと思われます」

「…………そう」

私がふと漏らした言葉に秋蘭が答える。

孫策……。いづれ私の霸道の前に立つ障害にはならないのかしら……。
なら尚更、蓮を返したくないわね……。

「それで、蓮のことは……？」

「……『ひうやり』敵兵の攻撃から孫堅を庇つたようです。元々は孫家の

守り神とも呼ばれていたようでした……

「なるほど、ね」

守り神、か。

猫には大層な名だけれど、あの子がそう呼ばれても何も不思議には感じなかつた。

寧ろやつぱり、とも思つてしまつ。

「あの、華琳様。その蓮には……」

秋蘭が少し心配そうな顔をして私に聞いてきた。
彼女は言つてゐるのだろう。

蓮に今の孫策達の状況を話すのか、と。

「…今はまだ止めて置きましょ。あの子のことだから話を聞けば、そのまま飛び出して行つてしまつそうだわ」

「はい…。わかりました」

秋蘭も同じ意見だから、あの身体でも無理をして孫策の下に帰つてしまつだらう。

私がそう言ひと、大きく頷いた。

あの蓮のことだから、あの身体でも無理をして孫策の下に帰つてしまつだらう。

私達にも懷いてはいるが、やはりまだあちらには勝てない。

そのことを少し悔しく思つてると、ふと頭にある考えが浮かんだ。

足の腱を切つてしまえば、自分では帰れないんじゃないかな……。

いや、それはダメね。

そんなことをすれば、あの子は私を嫌うでしょう。

それは私の本意ではないわ。

となると、やはり一度返してから奪い取るのが一番か……。

その時に孫策が英雄になつていれば、尚の事おもしろい。

私の霸道に綺麗な華を咲かせてくれるだらう。

まあ報告を聞いた限りでは望み薄だけれども……。

私がそんなことを考えていると、ガチャリと扉が開き、小さな来客が現れた。

その来客……蓮は、すぐさま私の下にやつて来て、膝の上に飛び乗つてくる。

これはかなり珍しいことだつた。

蓮が自分から甘えてくることは余りない。

秋蘭にはよくして来るらしいが、少なくとも私は蓮が自分から膝に乗つて來ることは初めてだつた。

「あら、蓮。どうかしたの？」

「『』やん」

そのことをほんの少しだけ嬉しく思いながら私がそう聞くと、蓮が答えてくる。

ちよつとだけ匿つて、と。

その言葉に少しだけ疑問を感じてみると……。

「蓮―――― ビード！ ビード―――！」

外から春蘭の大きな声が聞こえてきた。
なにやら怒っているような声色だ。
その声はどんどん近づいてくる。

そして蓮が身体を小さく丸めた時。

「失礼します！ 華琳様！ 蓮の奴めはここに来ませんでしたか！？」

怒りの表情をした春蘭が入ってきた。
そして私に蓮の行方を聞いてくる。

私はちらりと自分の膝に目を向けた。
机があるので春蘭からは見えないが、勿論、そこには蓮がいた。
その蓮はこっちに懇願の眼差しで見てくる。

はあ～と内心でため息をつくと私は口を開いた。

「……蓮はここには来てないわよ。それよりも春蘭、少しは静かに
しなさい。今、秋蘭と大事な話をしているの……」

「…すまない、姉者。今は報告中だ…」

「えつ！？ あ、すみませんでした。華琳様！ それでは私はすぐ
に退散します！」

そう言つと春蘭はそそくさと部屋を出でていった。

もう報告は終わっていたのだから少し可哀想なことをしたわね。

秋蘭にも話を合わさせてしまったし……。

それでも……。

私はそう考え、ほつと息を吐いている蓮をじろりと見る。

「……蓮。姉者にまた何かしたのか？」

「蓮。正直に言いなさい。許すかどうかはそれで決めるわ」

「ここ、ここやん！」

私と秋蘭で蓮を問い合わせると、蓮が少し慌てて口を開いた。

なんでも春蘭が楽しみにしていた桃まんを食べてしまったらしい。
しかも期間限定品で今日までしか作っていない代物だったとか。
それで一応は謝ったけど、許してくれなくて追い掛けられた、と。

「「はあ～」」

私と秋蘭は同時にため息を吐いた。

なんとくだらない理由なのか。

まあ春蘭らしいけれども……。

といふか正直、猫が桃まんを食べるなども言いたい……。

「ここやん！」

あ～、そうなの。

餡子が好きなのね……。

意外な好物を聞いたわ。

「好きなのはわかつたが…。蓮、口に餡子が付いているぞ」

秋蘭がそう言つと蓮の口を布で優しく拭き取つた。
確かに良く見てみると白い餡子が付いていたみたいだ。
しかし私にはそのことよりも気になつたことがある。

「……秋蘭も蓮の言葉がわかるの？」

「はい。以前はなんとなくでしたが、最近は割とまつきと…」

「…やつ」

知らぬ間に秋蘭が蓮語を理解したようだ。
決して猫語とは言わない。他の猫の言葉は私にも全然わからないもの…。

まあ、それは一回置いておきましょう。

「それでどうするの？」

「姉者はあの様子だと簡単にほんじてられないぞ?」

「こやう…」

私と秋蘭がそう言つと、耳をへたりと下げて落ち込む蓮。
そしてうるうるとした目を私達に向けてくる。

くつー！これは反則的に可愛いわね…。
しかも何故か力を貸してあげないといけないよつな氣にもなつてしまふし…。

私がそう思つてゐると、隣の秋蘭も何かに耐えているような顔をしていた。
「どうやら秋蘭もなにやらダメージを受けたみたいだ。

仕方がないわね…。

もしかしたら、私は少し…いやかなり蓮に甘いのかもしれない。
そう思いながら私は蓮に聞いてみる。

「さう言えど、今から街の視察に行くのだけど、貴方も着いてくる
？」

「こやん？」

蓮はまだ少しつるんだその手を私に向けながら、こやんと頭を傾げる。

その戦闘力は53万を超えていたと私は後世に伝えよう…。

「今日限定のものなのだろう？ 姉者は今から兵の鍛錬で行けない
が、私と華琳様は街に出る。その時にその桃まんを買えばいいだろ
う」

私が何やら訳のわからないことを考へてゐる間に、秋蘭がまだよく
わかっていない蓮に話をする。

「本当に秋蘭は頼りになるわね。完璧といつてもいいくらいだわ。
鼻からその赤いものさえ出していなかつたのならね…。

「こやん！」

話を理解した蓮は今度は眩しいくらいに嬉しそうな顔をして頷いた。
まあ、もう仕事は片付いたのだから少ししゃらいはいいわよね…。

私はそんなことを考えながら、私たちを急かす蓮を連れて街へと向かうのだった。

（SIDE秋蘭）

私達は街の視察に出るといつも畠で桃まんを買いに来た。
まあ、今日の仕事はもう片付いていたし問題はなにもない。
ただ、華琳様は蓮には本当に甘いんだなと思つて少し笑つてしまつたが…。

さて、今の問題はそこではない。

前は姉者の頭の上に乗つていた蓮だが、今回ほんしだけ違つた。

「蓮…。降りる気はないの？」

「いやーん」

そう、今回の蓮は華琳様の肩に乗つているのだ。
華琳様と肩乗り蓮…。

くつ！ これもなかなかの破壊力だ！

しかし、本当に危なかつた。

もし前みたいに頭の上に乗ついたら…。

私は華琳様に醜態を見せてしまつところだつただろう。

「…そう。まあ、そこが良いというのなら別にいいけれど……」

居心地がいいから降りる気はないよ、という蓮に華琳様はびつともいいようにそう答える。

しかし、私は見逃さなかつた。

一瞬だけ華琳様が嬉しそうな顔をしたことを…。

蓮もそれに気付いたのか華琳様の顔に頬ずりをしている。それを華琳様は少し照れながら受け入れていた。

いかん、鼻から熱い情熱が…！

私は慌てて鼻を押さえた。そして呟く。

「もうひ臕き出しているじゃないか…」

目的の桃まんを買った後、私達は服屋に寄つた。
まあどちらかといえば布地を主に売つている店だ。

なんでも蓮に着せる服を華琳様が自らの手で作るらしい。
今も楽しそうに布地を蓮に合わせながら、考え込んでくる。

その姿は城では中々見れないものだ。

蓮は余り乗り気ではなさそうだが、今度着せ替え人形になるのは確定している。

蓮…。頑張るんだな…。

「こ…」

「こ…」

ほらほら、そんな風に落ち込むな。

私も少し楽しみにしているんだから…。

「こ…やん！」

私がそう笑いながら言つと蓮は恨めしそうにそつ言つた。
ぶるーたす、お前もか！ つてぶるーたすって何なんだ？

そんなこんなで楽しく視察をしていると、人が集まっている所があつた。

その中央で何やら騒がしくしている男もいる。

「曹操だ！ 曹操を呼べっ！」

その男の必死そうな言葉を聞いて私は思つた。

今日のこの楽しい時間はもう終わつてしまふんだな、と…。

第一二三話。シユガ- & スパイズ シユガ-編。（後書き）

第一二三話。終了です！

いかがだつたでしょうか？

本当に更新遅れてしません。

感想返しも今から急いでしますね～！

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！

ではでは。

第一十四話 シュガー＆スパイズ スパイズ編。

前回のあらすじはこうだ…！

ここらで悪さをしている鬼の筆頭…桂花の農に嵌められた俺は魏の忠犬こと…春蘭と戦うこと…。あいつの怒りを鎮めるためには伝説のキーアイテム…限定桃まんを手に入れなければならない。

しかし、この身はまだ万全ではなく、街まで一人で行くことは不可能だった…。

そんな時、俺の前に現れた二つの影…。

二人は絶望に打ちひしがれている俺に救いの手を差し伸べてくる…！

おおっ！ 猿と雉ではないか…。つて、ぐはあ！

ちよっ、いきなり殴らないでも…。あつ、すんません…。猿とか言つてすんません…。

ま、まあとにかくこうして新たな仲間を手に入れた俺は、華琳様と雉の秋蘭をお供に街へと向かうのだった。

待つていろよ！ 桂花め！ おにハチ公を仲間にしたらすぐに退治に向かつてやるからな…！

そんな気合いを入れていた俺達の前に、新たな男の影が…！ 果たして奴は敵なのか…味方なのか…。

答えは風だけが、知つている…。

それではまた次回をお楽しみに！

俺はお猫道を突っ走るぜー！

……つて感じでどうかな…？

「…いや、もうなんか突っ込むのが面倒だ」

俺がうまく現状を教えよ'つとしたが、どうやら秋蘭はお氣に召せないらしい…。
むう。我ながら、中々うまく出来たと思ったんだけどなあ。
桃まんと桃太郎をかけてるとことか…。
次回は熱い展開が待ってるよ、的なことか…。

「そもそも、桃太郎というのがよくわからないんだが…。あと現実逃避は良くないぞ、蓮」

ちえ、いいじゃん、少しくらいこせ…。
それで華琳、あれはどうするの？
俺は田線で華琳にそう聞いた。

今も、男は華琳を呼んでいる。

その手に持つ刃物を小さな女の子に向けながら…。

「…私を御指名なのでしょう。なり行くしかないわね」

「…しかし、華琳様…。もしも、とこいとあります…」

「その時はその時よ。私は逃げも隠れもしないわ」

秋蘭が一応止めようとしたが、華琳がそれを聞くはずもない。
まあ、秋蘭もわかつっていたみたいだけど…。

それにもしても、あの男は何がしたいんだりうね。
身なりからすれば、賊なんだろうけど…。

それにしては焦った様子がないし、要求も華琳を呼べと言つものだけ…。
つて、ああ、簡単だ…。

みづあるこあこいつは……。

「私に恨みでもあるんでしょうな…。私は覚えていないけれど…」

華琳が俺の言葉を引き継ぐようになつた。

その顔はいつもと変わらない凜々しいものだったが、どこか影があるように俺は見えた。

恨まれるのには慣れているとでもいうような…。
疲れたような…諦めたような…そんな顔に見えた。

「まあいいわ。早速、行くとしまじょつか

華琳は俺を秋蘭に手渡すと、男の下へと歩き出す。

俺は秋蘭の手に抱かれながら、その背をただ見つめるのだった…。

華琳が人込みに近づくと、さひと道が開いた。

そこをゆっくりとした足取りで歩き、華琳は男と対面する。

そして少しの間、男を見つめると口を開く。

「呼んでいたようだつたけれど、私に何か用かしら？」

「つーへー、早々に本人の『』登場かよー！」

男は一瞬だけ、いきなり現れた華琳に驚いたような顔をしたが…。
すぐに鋭い目付きになると、華琳にそう言つた。

「あら、私の顔は知つているのね？」

「ああ、知つてゐるさ。忘れたこともない…」

男の苦々しいとこりより、強い恨みの籠つた声や目を向けられても
華琳は涼しい顔をしている。

それが余計に男をイラつかせているよひにも見えた。
「忘れるわけがない…。前にお頭や仲間をみんな……殺した、お前の顔はなつ！」

「…そう。それでこんなことを始めた、というわけね

納得、といった感じで華琳は頷く。

なるほどね、と俺も思った。そういうことなら華琳のことを恨むだろうな…。

とはいって、賊の討伐はお仕事だから仕方ないんだけど…。

「そうだ！ 僕はお頭に拾つて貰わなつたら死んでたんだ…！ 親も助けてくれる者なく、頼れる者もいない…。食うものもなければ、住む所もない…。そんな俺にお頭は…飯をくれた、住む所をくれた。…暖かさをくれた！」

「…………」

華琳は男の主張を黙つて聞いていた。

男の話は今の世ではよくあることだった。
悲しいことに今は、食べることに困った人たちが賊になることだって珍しいことではないのだから…。

「俺以外の奴らもみんなそうだった…。俺にやつと…やつとできた…家族だったのに…！」

男はその目から涙を零しながら、華琳を今まで以上の目付きで睨みつけた。

しかし、華琳はまったく動じない。

ただ男を静かに見つめているだけだった。

「それを…全部…全部お前が奪つて行ったんだ！」

俺は男が手に持つ剣に力を入れたのを感じた。

秋蘭もそれに気付いたのか。

俺を下に置き、剣に手をかける。

「だから、俺は…お頭の…みんなの仇を討つー。」

男はそう叫び、人質の女の子を手で押しゃると…。

そのまま華琳へと突撃してくる。

「つー 華琳様！？」

それに合わせて秋蘭が華琳の前に立つたが、他ならぬ華琳に手でそれを止められた。

……どうやら華琳が自分の手でケリを付けるらしい。

「つおおおおおおーー！」

「…こいでしょう。その思いにも…その業も…私がすべて背負つわ

氣合を入れて剣を振るつてくる男に華琳はやつぱり、自らの剣を抜く。

その時の顔はまさしく王といつにに相応しいものだった。

「…だから、安心して逝きなさい…」

男を斬る瞬間。

華琳がそう小さく呟いたのを確かに俺は聞いた。

そして、表情を少し歪めたのも見てしまった。

しかし、それはほんの一瞬だったので他には誰も気がつかなかつた
だろ？。

「……秋蘭。後の事をお願い」

「はい、華琳様」

華琳は剣についた血を払つと、秋蘭にいつも表情でそう言った。
さつきの面影はどこにも感じられない。

秋蘭はその言葉に頷くと、駆けつけて来ていた兵に指示を出し始め
る。

「……蓮。戻るわよ

「……いやー

華琳は倒れている男を一瞥すると、俺に声をかけてきた。

俺はそれに返事をして華琳の肩に飛び乗り、その場を後にする。

城までの道のりの中で俺は考え込んでいた。

勿論、内容はあの男のこと……ではなく、華琳のことだ。

俺はやっぱりこの子のことが心配だ。

その気持ちちは今日の事でより一層、強くなつた。

華琳は強い。

きっと普通の人よりは絶対に強い。
力もそうだけど、何によりも心が強い。

でも、ただそれだけだ…。

普通の人より、少しだけ賢くて、少しだけ強い… ただそれだけだと
俺は思うんだ。

人はそれを特別だつて言うんだろうけど、それでも限界というもの
がある。

これが本当の悪人なら別にいい。

自分の好き勝手なことをすればいいのだから…。

でも華琳は違う。

この子は善人だ……そして、何より優しい。
だから、何でも自分で背負おうとする。

別に背負う必要のないものまで背負おうとしてしまつ。

俺は自分の乗る華琳の肩を見る。

俺が乗るだけで隠れてしまつよつた、こんな小さな肩にどれだけの
ものが乗っているのか…。

人々の希望や期待、恨み、嫉み… たぶん色んなものが圧し掛かって
いる。

それは簡単に捨てられるものではないし、華琳も捨てる気はないだ
ろつ。

：彼女には必要なんだと思う。

彼女を本当の意味で支えてくれるものが…。

前に華琳が、私は霸道を行くと、そう俺に言つていた。

霸道は茨の道だ。他者を下して一番上に立つ……そんな孤独な道だ。

だからこそ彼女には必要なんだ。

春蘭や秋蘭、桂花でもダメなんだ。

あの子たちはどうしても主と家臣になつてしまつから…。

下からじゃなくて…後ろからじゃなくて…。

隣に…傍に…ずっといてくれるものが必要だと俺は思うんだ。

本当は俺がその役目をできれば何も問題はないのだろうけど…。

残念ながらそれは出来ない。

俺にはもう支えてあげないといけない人たちがいるのだから…。
大切な人たちがいるのだから…。

気がつけば、もう空は真っ赤に染まっていた。
俺はその空を見上げて心から願う。

願わくば華琳の全部を支えてくれる人が現れますように。

そんなことを思っていたからか、俺はすっかり忘れてしまっていた。
今日が何の日なのかということを……。

じつめに對面までの残り時間は、もう少しないらしい……。

第一十四話 シュガー＆スパイス スパイズ編。（後書き）

第一十四話。終了です！

いかがだったでしょうか？

少し長くなりそうだったのでここでキリました。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！

では。

第一一十五話 気持ち。（前書き）

難産だつたぜい…。
くそ…。やっぱり小説つて難しい…。
まあ、書くのは楽しいんですけどね！
では本編です！
どうぞ！

第一十五話 気持ち。

困った…。

マジで困った…。

ど、どうすればいいんだあああーーー！

辺りが暗くなつた頃。

俺は部屋の中で一人、絶叫していた。

勿論、外から見たらにゃーとしか聞こえないんだろうけどね。いやしかし、本当に困つた…。

朝からなんだかんだバタバタしてて、頭の中から綺麗をつぱりと消えていた衝撃の事実。

そう、あれだよ…。

今日は満月の日だつたんだよつ…！

さつき何気なく外を見るまで気がつかないとか、本当に俺は何をやつてるんだか…。

まだ刻限までは少し時間があるとはいえ、これはいかん。いかんですよおおおおー！

幸いもう夕食は食べたし、春蘭には桃まんも贈呈して許して貰つたし…。

誰も部屋に来なければ、問題はないんだけど…。

そう上手くこくとは思わない。

希望的観測はしない方がいいと俺の第六感が叫んでるし……。

とはいって、外をうろつくのはどう考へても危険だ。

この国の奴らはどうも男嫌いな氣があるらしいしな……。

特に桂花とか桂花とか桂花とか……。

うん。見つかったら確実に死亡フラグ一直線だ……。

まあ、でもここまでお世話になっているのに騙すのもな……。
申し訳ないというか、なんというか。

そんな氣も少しあるわけで……。

でも騒がれるのはもつと困るわけで……。
はあ～。マジでどうするよ？

俺がそんなことをぐだぐだと考へていると、扉の前に人の気配がするのに気がついた。

やばっ！ 時間もうあんましないのに……！

「……蓮。いるの？」

俺の気持ちを余所に、そんな声と共に華琳が部屋へと入ってきた……。
そして、無言のまま俺を膝の上に乗せる。

突然の襲来に慌てた俺だったが、それはすぐに収まった。

「？」

いつも、華琳の様子がいつもと違うのだ。

いつものどこか威厳のある空気は鳴りを潜めて、今は何も感じられない。

いや、寧ろ弱々しい感じだ。

身体の具合でも悪いのかと一瞬思ったが、今日一日、そんな様子はなかつたよなと考え方直す。

となると気持ちの問題か……。

「こやん？」

とりあえず、どうかしたのかと俺は聞いてみる。

まあ、十中八九、街であったことが原因なんだなうにねえ。

華琳は何も言わずに俺を撫でてているだけだったが、少しの時が経つと徐に口を開いた。

「……蓮。私は間違ったことをしていいのかしり……」

その声はとても小さいものだった。

囁くように紡がれたその言葉は、今にも途切れてしまいそうだ。
そこには今の華琳の気持ちが籠つてこるよつに感じた。

「…………」

でも俺は何も言わなかつた。

ただ黙つて華琳の言葉を聞いていく。

華琳はそれでも構わないのか、さらに言葉を続けていった。

「……頭ではわかっているわ。納得もしていいつもり……。すべて

の人を救うことなんて出来ないってことは……。みんなで仲良くな
んて出来ないってことは……」

たぶん、華琳の頭には昼間の男のことが浮かんでいるのかな。
いや、もしかしたら今まで討つてきた賊達のことが浮かんでいるの
かもしねり。

「民達の暮らしを乱す賊は討たなくてならない……。だけど、元は彼
らだって救うべき民だつた。……皮肉なものよね。彼らは自らの手
で、自らと同じ境遇の人を増やしていくのだから……」

勿論、それだけではないのかもしねり。

人を殺すのが好きだつていう、腐つた奴らだつて中にはいるだろう。
でもそんな奴は少数だ。

他の人の大半は、生きるために仕方なかつたんだと思う。

さつき華琳の言つた通り、すべての人を救うことは出来ない……。

辛いことだけど、それが現実なんだ……。

……でも華琳は本当は救いたかつたんだね。
討ちたくなんてなかつたんだよね。

「そうして始まる負の連鎖……。奪われた人は今度は別の人から奪う。
そしてその人もまた別の……そんな繰り返しばかりが起つて、結
局はどんどんそんな人達が増えていく……。でもその大本は何？
——番悪いのは一体何なの？」

でもその負の連鎖を止めるためには、討たなくちゃいけなかつた……。
仕方ないなんて言わなければ、それしか方法がなかつたんだ。
どこかで止めないと、もつと大きくなつてしまつから……。

華琳の独白はさらに続していく。

声にも少し熱が入つて来ているみたいだ。

「一番悪いのは、人々が賊にならないと生きていけないようにしてしまった……この国でしょう！ 民から税を奪うだけ奪つておいて、救いを求めても助けようともしない。本当に腐つてる国…。私はこの国が嫌い…大つ嫌いなの！」

華琳はそう言つた。

それは口頭の華琳なら思つても絶対に言わないことだらう。この国に仕えているのものが完全にこの国を批判したのだから…。でも、きっとこれが華琳の原動力といつか、根本にあるものなんだと思った。

「力のある者がその力を十分に發揮できるだけの環境を作る、それだけでももつといい国に変わるはず…。それなのに、自分達の利益ばかりを求める偉い奴らはそうしようともしなかつた。だから決めたの…。私は霸道を歩むと…。他人の血で真つ赤に染まつた、この道を歩いて行くと…！」

もしかしたら、初めは華琳も中から変えようと思つたのかも知れない。

でも、それは無理だとわかつてしまつたんだ。

そこまでこの国が末期だつたんだう。

こんな歳の女の子が霸道を歩むと決めてしまつような現実。

そして、実際に華琳にはその道を歩いていく力があつた。

それはいいことなのか、悪いことなのか…。

だけど少なくとも俺にはそれがすごく悲しいものだと感じた。

「……私は王になるの。そして新しい国を作る……！ もうと……もう
といい国を……！」

華琳は力を込めてそつと、撫でていた手を止めた。
そして、今度は俺を強く抱きしめてくる。

「でもね……どうしても思つてしまつわ。今、私にもうと力があつたのなら……。皇帝だつたのならつて……。そうだつたのなら……今を苦しんでいる人達を切り捨てなくてもいいのにっ！ 救つてあげられたかもしけないのにっ……！」

これが華琳の誰にも見せられない姿だ。
今は華琳は王じやない、上司じやない。
ただただ自分の力不足を嘆く、普通の一人の女の子だ。

「『めんなさい』。助けてあげられなくて……『めんなさい』……」

謝り続ける華琳。

その瞳からは少し涙も零れているようだが、俺の毛を少しづつ濡らしていい。

これは俺がしていいことじゃないのかもしね。

いや、多分ダメだろ？

昼間にも考えたけど、俺はいざれここからいなくなるんだから……。

でも、それでも……。

少しの間だけ、誰かが現れるまでの代わりをしてあげてもいいよね

…？

そう思つと、俺の身体が光出した。本当に何ともまあ、いいタイミングである。

「華琳は間違つてなんていない…」

俺は華琳を優しく抱きしめると、そう言つた。
少し力を入れれば壊れてしまいそうなくらい小さい身体は少し震え
ているみたいだ。

「少なくとも俺はそう思つてるよ…」

「えつ…？」

その呟きは声を掛けられたからか。
それとも俺が人になつているからか。
多分、両方なんだろう。
でも、俺はそれを無視して言葉を続けた。

「確かに今もたくさんの人人が苦しんでいる、それが現実だ。だけど、
華琳は華琳にできることを精一杯やつてるんだろう？ それならき
つと間違つてなんてない。だって誰かを救いたいって気持ちに間違
いなんてないんだから……」

「…………」

華琳は自分で割り切つてるつもりでも、完全にはそうじやなかつたのかもしないね。

頭と心は違うものなんだし…。

だつて本当に割り切つているのなら、そんな顔はしないし、あんなことは言わないはずだ。

「でも、華琳がそれでもつて思つてしまつのなら……」

（SIDE華琳）

私は今の状況が理解できなかつた。

気が付いたら蓮の部屋に来つていて、蓮を撫でながら愚痴を言つて、そして何故か泣いていた。

そうしていたら、何時の間にか目の前には男がいて、今度は何故か抱きしめられていて…。

これは一体、どうなつてゐるの？

ただ、私は間違つてなんていない。

その言葉がすごく嬉しいと感じた。

「確かに今もたくさん的人が苦しんでいる、それが現実だ。だけど、華琳は華琳にできることを精一杯やつてるんだろう？ それならきっと間違つてなんてない。だつて誰かを救いたいつて気持ちに間違

いなんてないんだから……」

「…………」

私は何も言わない。

いや、言えなかつた……。

確かに全力でやつてきた。でもそれだけだ。

私は多くの人を救うために多くの願いを踏み躡つてきた人間なのだから……。

「でも、華琳がそれでもつて思つのなら……」

私がその言葉に顔を上げると、私の方を優しい目で見つめている男がいた。

白い髪に、赤い目。首には鈴も付いている。
その男……蓮は私に優しい口調でそう言った。

「今は泣こう？　華琳が思つている、助けてあげられない悔しさも……辛さも……。助けてあげられられなかつた人達のことも……全部……そう全部を絶対に忘れないために……今は思いつき泣こう？」

「…………」

私は泣くわけにはいかない……。

弱さを誰かに見せるわけにはいかない……。

そう決めた……。そう決めたはずなのに……。

「いいの……？」

気がついたら、そう言っていた。
自分でも不思議だった。

でも、蓮といふときはいつもやうなのがもしけない。
思えば、蓮といふときの私はいつも霸王の曹操孟徳じゃなくてただの華琳だった。

私がどんなに堅い鎧を身に纏っていても、蓮の前だとそれを脱いでしまっている。

……だから、少しくらい素直になつてもいいわよね。

「いいよ……。だって元気には、華琳と……ただの猫が一匹いるだけなんだからや……」

私は蓮のその言葉を聞くと、その胸に頭を預けて泣いた。
それはもう久しづぶりに思いつきり泣いた。

蓮はただ、優しく私の頭を撫ででいるだけだった。
後から聞いた話だと、涙には人の体温が効くらしい。
……悔しいけれど、まさにその通りだった。

私は泣き止んだ後も蓮の腕の中にいた。
ゆっくりとした蓮の心臓の鼓動と温かい体温を感じてると、私の
瞼が重くなつて来る。

「ん？ 眠くなつたのか？ …お休み、華琳」

「……ええ。お休みなさい」

蓮にそう返すと私は静かに瞼を閉じた。
起きたら、蓮に色々と聞き出しても心で誓いながら……。

第一一十五話。気持ち。（後書き）

第一一十五話。終了です！

いかがだったでしょうか？

誤字脱字がありましたら「報告をお願いします。
あと感想などもお待ちしています！
では～。

第一十六話　一難去つてまた一難　ぶつちやけありえない！（前書き）

今回、少し長めです。

つまく長さが調整出来なかつた…。

あつ、あと感想返しに更新したつて書いたんだですが…。

予約連載にしてました。本当にすみません。

第一一十六話　一難去つてまた一難　ぶつかりやけありえない！

「…………すう…………すう…………」

「…………はあ～」

俺は眠つてゐる華琳の頭を撫でながら、小さくため息を吐いた。

やつひまつた。

うん、まさこにこの一言を呟きた。

孫家の人に間以外に初めてあの姿を見せてしまった。

まだ祭達にも見せたことなかつたのに……。

後悔は別にしていいけど、なんか悪いなーなんて思つた。

よし、帰つたら、みんなにも見せるか。

あつ、でも水蓮が文句言いそうだなー。

まつ、いいか。なんとかなるでしょ。

れども、流石にそのままじやあ華琳も寝辛いだらうし、寝台に運ぶ
か。

俺はそう思つたので、眠つてゐる華琳をひょいと抱き上げた。

まさこその時……。

「華琳様、ここに……」

華琳を探しに来た様子の春蘭が扉を開けた。

そして、華琳を抱えている俺を見て、硬直する。

俺はとこりとい、尋常じやなこへりこの冷や汗が出てくるのを感じていた。

今、一言だけ残すとしたら……俺、この場をつまみく凌いでだら沢山お魚を食べるんだ、である。

はい。死亡フラグですね、わかります。

「…………」

「…………」

「ん、姉者？ 蓮の部屋にもこりしあったのか？」

そのまま少しお互い見つめ合っていると、春蘭の横から秋蘭が声をかけて来る。

ああ。フラグの強化ですね、わかります。、

さらに秋蘭が声をかけたものだから、春蘭が再起動。

俺を指差して、口を開く。

「く、く、く、く…………」

「くつまんじゅうへ、

もしくは栗金団？
いや、クレー射撃かもしれん。

俺は首を傾けながら、そんなことを考えた。

どうやら俺もこの状況に少しテンパっているみたいだ。

「ぐ、曲者だ！！ 華琳様を攫おうとする曲者が現れたぞーー！」

ああ、曲者だつたのね…。

全然、惜しくなかつたわ。

ん、待てよ。

まさか曲者つて俺、ですか？

ち、違うよね？ 嘘だよね？ 「冗談だよね！？」

「何だつてー？ き、貴様！！」

春蘭の言葉を聞いて、慌てて部屋を覗く秋蘭。

そして俺の状況を見ると、すぐに顔を怒りに染めた。

「「華琳様を放せーー！」

二人揃つてそう言つてくる夏候姉妹。

うん、タイミングもばっちりだ。

さすがに華琳を抱えているからすぐに攻撃してくる様子はないけど、
これは正直やばい。

「ま、まあ、落ち着いて、落ち着いて」

俺は一人を落ち着かせようと声をかける。

しかし、効果はいまひとつのようだ。

今こそ急所に当たってくれよ、と思った俺を誰が攻められようが、

いや攻められない！ 反語！！

「落ち着いてなどいられるか！！ 貴様！ 一体、どこから入つてきた！？ ここは蓮の部屋だぞ！！」

「そういうば…蓮は…。…っ！ その首輪…まさか貴様っ！ 蓮をつ！」

あれ？

なんかさらりに勘違いしてないかな…。

秋蘭の怒りが増して来たんだけど…。

首輪を見たら気付くかなと思つたんだけどな。

寧ろ完全に逆効果みたいだ。

そういうじてこるうちに、続々と人の気配がしてくる。
そいつ言えば…わざと曲者へつて春蘭が叫んだよーな…。

かなり大事になつちまつたよね、これつて。

ああんもう。マジでどうするよ…。

俺がこの場を何とかする方法を必死に考え込んでいると…。

「はあつ！」

俺の顔面目がけて一本の矢が飛んできた。

それを首を横にずらして、口でナイスキャッチ！！

これが犬でフリスピーザつたなら、喜んでくれるんだろうけど…。今はそんなことはないようで…。

さうに追加で三本の矢が飛んできた。
今度は横に飛んでなんとかかわす。

「ちよつ！？ マジですか！？」

矢じりも尖ってるし、当たつたら死んでしまいますよ！？
あ～、殺す氣ですか。そうですか…。
てか、下手したら華琳に当たるからね！ いや、割とマジで…。
俺は抱えていた華琳を背中に背負い直す。
よし！ これで少しばかり動きやすくなつたはずだ。

「くつ！ 姉者！！」

「応つ！？」

秋蘭に氣を取られている間に、接近してきた春蘭が持つていた大剣
を一閃。

見事、俺の髪が数本お亡くなりになられました…。
しかも、間髪入れずに矢も飛んでくるし…。
もう死ねる…。

うん、これはもうあれだ…。

逃げよ！？ もうそれしかないつすよね！

「あ～、うん。あばよ、とつつかあん！」

俺はそう言い残すと、窓を破つて外に出た。
とにかく人のいない所にダッシュです！

走って！ 銀河の果てまで～！

逃げるのに集中していた俺はすっかり忘れていた。
俺が華琳を背負つたままだということを…。

本当にすっかり忘れていたんだ…。

走つて中庭まで来ると、俺は嫌な予感を感じて木陰に退避した。
そして呼吸を止めて、辺りを深く観察する。

すると…。

「チツ！ 落とし穴には引っ掛けないわね！ 親衛隊は五人一組
で辺りを捜索しなさい！ もう城門は固めたから、外には出ていな
いわ。 各員死ぬ気で探しなさい！…！」

「「「「はいっ！…！」」」

桂花が兵達を引き連れてやつてきた。

そして、兵達にテキパキと指示を飛ばしていく。
流石、軍師殿。 でも今は全然うれしくないな～。
てか落とし穴とか何時の間に掘ったんでしょう？

兵達がいなくなつたので、桂花に接触を試みようとしたが…。
どうも様子がおかしい。
小声で何か呟いているし…。

「男のくせに華琳様に触るなんて……見つけたら殺す！ 絶対に殺す！！」

うわーお。気になつたので聞こえる位置に移動したらこの結果ですよ。

声をかけて、なんとかして貰おうと思つたんだけど……。

これは無理そうだ……。

「見～つ～け～た～ぞ～！～！」

俺がこそこそと退散しようとした時、後ろから声をかけられた……。悪鬼や悪鬼があるー！

「げえっ！ 春蘭！！」

「ほう。華琳様を攫つただけでなく、私の真名をも言つか……。すぐさま死ねっ！！」

「…………もつ嫌…………！」

俺は剣を振りまわしていく春蘭から脱鬼のごとく逃げ出した。

この時の逃げっぴは我ながら天晴れだったと思つ。

その後も秋蘭の怒りの矢とか、必死の形相をした親衛隊の奴らとか、桂花の姑息な罠とか色々なものから俺は逃げた。

逃走中なんか田じやねえよ。金とかじやなくて命が掛かってるから

……。

てか、どつちかつていうとリアル鬼ごどだからね、これつ！！
そんなわけで全力で走つたりした俺は、世界新記録とかギネスとか
そんなんちやちなもんを全部ぶち破つた……。

「はあ、はあ、はあ。……撒いたか？」

俺は何とか城壁の上で一息ついた。

動いている灯りが見えることからまだまだ搜索は続いているようだ。
もう勘弁してくれよ、俺の怪我つてまだ治っていないんだよ？

「蓮、それは失敗するときの言葉よ？」

「ああ。確かにそうかも……って、華琳さん…？ なんで……」

突然声をかけられて驚いた俺は、驚いて後ろを振り向く。
そこには…というかなんで俺の背中には華琳の姿が…？

「……貴方が連れてきたのでしょうか？」

少し、不服そうにそりゃうそりとて来る華琳。
俺が連れてきた…？

「…あつ！ そうだった…。だからみんな必死なのか…」

自分の馬鹿さ加減に少し、頭が痛くなつた。
そりや、必死になるわな。

自分達の主を攫われてんだもんなー。

「んで、こつから起きていたんだ？」

「んー、春蘭が真名を呼ばれて、怒っていたところ辺りかしい

この野郎…いや女郎…。

起きてるのならすぐに誤解を解いてくれよ…。

俺、結構死にかけてたんだけど…。

「殆ど、初めからじやないか…。さては楽しんでたな？」

「まあね。それで誘拐犯さん？ 私をどこに連れ去るつもりなのかしら？」

俺の睨みを軽くかわして、まあねと普通に言つてしまつ華琳さん。やつぱり大物でした。色んな意味で…。

今もニヤニヤと笑いながら、変なこと言つてへる…。

「もうだね、誰も追つて来ない所までかな？」一緒に緒してくれますか、お嬢さん？」

ちよつと悔しかったので、俺は少し茶化したように手を差出しながら、そう言つてみる。

しかし、華琳は平然と俺の手を取つた。

むむむ。ここは少し照れるとかしてくれてもいいんじゃないかな。

「それは嬉しいお誘いだけど、そんな場所はないわよ。あの子たちは地の果てまでも追つて来るから」

華琳がさつ言いながら、田線を外に向けると、春蘭の怒声が聞こえてくる。

うわー。まだ探してる…。

怒られてる兵のみなさん。大変！」愁傷様ですー。

「…みたいだね。なら邊の逃避行は」の辺でおしまー、かな

まあ、俺はもう走るのは懲り懲りだけどね。
身体中がまた痛くなつてきまし…。

「せうしましよう。じゃあ蓮、次は楽しい楽しい貴方の尋問のお時
間よ」

「え、つー？」

「当然でしょ？ 乙女の肌に触れたのだから、乙女のへりこで済んで
ありがたいと思ひなセー」

それはそうですけど…。

なんか納得がいきません！

俺ばっかり損している気がするのでありますーー！

「…そういうえば、華琳はあんまし驚いていないのな。結構、みんな
初めは驚くのに…」

雪蓮とかも初めは半信半疑だったのに…。

ああでも、蓮華と小蓮はすごいねえーだつたつけ？

その時の事を思い出すと何か少し笑えてきた。

「…何を二ヤーヤしてこるのよ、気持ち悪いわね…」

「少し思つ出し笑いしてただけなのに…ひでえ言われよつだ

「まあいいわ。私も驚いたわよ？　でも貴方は普通の猫ではないと思つていたし、それに蓮の事でしょう？　深く考えてもどうせわからないもの。それなら直接、聞き出せばいいってね」

そう言いながら黒く笑う華琳。

これはあれだ……。

鳴かぬなら鳴かせてみせようつて奴だ。

まあ、殺してしまえじゃないだけマシなのかな……。

「……わかりましたよ。こいつなったら出血大サービスだ。じょんじょん質問していくよ」

「さーびす、というのは良くわからないけど……まあいいわ。それじゃ、まずは貴方は何者なのかしら？」

こうして俺は華琳の質問に一つ一つ答えていくことになった。

俺が『天』から来たこと。

もう何百年も生きていること。

満月の夜だけ人間になること。

俺が言える範囲のこととは全て話した。

「んで、水蓮を攻撃から庇つて谷底に真っ逆さまに落ちて……」

「……私に拾われた、といつわけね。なんといつか波乱万丈ね」

俺の話を全部聞いた、華琳の感想はそれだった。

それはそうかもしれない。

『天』に居る時はこんな風になるなんて考へてもいなかつたし……。

「まあ、でも楽しよ。確かに沢山の別れもあつたし、悲しいこともあつたけれど…それ以上に沢山の良い出会いがあつたし、嬉しいことや樂しことがあつた。…だから俺はすぐ幸せだつて思つてる」

これは俺の本音だ。

俺はこの世界に墮ちてきて良かつたつて心からそう思つている。だつて毎日がすべく樂しいから…。あつちにいた頃よりもずっと…。

「……じゃあ私との出会いも良かつたと思つていいの?」

華琳は少し顔を伏せると、小さな声で俺にそり聞いてきた。
何を言つてゐんだろうかね、この子は…。
そんなの…。

「当然だろ? 少し意地つぱりで、意地悪だけ…。こんなに優しくて、可愛い女の子に会えたんだ。すこく嬉しことし、良かつたつて思つてゐよ」

「わ~…。ま、まあ当然ね。私に深く感謝すればいいわ

華琳は少しだけ顔を赤くすると、そっぽを向きながらそり言つてきただ。

何か照れている華琳は初めて見たかも…。
うん。これは中々いいものだ。

秋蘭が見たらまた情熱が吹き出してしまつた、これは…。

「ははは。感謝してゐよ…。心の底から、ね」

その後も、他愛もないことを話していくと、夜が明けた。

俺は勿論、猫の姿に戻つたので、部屋に帰ることになったのだけど……。

「「」やあ

「ふふふ。ダメよ、怪我が悪化したのだから我慢しなさい

何故か華琳に抱つこされながら移動することにして…。
まあ、確かに怪我はひどくなつちやつたけどさ。

「あつ、どうせだから今日は一緒に寝ましょいつか？」

「「」やーーー。」

誰が寝るかっ！

といつか俺は一応、人間ですよー？

「でも、今はただの可憐な猫じゃない

何でみんな、人の姿を見ても反応がこいつなの？

お兄さん、泣こちやつよー。

いつもして俺は華琳に連行されましたとさ。

ちやんちやん

一方、その頃。

「華琳様ーーー！」

「くそつ！ まだ見つからないのか！？」

「殺す殺す殺す殺す……」

城内では結構、大変なことになっていたり…。
それは華琳が起きてくるまで続いたとか続かなかつたとか…。

第一一十六話。一難去つてまた一難…ぶつちやけありえない！（後書き）

第一一十六話。終了です！

いかがだったでしょうか？

誤字脱字がありましたら「報告をお願いします。
あと感想などもお待ちしています！
ではでは～。

第一一十七話　流星が降る時。。。 (前書き)

いかん。

最近…一話が長くなつてゐる。

最初の頃の一倍になつてゐる。

第一一十七話　流星が降る時……。

ども。蓮君です！

あれから数か月、経ちました……。

時間を飛ばすなつて？ いやーそんなこと言われても……。

えつ……？

みんな探してたけど、大丈夫だったのかつて？

そこはほら、あれだよ、あれ。

全部、華琳がなんとかしてくれました……。

うん、凄いよね。

あの騒ぎを治めるなんて……。

誘拐犯（笑）は警備の厳しさから途中で諦めて、逃亡したというかなり無茶な話だつたけど……。

華琳が言えばみんな一発で信じてくれました。

流石、華琳様。黒いものでも白いものになるとは……。恐るべしですね。

まあ、秋蘭とかは俺の事もすぐ心配してくれていたみたいで、俺の姿を見た時にはほつと息を吐いていました。本当に色々ごめんね……。

でも、桂花？

俺のヒゲを引っ張りながら、愚痴を言つのは止めて……。

今度見つけたら、絶対に死なすとか言わないで。

俺がその張本人だからね……。

さてさて、時間も経てば怪我もやっと治るわけで…。
なんとか完治した俺はそろそろ具に帰らうかなって思つてこると
こうです。

ちなみに方法はといつと、なんと華琳が雪蓮に手紙を書いてくれる
そうです。

まあ、書く内容はまったく知らないんだけどね…。

その代わりの条件として、迎えに来るまでの間はずっと傍にこなさ
いつて言われたんだけど…。
そんなことでいいのかな…。

まあ、俺に出来ることなんて殆どないわけなんだけどわ…。
猫の手も借りたいって言つけど、実際問題、猫の手は何もできない
わけで…。

でも華琳には恩義があるわけで……正直、困っています。

「…といつわけで、華琳。俺に何かして欲しい」とはないか?
「何がといつわけなのよ…。そつね…」

いつ言つ時は直接、聞くのが一番といつことで、俺は人に戻つてい
る時に聞いてみることにしました。
あつ、ちなみに今は華琳の部屋に匿つて貰つています。
……また騒ぎになるのは勘弁だからね。

華琳は少しの間考え込んでいたが、すぐに顔を上げた。

「別にないわね…。まあ、貴方は猫なのだから愛玩動物らしく、私達に愛でられていなさい」

「…いや、まあ。それでいいのならやつするけど…」

ないんかいっ！ 僕は心の中で突っ込みを入れた。

ううう。俺に出来ることはないのね…。

…これは水蓮達なんか頼むしかないのかな。

自分のケツも自分で拭けないと…。何とも情けない。

「まあ、その話は置いておきましょ。とにかく蓮。貴方は最近、都で流れている噂を聞いているかしら？」

「噂、ね…。いや、知らないけど…」

華琳が話を変えて來たので、俺もそれに乗っかる。

噂、噂、噂…。

一応、自分でも考えてみるが、特に思いつくものはなかつた。

そんな俺の反応を見た華琳は、にやりとした笑みを向けると口を開く。

「もうすぐ『天の御遣い』というものが現れるさうよ。何でも、この国に平和をもたらしてくれるとか…」

「『天の御遣い』ねえ…」

それはまた何というか。凄い噂が出て來たもんだ…。
でも仕方がないのかもしれないとも思った。

そんな噂が広まってしまうほど、世が乱れているのだから…。

「それで同じ『天』から来たといつ蓮はるひの尊ことじだいの思ひどりの
かしら?」

華琳が楽しそうに、そう聞いてくる。

俺がいなければ、気にも留めないただの尊だったのだひつ。
でも俺が『天』から来たと話したから、少しほは興味を持つた訳とい
うだ。

「さあてね。詳しきはわからないけど…。俺と同じ所から来るとは
考えにくいかな…」

俺と同じ所から来る場合なら、それはある意味、島流しみたいなも
のなはずだし…。

この国を平和に導くなんてできるとは思えない。
となると、別の所から来るのはなんだけど…。

「そうなの?」

「ああ、多分だけど…」

「うーん。どこから来るのがね…。
なんか超能力とか魔法とか使えるのかな…。
それなら久しぶりに見てみたいかも…。」

「あら、それじゃあ猫が現れるわけではないのね…」

「…お前、俺の母国を猫の国か何かと勘違いしているだひつ

少しおどかたように言つてくる華琳にじとーっとした目を向ける。

しかし、効果は余りないようだ。

「ふふふ、冗談よ。それはともかくとして…。最近、賊が活発化して来ているわ。…規模もより大きなものになって来ているし…」

華琳は笑みを浮かべていた顔を真面目なものに切り替えると、賊達のことについて話し始めた。

城内でも話にもなっていたけれど、どうも賊達が増えてきているみたいだ。

一つ一つの人数も前より、多くなつて来ているらしいし…。

「…そつか。なら一度、大反乱が起こるかもな…」

「…そうね。……起こりてしまつんでしょうね」

俺の意見に同意すると華琳は少し暗い顔をした。

反乱が起これば華琳の霸道への大きな足掛かりにはなるだろう。今までのような一歩ではなく、多分、飛躍の時になる。
でもそれは…。

「華琳…」

「大丈夫よ。わかっているわ…」

俺が声をかけると、そう返してくる華琳。

はあ〜、全然大丈夫そうには見ないんだけどな…。
…本当に困つた奴だ。

…華琳は華琳の目指す道を進めばいい、脇目も振らずにただ真つ直ぐにさ。……きっとそれがみんなのためになるのだから…ね?」

「…………うん」

華琳は一度頷くと、そつと俺の手を握ってきた。
俺は一瞬だけ驚いたが、少し苦笑すると、その小さな手を握り返してやるのだった。

物語は動きだす……。

時計の針は元に戻すこととは誰にも出来ない。

遂に本格的な乱世が幕を開ける……。
切っ掛けは、一筋の流星からだった。

四…。

「策殿っ！ 空に流星が降っていますぞ！」

賊の討伐の帰り道。

考え事をしていると、隣にいた祭が声をかけてくる。

「流星…？ あら本当ね…」

祭の言葉に従つてそれを見てみると…。

昼間なのにはつきりと輝く流星が見えた。

いつもだったら、気分も高揚したのかもしれないけれど…。

今私はそつはならなかつた。

「雪蓮…。いつものお前らしくないな。まだあの手紙のことを感じているのか？」

「…少しね。でも曹操の言ひことは間違つていないわ…。今の私は力不足だもの」

祭とは逆の位置にいた冥琳が私を気遣つよつて声をかけてくる。そして、冥琳の指摘は大当たりだつた。

先日、私達の下に届いた一通の手紙。
差出人は陳留の刺史、曹操。

内容は蓮のことだった。

蓮は曹操が保護したらしく、今は怪我も治つて来て元氣らしい。それを聞いた時、私はすこく喜んだ。すぐに迎えに行こうとも思つ

た。

でも…。次の文章で私の喜びは消えた。

私は蓮を貴方達の所に返すつもりはない。

その一文を見た時、私は怒りを覚えた。
何を言つてゐるんだ、と。

でもそれも続きを見るまでのことがだつた。

蓮は英雄の隣にいることこそが相応しい。
唯の英雄の娘には過ぎた存在だ。

でも、蓮は貴方達の所に帰りたいと言つてゐる。だから私に証明してほしい。

孫 伯符は唯の孫 文台の娘ではなく、一人の英雄であるということを…。

それを証明して貰えるのなら、私は曹 孟徳の名において蓮を必ず貴方達にお返しすることを誓う。

私の曹操への怒りはすぐに収まった。

そして、今度は自分への不甲斐なさと怒りが湧き上がつてきた。

今私の目に堂々と蓮を迎えて行ける資格がないことがすぐ悔しかつた。

「はあ～」

私は大きくため息をついた。

あれから何日も経つてゐるけれど、そのことが未だに頭から離れない。

い。

「策殿…」

「雪蓮…」

祭と冥琳が心配そうな顔を私に向けてくる。

それを見て、私は思った。

そうだ、私は一人じゃないのよね…。

傍には頼りになる仲間…家族がいるじゃない。

そう思つたら、何だか心が軽くなつたような気がした。

前に気合いを入れたはずなのに…また、私は何をやつているんだか

…。

今はクヨクヨしている場合じゃないのにね。
だから、まずは…。

「二人とも、もう大丈夫よ」

私は二人に笑顔を向ける。

言われっぱなしじゃあ、孫家の女の名が廃るわ。

上等よ！ お望み通り英雄になつてあげようじゃない！

「私は曹操に証明するわ！ 私が蓮に相応しい者だつてことをつー^ト
この身の全力をもつてね！」

「ふつ、 そつか。 ならば私も全力でそれに応えるとするか…。 蓮を
取り戻したいしな」

「ありがと冥琳。 祭もよろしくね」

「策殿……勿論じやつ……」

始めよ!。

蓮を……異を……私達の全部を取り戻すための私達の戦いを……。
始めてい!。」

魏……。

「華琳様つ！――」

「どうしたの、春蘭?」

「二やうん?」

春蘭の大声を聞いて、私は蓮の毛繕いをしていたその手を止めた。
蓮も不思議そうな顔を春蘭に向いている。

「空ですつー、空を見てくださいーーー。」

「空……?」

「二やおつ。」

春蘭が指を差す方を蓮と一緒に私も見てみる。
真つ青な空に一筋の流星がゆっくりと落ちていた。

「…毎間に流れ星…。不吉ね…」

私はその流れ星を見て、そう呟いた。
でも蓮はそうは思わなかつたのか。
じつとただ流星を見つめているだけだつた。
蓮の様子だと不吉なものではないのかしら…。

「…あっちの方角だと……幽州、ですかね」

「ええ。確かに五台山の方角ね…」

流星が落ちた方角を見て春蘭がそう言つてくる。
私の予想でも幽州に落ちたと思つた。それはおそらく正しいだろう。
しかし何故、流星が…。

私が考え込んでいると、蓮が小さくため息を吐いた。

「蓮？ どうしたの…？」

「」やん

それが気になつた私は蓮に聞いてみるが…。

蓮は何でもないと返して来る。しかし、私は見逃さなかつた。
蓮がその後にもう一度ため息を吐いたのを…。

まあ、少し気になつたけれど、今は良しとしまじょう。
さて、孫策はどうしているかしら…。

あの手紙には私の本心を書いた。

ただ袁術の下で燻つて いるような人物ならば…少しの間でも蓮を渡
したくはない。

しかし、孫策が真の英雄ならば…蓮を預けて置いてもいい。
そういう意味で書いたのだけれど…伝わったかしら…。

できれば、孫策が英雄であつてほしいわね。

そして英雄同士、それに相応しい場で雌雄を決して、私は堂々と蓮
を勝ち取る。

ふふふ。こんなに血の滾ることはないわ。

だから始めましょう。

私の霸道のための戦いを…。
始めていきましょつ…。

蜀…。

「お待ち下さい、桃香様。お一人で先行されるのは危険です」

「そつなのだ。こんなお口様一杯のお皿に、流星が落ちてくるなん
て、どう考へてもおかしいのだ」

「大丈夫だよー！」

私は愛紗ちゃんと鈴々ちゃんにそう返した。

二人ともごめんね…。

心配してくれているのはわかつてているんだけど…。

今は急ぎたいんだ。

私達は三人で各地で人助けをしながら旅をして来た。
勿論、初めから三人だつたわけじゃない。

初めは私一人だつた。

今この国はすごく乱れていて、そのせいで悲しい思いをしている
人が沢山いる。
だから、私は旅に出たんだ。

私にも何か出来ることがあるかもしれないから…。
でも、現実はやつぱり厳しくて、助けてあげられない人も沢山いた。
私に力が足らなかつたから…。

でもそんな時に出会つたのが愛紗ちゃんと鈴々ちゃん。
二人ともすごく強くて、村の人達を苦しめていた賊の人達を追い払
つてくれた。
村の人達がお礼を言つている時も、二人は当然の事だよつて言つて
笑つていた。
だからなのかな…。私は一人に私の夢を話したんだ。

みんなが笑つて暮らせる国にしたい。

多分、普通の人なら笑つちゃうような夢だけど…。一人は笑わなかつ

た。

それどころか、力を貸すとも言ってくれたんだ。

それがすごく嬉しくて、少し泣いてしまったのは……今思つと少し恥ずかしいかな。

私は、その時に思つたんだ。

一人じゃ無理でもみんなで力を合わせれば、私の夢も叶うかもしないつて……。

だからそれからは三人で一緒に頑張ってきた。

でも、やつぱり三人でも無理な時があった。

一人の時よりは沢山の人を助けられたけど……それでも限界があった。

そんな時に噂を聞いたんだ。

『天の御遣い』の噂を……。

御遣い様がどんな人なのかはわからないけど……。

話をすれば、私達に力を貸してくれるかも知れない。
勿論、断られるかもしねりだけど……。

それでも……。

そんな思いで、私は流星が落ちた所に走つて向かつていた。

早く、早く、早く。

私がそう思つていると……。

一人の男の人が辺りを倒れていた。

光が反射してキラキラと光つていてる服を着ていてる男の人……。

あの人気が御遣い様だ。

私はそう思つて、走る速度を上げた。

まずは声をかけることから。。
話を聞いても貰うことから。

始めるんだ。

ここから、私達の夢のためへの戦いを。
始めていくんだ。

魏、吳、蜀。

一三三三三國の主役は揃つた。

鍵になるのは一つの『天』。

物語はどうのように動き、巡っていくか。

それは誰にもわからない。

そう……誰にも。

「アーニーさん

… 分

第一一十七話　流星が降る時……。（後書き）

オープニング、スタート……
みたいな感じにしたかったのに……。
うわ～、微妙かも……。

ま、まあとりあえず、第一一十七話。終了です！

いかがだったでしょうか？

一刀君は蜀に墮ちたんだぜ？
あんなに前振りあったのに……墮ちりまつたんだぜ？
でも、一応最初から決めていたので……みなさん、許して下さい！

誤字脱字がありましたら「報告をお願いします。
あと感想などもお待ちしています！」
では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0746w/>

我が家のお猫様！

2011年10月6日15時28分発行